LifeWear Story 100

責任監修 松浦弥太郎

LifeWear

LifeWear Story 100とは。

ユニクロには、
流行に左右されず、
けれども、決して古びることのない、
長い間、作り続けている普通の服がある。
品揃えの中では、
とても地味で目立たない存在である。
コマーシャルにもあまり出てこない。

それらは、ユニクロが、
もっと快適に、もっと丈夫に、
もっと上質であることを、
長年、愛情を込めて追求したものだ。

それらは、ユニクロの人格と姿勢が、
目に見えるかたちになったものであり、
丹精に育てているものだ。

昨日よりも今日を、今日よりも明日と。

手にとり、着てみると、
あたかも友だちのように、
その服は、私たちに、
こう問いかけてくる。

豊かで、上質な暮らしとは、
どんな暮らしなのか？
どんなふうに今日を過ごすのか？
あなたにとってのしあわせとは何か？
と。

そんな服が、今までこの世界に、
あっただろうかと驚く自分がいる。

ユニクロのプリンシプル（きほん）とは
何か？
ユニクロは、なぜ服を、
LifeWearと呼んでいるのだろう？
LifeWearとは、どんな服なのだろう？

ここでは、LifeWearの、
根っこを見る、知る、伝える。
そして、LifeWearと、自分にまつわる、
ストーリーを書いていきたい。

LifeWear Story 100は、
LifeWearと僕の、旅の物語になるだろう。

松浦弥太郎

松浦弥太郎

エッセイスト、編集者。1965年東京生まれ。
2005年から15年3月まで、約9年間、創業者大橋鎭子のもとで『暮しの手帖』の編集長を務め、その後、ウェブメディア「くらしのきほん」を立ち上げる。現在は（株）おいしい健康の取締役に就任。数々のメディアで、高い審美眼による豊かで上質な暮らし提案に努めている。新聞、雑誌の連載の他、著書多数。ベストセラーに「今日もていねいに」「しごとのきほん　くらしのきほん１００」他多数。NHKラジオ第一「かれんスタイル」のパーソナリティとしても活躍。

100 目次

001 目をつむると涙が溢れ出た。 005

002 マシュマロのように真っ白なソックス。 010

003 宝ものよりも「一杯のコーヒーさ。」 016

004 かっこよくて、強くなった。 022

005 従うのか、逆らうのか。 028

006 シャツを着る旅の美学。 034

007 僕は「ニューヨーク」と書いた。 040

008 人生で一番価値のあることは。 046

009 今、この瞬間、何を学ぶのか。 052

010 セーターを着直して、部屋の窓を開けた。 058

011 トラッドなワードローブが揃っていた。 064

012 フリースを着て、カメラを構えた。 070

013 母のキャメル色のカーディガン。 076

014 彼は毎日ストランド書店にいる。 082

015 オーセンティックだから、飽きることはないんだ。 088

016 誰かの役に立つことをすればいいのさ。 094

017 明日の朝はダウンを着よう。 100

018 服とは、着る人を元気にするもの。 106

019 老紳士は一万ドルなら買おうと言った。 112

020 明日着る服が決まっているのは、ほんとうに嬉しい。 118

021 店主は「二十ドルでいいよ」と言った。 124

022 とにかく熟知。熟知に勝るものはないんだ。 130

023 ニューヨークには、古書店がいくつあるか知っているかい？ 136

024 優先順位とは、何かを捨てるということ。 142

025 どんなことでも、まずは自分で考える。 148

026 Tシャツが似合う男になれってことかもな。 154

027 泣きたいときはたくさん泣くといい。 160

028 真っ白なシャツに、黄色いカーディガンを肩からかけていた。 166

029 受話器を取ると、ケンの声が聞こえた。 172

030 シャツを着て、花束を持っていく。 178

031 いつかの自分もこんなふうに家族に愛されていた。 184

032 勝ち過ぎるといつか大負けする。 190

033 同じランクで揃えること。 196

034 料理とは、親切とまごころと工夫。 202

035 頑張りすぎない。無理をしない。 208

036 もっとシンプルに、もっと簡単に。 214

037 ニューヨークが大好きとアシャは言った。 220

038 これはジャックからもらったシャツだよ。 226

039 早起きして朝食を食べに行こう。 232

001

MEN
スーピマコットン
クルーネックT
（半袖）

目をつむると涙が溢れ出た。

旅のはじまり

父も母も大好きだったけれど、いつか家を出ようと思っていた。それは大海原で浮き輪から手を離して泳ぎ出すような無謀なことだとわかっていた。けれども、大人へのあこがれと、自分はもう一人で生きていけるんだということを世界に証明したかった。

サンフランシスコに着いた日の夜、公衆電話に鎖でつながれた電話帳から、ホテルを探して電話をかけた。英語が通じなくて電話は切られた。マーケット・ストリートを歩くと、いくつかホテルの看板を見つけたが、ドアマンがいるようなホテルに泊まるお金は、僕にはなかった。

いつしか強い雨が降ってきた。鮮やかな色をしたネオン管に二十四時間と書いてあったドーナツ屋に入り、コーヒーとシナモンドーナツを注文し、カウンターに座って食べた。

ジーンズのポケットから小さなノートを出して、「エクスキューズミー」と言ってから、ホテル、安い、探している、と単語を書いて、それをひとつひとつ指差しながら、カウンターの中にいた、カーディガンを着たウエイトレスの女性に見せた。

女性は最初、手であしらうような仕草をしたが、小さな声で、僕が「プリーズ」と言うと、足を止め、

両手を腰に当てため息をついて、床に置いた僕の大きなダッフルバッグをじっと見つめた。

女性は僕の手からペンを取り、ノートの余白に、二十ドル？五十ドル？百ドル？と書いた。僕は二十ドルに丸をした。女性は、天井を見て「うーん」と顔をしかめた。

壁に掛けてあった時計を見ると、夜の十時を過ぎていた。シナモンドーナツをひとくち食べた。泣きたくなるくらいにおいしかった。

真新しいTシャツ

ドーナツ屋のドアが開くと、大きな体をした警官がゆったりと入ってきた。警官は、女性に親しげに声をかけた。女性は「ちょうどいい時にやってきた」と言わんばかりに喜んで笑顔を見せた。そしてすぐに僕のことを警官に説明しはじめた。警官は微笑みながら話を聞き、僕のことをちらちらと見た。警官は大きな声で「オーケー」と言うと、僕の目を見て「パスポート」と言った。僕が自分のパスポートを渡すと、「今日着いたんですね。ホテルの予約ナシで」と言って、首をかしげて笑った。

「今日はソファーでいいかい？」と、僕がわかるようにゆっくりと言った。「オーケー」と答えると、大きくうなずいて、「じゃあ行こう」と言って、僕を外に連れ出した。警官は僕をパトカーの後部座席に乗せ、「サンフランシスコにようこそ」と言った。まるで映画のワンシーンのようだった。

そこがどこかもわからないまま、僕は一軒の小さなホテルに連れていかれ、そのホテルのロビーにあったソファーに座らされた。

警官と話し終わったホテルの主人らしき男がやってきて、「明日チェックイン」と言ってから一枚の毛布を僕に渡し、「グッドナイト」と僕の膝を手で叩いた。警官は僕のためにと、一袋のドーナツを置いていつしか去っていた。

ホテルの主人は、僕の着ているTシャツが、濡れているのを見て、困った顔をし、どこかから新しい真っ白のTシャツを持ってきた。「ほら、これに着替えなさい」と言った。

僕は言われるがまま、Tシャツを着替え、毛布をかぶって、ソファーで猫のように丸くなった。真新しいTシャツの乾いた肌ざわりが嬉しかった。なぜかその時、母親の顔が思い浮かんだ。

小さな声で「サンキュー」とつぶやくのが精一杯だった。目をつむると涙が溢れ出た。けれども、明日の朝が来るのが待ち遠しかった。

僕の旅がはじまった。

FUNCTION 1

極上の着心地を

光を受けてつやつやと輝く表地、しっとりと肌に馴染む肌さわりは、まるでシルクのよう。使われているのは、**コットンの中でも最上級の素材「スーピマコットン」。**繊維が長いほど上質とされるコットンの定義の中で、繊維長35mm以上という超長繊綿だ。

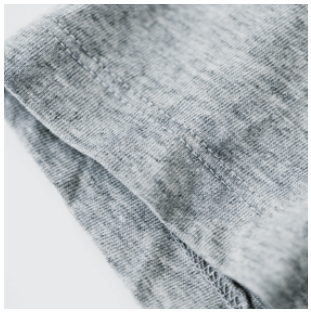
繊維の細さがもたらしてくれるのは、極めて少ない肌摩擦。洗いをかけていくほどに、コットンの風合いは増していき、さらなる、しなやかさと柔らかさを肌で感じることができるはず。白の風合いの良さはもちろんのこと、カラーバリエーションの発色にもこだわりが現れている。極上の着心地だけでなく、**カジュアル、ドレスアップに対応できる淡麗さも魅力。**着ればわかる、いわゆるTシャツを超えたTシャツの進化形。

FUNCTION 2

上質の更新を

変わりゆくファッションのトレンドと、アイテム展開の潮流を考えながら、**数ミリ単位の仕様の改善点に作り手の姿勢が見えてくる。**首回りのリブ幅を変更、袖周りをすっきりと動きやすく、裾と袖口のステッチ幅を細くして、スーピマコットンの上質さを最大限に活かしたTシャツだ。

ジャストサイズでの着用がおすすめ。男性ならジャケットをさらりと羽織ったり、女性ならカーディガンと、首元にストールを巻いてもいい。きめ細やかな光沢が上質さを担保してくれるから、コーディネートを、より品のあるスタイルに仕上げてくれる。**決してキメすぎず、でもカジュアルになりすぎない“ちょうどいい”バランス演出**が、「スーピマコットンTシャツ」の底力。



001

MEN
スーピマコットン
クルーネックT
（半袖）

洗い立てを着て、
ネックを指でぐっと一度伸ばして、
首元にゆとりを作る。
こうすると一気に着こなしが洗練される。
お試しあれ。

松浦弥太郎

MEN
スーピマコットン
クルーネックT（半袖）
¥1,000 ＋消費税

2017.6.13

002

MEN
ショートソックス

マシュマロのように真っ白なソックス。

朝、目を覚ますと

聞きなれない英語のざわめきに包まれていた。そうだ、僕は、サンフランシスコに着いた日の夜を、ホテルのロビーのソファーで過ごしたのだ。

深いため息がひとつ出た。僕は目をこすって起き上がった。

サンフランシスコの朝は肌寒かった。雨はすっかり止んで、窓から見える空が目に眩しかった。

よく見ると、ロビーに置かれた家具は、てんでバラバラで、ロビーというよりも、誰かの家のリビングのようだった。古いピアノが一台あったが、テーブルとして使われていた。

時計の針は七時を指していた。人だかりの理由は、テーブルの上に置かれた、ひと抱えほどの大きさの紙の箱だった。

寝間着を着たままで、いかにも今、目覚めたばかりという姿容をした老若男女が、紙の箱から何かを取っては、散り散りに去っていった。ほとんどの人が裸足だった。

その不思議な様子をぼんやり見ていると、黒髪でショートカットの女性が、紙の箱を指差して僕に何かを言った。

早口の英語で何を言っているのかわからなかった。

僕は「うんうん」とうなずいた。すると、眉間にシワを寄せながら、紙の箱から茶色いかたまりをひとつ取って僕に手渡した。

「ブ・レッ・ク・ファー・ス・トの・ドー・ナ・ツ」と、女性は口をつぼめながら言った。

「一人ふたつ。毎朝七時にロビーに届く。これがここのホテルの朝食。時間に遅れると無くなるわよ」と言い、英語が理解できているかを確かめるように僕の目をじっと見つめた。

僕は「ありがとう」と言った。

ドーナツは、真っ白いグレーズがたっぷりとかかって、大きくて、ふわふわだった。「またドーナツか……」と思った。

かじると、口のまわりがグレーズだらけになった。「おいしい」と呟くと、女性は「悪くないでしょ」と言った。

そうこうしていると、支配人が身体を揺らしながらやってきた。昨夜、僕がホテルにやってきた経緯を、その場にいた人たちに、面白おかしく話した。しかし誰一人、僕のことなど無関心だった。支配人は、チェックインをするために、こちらへどうぞ、と指で僕を呼び寄せた。

一泊二十ドルと支配人は言った。何日泊まるかと聞かれたので、「二週間」と答えた。支配人は、宿泊代の合計を紙に書いて見せた。そのとおりに現金を払うと、「ようこそわが家へ」と微笑んだ。

僕はほっと安心して、笑みがこぼれた。

サンフランシスコに着いてから、まだ一日すら経っていないのに、とても長い旅をしたような気分だった。

父と母に葉書を書こうと思った。

白いソックス

部屋は狭くて、シャワーは共同。ラジオはあったけれど、テレビも電話もなかった。しかし、五階だった部屋の大きな窓から望める、サンフランシスコの景色は美しかった。

ホテルの地下には、ランドリールームがあって服の洗濯が出来た。

ある日の午後、洗濯をしようとランドリールームに行くと、洗濯機に片手をついて、足をすっと伸ばし、バレエのポーズらしきをしている若い女性がいた。

「こんにちは」と声をかけると、びっくりした素振りを見せてから、小さな声で、「こんにちは」と言葉を返してきた。

僕は、空いている洗濯機に、服と洗剤を入れ、ふたを締めた。スイッチの入れ方がわからなくて困っていると、「スイッチはここ」と、女性は親切に教えてくれた。女性は首筋に汗をかいていた。

「ありがとう。あの……あなたはバレリーナですか?」とたどたどしく訊ねると、「近くにあるバレエ学校に通っているの」と女性は答え、自分の洗濯物を、大きなバスタオルで、ばさっと包んで、ランドリールームから出て行った。

ランドリールームは、洗剤の甘い匂いが充満していたが、妙に落ち着く場所だった。僕は洗濯と乾燥が終わるまで本を読んで過ごした（読んだのは、ジャック・ケルアックの「オン・ザ・ロード」だ）。

洗濯した服の乾燥が終わると、彼女の真似をして、バスタオルに服を包んで部屋に戻った。そういうちょっとした、それまでしたことがない外国風のやり方を真似して、いちいち身につけていくのが嬉しかった。

部屋のラジオをつけるとジャズが流れた。服をベッドの上に広げると、自分のものではない、マシュマロのように真っ白なソックスが片方だけ混ざっていた。

ソックスは、コットン製で、そのやわらかな風合いがなんとも言えず愛らしく、飾って眺めていたいと思うくらいに外国を感じるものだった。

きっとこのホテルにいる誰かのソックスだ。ランドリールームの棚に置いておけば、きっと持ち主が気づくだろう。僕はランドリールームに戻った。

すると、さっき会ったバレエ学校に通っている女性が、洗濯機や乾燥機のふたを開けて何かを探しているようだった。

「もしやこのソックス、あなたのですか？　僕の服に混ざってました」と言うと、「あ、それ、私のソックスです！　無くしたかと思って探してたの」女性は、照れながらも、嬉しそうな笑顔を見せた。

ソックスを手渡すと、女性は「ありがとう。じゃまた」と言って、ランドリールームを出て行った。

僕は、急に胸がどきどきして、困ったような気持ちになった。

いつかの初恋の気持ちを思い出していた。

FUNCTION 1

毎日履きたい

抜群のフィット感を追求した、毎日履きたくなる、くるぶし丈の「スポーツソックス」。**土踏まず、かかと、足首をしっかりホールドするサポート、メッシュ素材を取り入れてムレにくくした甲の部分、足底には、ふかふかのパイルでクッション性を高めました。**

日常使いのスニーカーを履く時は、足首から少し覗く色味を楽しんだり、スポーツする時は前後左右にずれないフィットを実感していただけるはずです。ほどよいボリュームがあるので、トレンドのスポーツサンダルと組み合わせてみるのもオススメ。

そして**メンズのすべてのソックスには消臭機能を持つ糸を使用。洗濯してもその効果は続いていくのです。**履いた時の美しいつま先が、すべてのクオリティの高さを物語ります。

FUNCTION 2

秘密は、かかと裏に

素足で靴を履いているかのように、足元を軽やかに見せてくれる「ベリーショートソックス」は、履いているうちに脱げてしまうのが悩みでした。

そこで**編み地にテンションを持たせる工夫をしました。そのテンションが、足サイズの小さな人にはフィットして、大きな人には伸びる働きをします。**かかとの収縮性がアップしホールド感が増しています。**かかと裏のラバーも加わり「脱げにくい、ズレにくい」が実現しました。**

ソックスをくるりと裏返した時、
普段、見えないところの縫製が、
なんてきれいなんだろうと驚いた。
くやしいから毎日履いている。
けちつけたくてもひとつも見つからない。

松浦弥太郎

MEN
パイルメッシュ
ショートソックス
¥390 ＋消費税

MEN
ベリーショートソックス
¥390 ＋消費税

2017.7.11

003

MEN
ヴィンテージ
レギュラーフィット
チノ

宝ものよりも「一杯のコーヒーさ。」

テンダーロイン

独りきりになって、はじめて気づいたことがある。目をつむると、母や父、姉、友だち、よく知る親しい人、いつか会ったあの人、そんな人たちの顔が、ふわふわっと瞼の裏に浮かんでくる。

時には煩わしいとさえ思った人たちなのに、今、遠く離れた外国の地で、独りきりになってみると、その微笑んだ顔が、とっても大切に思えて仕方がない。

今朝、ホテルのロビーで朝食を食べている時、「君の家族のことを話してごらん」と、ここで友だちになったアルフレッドに聞かれた。

その時、僕は生まれてはじめて、自分の家族一人ひとりの人格というか、好きなところを言葉にしようとした。日本で暮らしている時は、家族なんてそこに居るのが当たり前だったから、うっとおしいとか、めんどうくさいと思うところは考えても、好きなところなんて考えたことすらなかった。

そうした時、僕は、家族や友だち、知人に至っても、誰一人、嫌いと思う人はいないとわかった。無視をしたり、あいさつさえしない時があったくせに、実は大好きなんだ。しかも、心の底から、「いつもありがとう」という気持ちが湧き上がった。

「会えなくてさみしい?」

僕が黙っていると、「今日は街を歩くといい。ホテルの前の道をどこまでもまっすぐ歩けば海に出るよ」と言って、アルフレッドは席を立った。

僕は、さみしくてさみしくて、たまらないから、さみしいと言ってしまうと、つらくなると思った。

ホテルのドアを開けて、外に出ると、サンフランシスコのまぶしい陽射しが僕を包み込んだ。僕は一日二十ドルと決めた生活費をポケットに入れて、海に向かって歩き出した。

道の角にあったコーナーショップでミネラルウォーターを買った際、レジの女性に「この街は、なんていう名前ですか」と聞くと、何言ってるのこの人?という顔をされながらも、「テンダーロインよ」と教えてくれた。

道端のゴミ箱に、野球ボールがいくつも捨てられていた。僕はその中の一個を拾ってポケットに入れた。アメリカ製の野球ボールなんて、僕にとっては宝もの。今日はなんて良い日なんだろう。

僕はチノパンの裾をくるくるっとロールアップして、レブンワース・ストリートという名の道をどんどんと歩いた。

大切なもの

坂の多い街、サンフランシスコ。ホテルのあるテンダーロインから、レブンワース・ストリートを北へと歩いた。

クリーニング屋、生活雑貨や食料品を売るコーナーショップ、簡易食堂やバー、そして、かわいらしいビクトリアン様式の住宅などを横目に坂をどんどんと登っていく。

「疲れたら、立ち止まって空を見上げるといい。そうすれば元気が出る。下を向いたらもっと疲れるぞ」

子どもの頃、父から言われた言葉を僕は思い出しながら歩いた。そうだ、前を向いて歩こう、と。

レブンワース・ストリートを、横切るカリフォルニア・ストリートまで登ると、街の景色がすっかり変わった。空に近くなったというか、街がすっかりきれいになった。

小さな古本屋があった。中を覗くと、猫が一匹いて、その奥で痩せた老人が一人で本の整理をしていた。

ドアノブを回すと、鍵がかかっていた。僕を見た老人がどこかのボタンを押すと、鍵がカチャリと開いた。

「こんにちは」と声をかけると、老人はにこっと笑って、「やあ」と言った。寝転がった猫の背中をなでると、

ぐーんと大きく伸びて、白いお腹を見せた。「元気かい」と老人は言った。

老人の手元に、表紙に海賊ジョン・シルバーが描かれた、ロバート・ルイス・スティーブンソンの『宝島』があった。

「ジョン・シルバーは好きかい?」と老人は僕に聞いた。そして、「ジョン・シルバーはいいやつだ。彼こそが海の男だよ」と言った。

「はい、僕もシルバーは好きです。その本はいくらですか?」僕は『宝島』が無性に読みたくなって聞くと、「十五ドル。いや十ドルにしてあげよう」と老人は言った。

この本を買うと、今日の夕食は抜きになる。どうしようかと迷った。けれども、今の僕には『宝島』が必要に思えて仕方がなった。この古ぼけた『宝島』が、僕に勇気を与えてくれるような予感がした。

老人から受け取った『宝島』を、チノパンツの後ろポケットに入れて、僕は再び、海に向かって歩いた。

「一番大切なものは何か」と、主人公のジムがシルバーに聞くと、見つけた宝ものよりも「一杯のコーヒーさ」と答えたシルバー。

僕の大切なものって何だろう。ふと前を向くと、道の彼方に青い海が見えた。

FUNCTION 1

本物をめざして

こだわり抜いたのは、上質でタフなチノクロス（生地）の開発。ヴィンテージのサンプルを研究し、タテ糸とヨコ糸の配列を何種類も試作。

さらに洗いにかけ、柔軟剤の材料、ウォッシュの時間、水の温度などをバリエーション別に徹底して研究し、古きよき時代のチノクロスの風合いを再現。**およそ1年半の歳月をかけて、本物のヴィンテージが持つ、独特の光沢やハリコシを残しながら、柔らかな風合いを兼ね備えた、オリジナル生地が完成。**

FUNCTION 2

育てるヴィンテージ

ゴワッとした手触りが嬉しい、コットン100%のポケットの袋地。頑丈な巻き縫いのステッチ、ボタンやポケットなどのディテールは、ヴィンテージを忠実に再現。マニアならきっとわかる、こだわりだらけのここやあそこ。

ただし**シルエットだけは現代のアレンジ。裾幅にこだわった、程よいストレートと股上で、着心地と動きやすさは快適。**カジュアルにも、ジャケットスタイルにも幅広く使える定番。**履きこむほどに変化していく“アジ”が楽しみなチノパンツ。**

003

MEN
ヴィンテージ
レギュラーフィット
チノ

ワンサイズ大きめを選んで、
裾を短めにロールアップ。
二日目の姿を、鏡に映してみた。
このチノパンツに惚れた。好きなタイプだ。

松浦弥太郎

MEN
ヴィンテージ
レギュラーフィットチノ
¥2,990 ＋消費税

2017.8.1

004

MEN
イタリアンサドル
レザーベルト

かっこよくて、強くなった。

強くなれたあの日

子どもの頃の僕は、なにしろ臆病で、ちょっとしたことで人一倍怖がる子どもだった。

道を歩いていても、人がいなければ、しんとして怖いと言い、人がいれば、あの人が怖いと言うように、何かあるたびに、いちいち怖がって、親に面倒をかけた。

八歳の時、町外れにあった柔道の道場に通うことになった。自宅から道場までは、歩いて三十分の距離だった。夕方の暗くなった道を一人で歩くのだ。柔道を習うのは楽しいけれど、その行き帰りが僕には怖くて仕方がなかった。

「明るい道を歩けば大丈夫よ」と母は言ったが、途中にあるうっそうと茂った木々や、お化け屋敷に見える家や、なんだか不気味な曲がり角など、僕にとっては怖いものだらけだった。

目をつむって歩いたり、走ってみたり、時には大きな声で歌をうたいながら歩いたりと、子どもながらの工夫をするけれど、そうすればそうするほどに怖さは大きくなって、通うことに僕は、駄々をこねるようになった。

ある日、そんな僕をみかねた父が、「これで今日から強くなって、何も怖くなくなるぞ」と言って、革のベルトを買ってきてくれた。

その頃の僕にとってベルトとは、チャンピオンベルトであったり、ヒーローの変身ベルトだったりと、かっこよくて強い者の証だった。しかも、本物の革のベルトなんて、同い年の子どもで持っている子なんていなかった。

「このベルトをつければ、もう何も怖くはない。強くなれるんだ。ほら、つけてみろ」と父は言った。

僕は生まれて初めて、ベルトというものを自分の腰に巻いた。

「違う違う、ちゃんとこの間を通して巻くんだ」。つけ方を知らず、ベルトループに通さずに、はいていたジーンズの上から、そのまま腰に巻いた僕を見て、父は笑って言った。

「おお、なかなかかっこいいな。これでもう大丈夫だろ。強く見えるぞ」

僕はベルトを巻いた自分を鏡に映してみた。

父が買ってくれたベルトは、やせっぽちの僕には少し大きくてゆるかったが、なにより四角いバックルがまぶしかった。そして、本物の革のいいにおいがした。

「かっこよくて、強くなった」。僕は鏡に映った自分を見てそうつぶやいた。どんな怖い道だって一人で歩けると思った。

一人で歩くこと

大人になっても、怖いと思うことは、毎日のようにたくさんある。僕はいまだに怖がりだ。

けれども、怖いと思うその気持ちを無くしてしまったらいけないとも思う。

いつだって人は、その怖さを乗り越えるために、必死に学んだり、とことん考え抜いたり、歯を食いしばって耐える力を育ませるからだ。

サンフランシスコを一人で旅していた時、いつも一人でいるという怖さを、僕ははじめて経験した。本当の意味での孤独を知ったというか。

テンダーロインのホテルに泊まりながら、知り合いや友だちと呼べる人が、多少出来たとしても、いつも一緒にいるわけでもなく、今ここにこうしているのは、自分一人きりであり、何があっても一人で向き合うしかないという現実は、当たり前のようだが、若かった僕にはなかなか辛かった。

「読書くらい、自由になれることはない。物語の中に入りこんで、どんな自分にもなれるからさ。けれども、自由になればなるほど、人は孤独になるんだ。そう、自由とは孤独なんだ……」

ある日、ロバート・ルイス・スティーブンソンの『宝島』を買った古本屋の主人が、僕にこう話してくれた。

「孤独にはなりたくない。孤独は怖いです」と僕は言った。

「いや、君はすでに孤独なんだよ。孤独とは、人間の条件だからさ。誰もが一緒だよ。孤独なのに、孤独は嫌だと受け入れないからいつまでも怖いんだ。孤独を受け入れ、孤独を愛することさ。そうすれば人はもっと強くなる」

古本屋の主人は膝にのせた猫をなでながらそう言った。

「孤独とは人間の条件……」

「そう、孤独とは人間の条件さ。孤独だからこそ、人を思いやり、人の弱さがわかり、人を助け、人を愛するのさ」

頭ではわかった。だからと言って、今すぐ孤独を受け入れ、孤独を愛することができるようになれるのか。そうなりたいけれど、まだそうなれない弱い自分がいた。

けれども、この世界にいる人が皆、同じように孤独であると知れただけで、僕はなんだか気持ちが安らいだ。

そして、いつか父が買ってくれた革のベルトを思い出した。あの時、僕は、ベルトという憧れのお守りを手に入れ、確かに一人で歩くという孤独を受け入れたのだった。

FUNCTION 1

イタリア職人の情熱

“本物”かつ“高品質”のベルトを目指し、世界有数の皮革産地であるイタリア・トスカーナ州のクラフトマンと取り組んだレザーベルト。

その土地に住む先人たちの知恵と技術、情熱が詰まった、タンニンなめし加工を施したベルトは、**使い込むほどに味わいが増し、深みあるエイジングに成長していくのが最大の魅力。**ていねいで質実な手仕事の極みが冴えわたる。

FUNCTION 2

スタイルを格上げ

イタリアンレザーベルトの中でも、最も重厚感のある「サドルレザーベルト」。入手が困難とされる厚さ4mmの堅牢な革は、一流高級靴の靴底を供給してきた「ヴォルピ」社との取り組みによって実現。

切り込みの入った、伝統的な穴の処理は、こだわりの証。**デニムやチノなどカジュアルなスタイルに相性抜群。トラディショナルで本物志向な存在感が魅力。**

一日の終わりに、パンツから外して、
テーブルに置いてみる。
質実剛健な、かっこよさがある。
そんなベルトを選びたい。

松浦弥太郎

MEN
イタリアンサドル
レザーベルト
¥2,990 ＋消費税

2017.8.15

005

MEN
エクストラ
ファインメリノ

従うのか、逆らうのか。

※モデル着用商品はモデル私物です。

雨に濡れて

僕はまだサンフランシスコのテンダーロインにいる。

サンフランシスコで一番好きな場所はどこかと聞かれたら、市の北東に位置する、テレグラフヒルのコイトタワーだと答える。

子どもの頃の夢は消防士になることだった。生まれ育った家のすぐ近所に、消防車が二台停まった小さな消防署があり、そこで働く消防士のかっこよさに憧れていた。

サンフランシスコが一望できる、白亜のコイトタワーのかたちは、消防用ホースのノズルを模している。一九〇六年のサンフランシスコ地震で活躍した、勇敢な消防士を称えて建造されたと聞いた時、心が震えた。

あとでわかったのだが、その逸話は不確かで、実際は、「愛するサンフランシスコのために」という願いから、慈善家のリリー・ヒッチコック・コイトという女性が遺贈した塔だ。

僕はコイトタワーの展望台から眺めるサンフランシスコの海や街の、特に午後の景色が大好きだった。いやなことも、つらいことも、これからの不安なことも、広く美しい景色をぼんやり見ていれば、忘れることができた。

ある日の午後、いつものようにコイトタワーからの景色を眺めた後、テレグラフヒルを、ぼんやりしながら歩いていると(僕はこのエリアの町並みも大好きだった)、空が急に暗い雲で覆われ、ポツポツと雨が降ってきた。

僕は雨宿りをしようと、ちょうどよくそこにあった一軒のランドロマットに入った。日本で言うコインランドリーのことをランドロマットというのを知ったのは、リチャード・ブローティガンの詩の一篇からだった。

赤い床のランドロマットには誰もいなかった。片隅に置かれた植木の葉っぱに、小さな白い蝶々が二羽とまっていた。

ブローティガンが通ったランドロマットも、きっとこのあたりだろうな、と思いながら、ウインザー調の椅子に座って、雨音を聴いていたら、いつしか僕は眠ってしまっていた。

人の声で目を覚ますと、女性がランドロマットを閉める準備をしていた。僕に早く出て行けと言った。外を見ると、強い雨が降り続けていた。

夏の終わりだったが、さすがに夜は、シャツ一枚では寒かった。セーターを持ってくればよかったと思った。僕は雨に濡れながら道を歩いた。

一体僕は毎日なにをしているんだろう。これからどうしたらいいのだろう。サンフランシスコに何を求めているのだろう。

冷たい雨にさらされて、寒さで肩を震わせ、そんなことばかりを考えて歩いた。

家々の窓を見ると、あたたかそうな、ほのかな明かりが灯っている。このあたりはほんとにすてきな家ばかりだ。

すれ違った人に時間を聞くと、九時を過ぎていた。

星がきらめいた

雨の中、テレグラフヒルのグリーンストリートを歩いていると、一軒のジャズ・クラブのドアの隙間から音楽が聞こえてきた。

立ち止まって耳を澄ますと、ギターが奏でるジャズのメロディだった。僕はジャズクラブのドアを開けて中に入った。

店の中に客は数人しかおらず、奥の暗いスペースで、年老いた男が、木の椅子に座ってギターを演奏していた。男が弾くギターは、かなり古いギブソンで、そのリズムのサウンドと、低音の枯れた音色が、雨に濡れた僕の耳に心地よかった。

「Autumn Leaves」が流れた。

演奏の合間に、男は、「これが今夜の私のギャラです」と言って、ワイングラスを口につけて微笑んだ。

そして、ぽつりと、「ぼくたちはどんなふうに生きるのか」と呟いた。「従うのか、逆らうのか。そのどちらを君は選ぶのか」と言い、また静かに演奏を続けた。

僕は男の演奏に心を奪われた。僕を立ち止まらせたそのメロディは、テクニックではなく、単に作られた音楽でもなく、彼自身の生き方そのものをあらわしたものだった。

やさしく、静かに、強く、自由に、おおらかに、そのすべてが出会いであるかのように、男の奏でるギターが僕に何かを語りかけているようだった。

僕は、ひたすらその演奏に身を委ね、男が言った言葉の答えを出そうとしていた。

「従うのか。逆らうのか…」

「最後に、敬愛するギタリスト、タル・ファーロウと、あなたのために「Ｍｉｓｔｙ」を弾きます」と男が言った。

演奏された「Ｍｉｓｔｙ」は、僕にとっての、このひとときを永遠にするにふさわしい曲だった。

誰にでもその歩みを立ち止まらせる一瞬がある。その一瞬という呼びかけに、自分はどう答えるのか。その何か特別なものに、自分の心をどう開くのか。この思いがけない贈り物をどうやって受け取るのか。

演奏を終えた男は、ほっと安心するかのような表情をし、ワイングラスに口をつけて、こう言った。

「寒い季節になってきたので、どうぞあたたかくしてお過ごしください。おやすみなさい」

男はギターを、大切そうにギターケースにしまい、僕を含めて、たった三人の客に、手を上げて頭を下げた。

店を出ると、雨は上がっていて、夜空に星がきらめいていた。

※タル・ファーロウ（Ｔａｌ Ｆａｒｌｏｗ）一九五〇年代に活躍したアメリカのジャズ・ギタリスト

FUNCTION 1

呼吸する天然素材

世界最高峰のウール素材、エクストラファインメリノ。**極細繊維が織りなす、肌に吸い付くような着心地としっとりとした極上の手触り、高級感ある美しいドレープ。**通気性と吸湿速乾に優れ、かつ高い保温力を持っているので、暑い時は涼しく、寒い時は暖かい。

人の体温に応じて働き方を変える天然の機能は、まるで呼吸をしているよう。**シワになりにくく防臭効果もあり、さらには自宅の洗濯機でも洗えてしまう、まさにLifeWearを象徴するアイテムです。**

FUNCTION 2

定番であるために

ウールは生き物。そのため原毛には微差が生じます。品質を均一に揃えるため、**紡績、編み、仕上げの各段階の検証、素材の風合いやフィットの確定など数え切れないほどのサンプルを作成し、最高のバランスを探しました。**

毎年ミリ単位の調整を行うリブは部分部分で、編みのテンションを変えている。特に袖と裾はボディの付け根、中腹、袖・裾口と編み地のテンションを変え、ストレスにならない自然なフィットを実現。季節を問わず日常で、旅するときも一緒にいられる定番です。

今年は、数色揃えて、
コーディネートを楽しむ。
カジュアルだけどシック。
ちょっとしたイメチェン。

松浦弥太郎

MEN
エクストラファインメリノ
クルーネックセーター（長袖）
¥2,990 ＋消費税

2017.9.5

006

MEN
ファインクロス
シャツ

シャツを着る旅の美学。

自由とは

「従うのか、逆らうのか。そのどちらを君は選ぶのか……」

あの夜、ジャズクラブのギタリストが、つぶやいた言葉が、いつまでも心に残っていた。

朝コーヒーとドーナツを食べているとき。洗いたてのTシャツの袖に腕を通しているとき。ポケットに手を入れて、テンダーロインの坂を登っているとき。ホテルの部屋の窓から見える景色を、ぼんやりと一人で眺めているとき。しばらく会っていない両親に手紙を書いているとき。

その言葉が、いつも頭の中に、ふわっと浮かび上がっては、さあ、君はどっちなんだい？　と問いかけてきた。

そんなこと、どうでもいいじゃないか。好きにすればいい。こだわることはないさ。ひとつ言えることは、こうさ、その時に、楽なほうを選べばいいのさ、それが自由なんだ、と思うような自分もいた。

けれども、確かなことがひとつあった。それは、英語も話せず、誰のあてもないサンフランシスコに一人でやってきたことは、何かに従ったことではなく、少なからず自分で考えて決めたということだった。

そう、この旅は、僕の逆らいの証そのものなのだ。

逆らうというのは、こうしろと決められたことに、ノーと答える意志表示ではない。

目の前のどんなことにもしっかりと向き合い、他にもっと良い方法や考え方があるかもしれないと疑問を持ち、どうすれば正しいのかを自分で考え抜いて、自分で決めるという姿勢ではなかろうか。

そして、逆らうとは、他のもっと良いアイデアを出すという、建設的で、前向きで、新しい方法や考え方の発明をあきらめないという生き方。

ギタリストが言いたかったことは、「君は、考えることを誰かにまかせるのか？　それとも、自分で考えるのか？」もっと言うと、「君は恐れるのか？、恐れないのか？」ということではなかろうか。

楽なほうを選ぶことが自由ではない。ほんとうの自由とは、何事にも恐れない自分でいること。すなわち、まずは自分で考えて、自分で決めるということなのだ。

僕は、目の前の霧が、きれいに晴れたような気持ちで一杯になった。

ギタリストの言葉は、この旅が与えてくれた宝もののひとつになった。

二枚のシャツ

「その本、僕も大好きです。若い頃よく読んだんですよ……」

サンフランシスコからニューヨークへ向かう飛行機の機内で、隣に座った日本人の紳士から声をかけられた。

僕は、リチャード・ブローティガンの『アメリカの鱒釣り』を読んでいた。

その人は、身なりがぴしっとしたビジネスマンだった。仕事でアメリカを訪れていると言った。きらきらした目や、その気さくで柔和な笑顔に、僕はすぐに心を打ち解け、これまでの日々の出来事を、ぽつりぽつりと話した。

「わかるなあ。なんだか君は、僕に似ているような気がします」

その人も若い頃、世界中を旅した経験があるらしく、旅の楽しさやつらさ、旅で得たことと失ったこと。自分はこんなふうに旅してきたという話を、フライト中、ずっと僕に話し続けてくれた。

「こんなふうに旅先で、日本人の、しかも旅の先輩と出会えるなんて、ほんとうにうれしいです」

「旅人は、必ず旅先で、同じ旅人と出会うんですよ。僕もそうでした」と、その人は言った。

僕は、何か旅のアドバイスをひとつしてくれませんか、とお願いをした。するとその人はこう答えた。

「きれいなシャツを二枚、僕は今でも、旅をするときに必ず持っていきますね」

その理由を聞いてみた。

旅先で知り合った人から、家に招かれたり、食事を誘われたりした時に、きれいなシャツを着ていくのがマナーだ。着の身着のままでは、ちょっと失礼だ。もしかしたらデートに誘われることもあるかもしれない。そのために、できれば、ぴしっとアイロンのかかった、きれいなシャツを備えておくといい。

もう一枚のシャツは、旅を終えて日本に帰るときに着るシャツだ。汚れた服を着て帰るのではなく、これもまた、ぴしっとアイロンのかかったきれいなシャツを着て、家に帰るというのが、旅の流儀として大切なことではないか、時にはそのために新品のシャツを準備することもあると、その人は言った。

「またどこかで会いましょう」

僕とその人はＪＦＫ空港で別れた。

旅を終え、家に帰るために、きれいなシャツを着る。終わり方の美学とでも言おうか。

なんてすてきな旅なのだろうと思った。

FUNCTION 1

徹底したこだわり

袖を通した時にわかるのは軽やかできめ細やかな生地の肌触り。**上質な原糸を通常よりも細く撚った100番双糸を使用することで生まれる品格ある光沢。**お洗濯後もシワになりにくいイージーケア加工を施し、ハリコシのある風合いと美しい艶が特徴です。

仕立ての良さを決定づける芯地は、いくつもの試作を経て“硬すぎず、柔らかすぎない”を実現した自信作。肌に直接触れる襟周り、カフス、前立てに採用しています。

FUNCTION 2

みんなの"ふつう"であるために

XSから4XLまで全てのサイズ※でフィッティングテストを繰り返し、着丈、アームホール、ショルダーヨークを設計。どんな人にも“ふつうのシャツ”であるための、動きやすさと、すっきりスリムに見えるデザイン。

他にも**3cmの幅に17針という精度の高い丁寧な縫製などこだわりのポイントは数知れず。**少しずつアップデートを繰り返して、たどり着いたシャツの理想形。

※通常店舗ではS.M.L.XLのサイズ展開で販売をしております。

着るたびに気づく
うれしいこだわり。
毎日着たくなる、
最高品質のシャツ。

松浦弥太郎

MEN
ファインクロス
ブロードシャツ（長袖）
¥2,990 ＋消費税

2017.9.12

007

MEN
セルビッジ
スリムフィット
ジーンズ

僕は「ニューヨーク」と書いた。

友だちのような

決意して、何か新しいことをはじめる時、僕はジーンズを新調する。

新しい仕事やプロジェクトをスタートさせたり、大きな出会いがあったり、暮らしの環境が変わったとき、そして旅の出発など、まっさらなジーンズが、気持ちを引き締め、ゼロからのスタートを励まし、勇気を与えてくれるからだ。そして、あたかも、これからの歩みを記録するノートのような役割も担ってくれる。

新品のジーンズを買うと必ずすることがある。まずは裏返して、左前ポケットの生地に、決意をペンで書き込むのだ。

僕は「ニューヨーク」と書いた。

サンフランシスコからニューヨークへと向かった僕は、新しいジーンズを履き、これからニューヨークでの暮らしをはじめようと思った。

いつしか年月が経った時に、着古したジーンズを裏返して、そこに書いてある「ニューヨーク」の文字を見た時、きっとあの日あの時を思い出すだろう。そして、色落ちたジーンズの風合いを愛おしく思うだろう。

服の中でもジーンズは特別だ。膝やポケットがやぶれたジーンズ、落ちない汚れがついたジーンズ、

まだ新しさが残ったジーンズなど、そのすべてがストーリーを物語っている。あの日あの時が記録された一冊の日記のようだ。そして、持っているすべてのジーンズを裏返せば、いつか書いた決意が残っている。

ジーンズは他の服と一緒には洗わない。必ず裏返して水で洗う。洗い終わったら、手でよく伸ばしてから、裏返したまま、時間をかけて陰干しする。

不思議なことにジーンズを洗うと、気持ちがリフレッシュしたような気持ちになる。「よし、またがんばるぞ」とスタートできる。

乾いたジーンズは、裏返しのまま、畳んでおく。そうすると、洗いたてであることがわかるし、ポケットに書かれた決意の文字も見えるからだ。

クローゼットを開けると、裏返したまま畳まれたジーンズがいくつも重ねて置かれている。その一本一本が、言ってみれば、自分の歴史であり、決意と約束だ。

ジーンズを履く日、どれを選ぶのか。その時、感じるのは、どの友だちと出かけようか、と思うのと似た気持ちになることだ。

僕は、そんなふうにジーンズと付き合っている。裏返されたジーンズを、表に返して、足を通し、リベットボタンをはめる。ベルトを通した時の高揚感は何ものにも代え難い。

「ニューヨーク」と書いた、真新しいジーンズを履いて、僕は旅に出た。

ヘルズキッチン

ニューヨークに着いたのは、午後四時過ぎだった。JFK空港からタクシーに乗り、予約していたホテルの番地を運転手に告げると、「ヘルズキッチンか……」と呟いた。

予約したのは、サンフランシスコで泊まっていたホテルで知り合ったバックパッカーに教えてもらった安ホテルだった。

「ヘルズキッチンというのは？」と聞くと、「ヘルズキッチンは言葉の通り、地獄の台所だよ。俺は嫌いじゃないけれど、お前のような観光客が行くところではない」と運転手は笑って言った。

乗ったタクシーは、ずんぐりとして、やたら車高が高く、黒い皮のシートのスプリングが固くて座り心地が悪かった。助手席には、真っ黒のドーベルマンが鎮座していて、ときおり後ろを振り返り、僕を睨みつけた。

黄色のボディに、白と黒のチェック模様が入った、昔ながらのニューヨークのタクシー（通称チェッカーキャブ）に、僕ははじめて乗った。

車内はコーヒーと消毒液が混ざった匂いで充満していた。「急いでいるのか？」と運転手は聞いた。「別に急いでいません」と答えたが、タクシーは、急発進し、猛スピードで高速道路へと向かっていった。

クイーンズボロブリッジを渡り、高層ビルがひしめきあって建つマンハッタンに入ると、どこを向いても早足で歩く人、人、人ばかりで、車道はタクシーとトラックが、けたたましくクラクションを鳴らしながら走り抜けていく。

タクシーのラジオからはイタリア語のニュースが流れていた。道路がでこぼこなのか、しっかりつかまっていないと、頭を車の天井にぶつけてしまうくらいの衝撃が繰り返された。タクシーは道路を跳ねるように走った。

怒ってるのか、急いでいるのか、騒いでいるのか。これが僕のニューヨークの最初の印象だ。同じアメリカなのに、サンフランシスコとのあまりの違いに僕は目を丸くした。

ヘルズキッチンに着いたタクシーは、僕を降ろし、タイヤを鳴らして急発進して去って行った。

ここがヘルズキッチンか……。僕はこの街のニックネームが、いかにもニューヨークらしくてすてきに思った。

ヘルズキッチンという名は、このエリアが世界中の料理が食べられるという意味で、今でも古き良きオールドニューヨークの雰囲気が残っていると運転手は言った。

ホテルは、小さな看板が壁に埋め込まれた、古めかしい七階建ての雑居ビルだった。

着ているシャツも、セーターも、スニーカーも着古しているけれど、履いているジーンズは真新しいのが、僕には誇らしかった。

今日からニューヨークだ。夕焼けに染まるクライスラービルが空にそびえていた。

FUNCTION 1

本気のデニム

装飾やデザインに頼らずに、品質とシルエットで勝負する。ユニクロの覚悟と挑戦を詰め込みました。デニムづくりでもっとも重要な素材には、世界屈指のデニム生地製造メーカー「カイハラ社」のセルビッジデニム※を使用。

通常の機械よりも手間と技術が必要なシャトル織機で生産された希少価値の高いセルビッジデニムは、**綺麗な綾目で立体的な美しい風合いが最大の魅力。表面の凹凸が穿き込むほどにタテ落ちし、自分だけの味わい深い色落ちに変化します。**

※カイハラ社のセルビッジデニムは69 NAVYのみに使用されています。

FUNCTION 2

伝統に革新を

デニムフリークを唸らせる伝統的なセルビッジデニムに、ストレッチを配合。無骨な表情はそのままに、快適な穿き心地を両立させた革新的デニムへと進化。股上は浅めに、フィットはやや細め。トレンドに寄りすぎない、汎用性の高いスリムストレートシルエット。

さらにフロントポケット、ヒップポイントを高く設計することでバランスがアップ。フロントボタンやポケットを補強するリベットに入った刻印がデニムの風格に華を添えます。

洗いたてを
裏返したまま畳む。
自分への約束を書きたくなる、
そんなジーンズだ。

松浦弥太郎

MEN
ストレッチセルビッジ
スリムフィットジーンズ
¥3,990 ＋消費税

2017.9.19

008

MEN
ネオレザー
ライダース
ジャケット

人生で一番価値のあることは。

毎朝会う人

「ニューヨークで何をしているの？」そんなふうによく人に聞かれた。

ファッションを学んでいる。写真を撮っている。絵を描いている。料理の修行をしている。ビジネスをしている。みんながこんなふうに答える中で、僕は一人黙っていた。

圧倒されている。

街にも、人にも、流れる時間にも、耳に入る音にも、多種多様な匂いにも、道に溢れるゴミすらにも、圧倒されている自分がいた。

勝たないといけない。

毎朝、空にそびえる高層ビルの先端を見上げるたびに、そう自分に語りかけていた。

では、何で勝つのか。

その答えを何一つ思いつかない自分が、ニューヨークという大都会に一人でポツンといるのが不思議な気分だった。そんなつもりでニューヨークに来たわけではないのに、と。

僕は毎朝、一冊の本を持って、セントラルパークを訪れた。そして、涙のしずくのかたちをしたストロベリー

フィールドの草むらに座って、日が暮れるまで本を読んだ。僕はこの場所がとても気に入っていた。

読んだのはアンデルセンの「即興詩人」だった。イタリアを舞台にした旅と青春の物語だ。主人公アントニオの心模様とまなざし。生きるとは何か。少女との恋。あせることはない、時がくればなるようになる。美しき今日。そこに書かれた言葉の渦に僕は溺れていった。そう言葉だ。自分なら今をどう言葉にするのか。草むらに寝転がりながら、そんなことを自問自答しながら読んだ。

ストロベリーフィールドの入り口には、ボンベイのモザイクデザインが施された、イマジンと描かれた大理石のモザイクが、ベンチに囲まれた広場のアスファルトにはめ込まれている。

ストロベリーフィールドのベンチに、毎朝、同じ時間に訪れ、鳩やリスにえさを与えている、杖を持った八十歳くらいの年老いた女性がいた。その女性は、毎朝、会うたびに、僕に小さな声で「おはようございます」と声をかけてくれた。

女性が着ている服はいつも同じだった。いくつもの色のあせたワッペンが縫い付けられ、革がすりきれるほど着古したライダースジャケットに真っ赤なスカートをはいていた。

女性は鳩とリスにえさをあげ終わると、しばらくそこで本を読み、持ってきているポットからあたたかい飲み物を飲み、ぼんやりと過ごし、昼に近くなると、ゆっくりと立ち上がり、ストロベリーフィールドから去っていった。

僕は、朝のあいさつを交わせる人が一人でもいるということが、どんなにしあわせなことなのかと思い、その女性と会うことが、ささやかな日々の喜びと感じていた。

そんな朝の日々がしばらく続いていたある日、女性が僕にこう話しかけてきた。

「あなた、何をしているの?」と。

ストロベリーフィールドにて

「よかったら、隣に座りませんか?」こう言って、女性はベンチの隣のスペースを手でさすった。

「今朝はいつもより肌寒いですね……」僕はそう答えて、女性の横に静かに座った。

「声をかけてしまってごめんなさいね。私は毎朝たくさんの人と会うけれど、ずっとあなたのことが気になっていたの。あなたは一体何をしているのか、もしよかったら聞かせてくれませんか? 日本人ですよね」と女性は言ってから、自分の名前を僕に告げた。

「はい、日本人です。びっくりしました。人にお話できるようなことは何もしていません。だから、毎朝ここに来て、ずっと本を読んでいるんです」と僕は答えた。

「一日、ここで本を読んでいるの?」

「はい、そこの草むらで、日が暮れるまで本を読んでいます」僕がそう答えると、女性はびっくりした顔をしてから、とっても嬉しそうにこう言った。

「なんてすばらしいことをしているんでしょう。あなた、それはすばらしいことよ。これだけ世の中がせわしなくしている中で、一日中、本を読んでいるなんて。それであなた、それで楽しい?」と女性は言った。

「はい、とても楽しいです」と答えると、「何が楽しいの?」と女性はにっこりと微笑みを浮かべながら身を乗り出して聞いてきた。

「本の中で出会ういろいろな表現にとにかく感動するんです。それは気持ちだったり、状況だったり、いろいろな様子なんですが、それを言葉というか文章というか、ひとつの表現として、その感じをこういうふうにすてきに言語化するのかと。そう思うと、この世界に存在するまだまだ言語化できていない、言葉や文章によるきらめく表現っていうのがたくさんあるんだと、わくわくするんです。そして、本を読みながら、この感じを自分ならどう表現するのかと考えるのが、とっても楽しいんです」

僕は夢中になってこう話した。すると、女性は僕の背中に手をあてて、こう言った。

「そうすると、あなたは一日中、言葉とか文章に感動して、自分ならどうするかって考えているのね。あなた、それがどんなにすてきなことだかわかる? 人生で一番価値のあることは、日々、心から感動することなのよ。感動はいつかあなたのクリエーティブになって、あなたを作っていくの。ここニューヨークでこれだけたくさんの人が忙しく働いて、勝ったり負けたりに夢中になってばかりで、どれだけの人が一日中、心から感動していると思う? いつかあなたの心の中が、日々の感動で満ち満ちた時、きっとあなたは何かをしたくて仕方がないようになるわ。その時は自然とやってくるの」

女性は、ポットからカップに注いだあったかいお茶を僕にすすめてくれた。そして、僕が手にしていた「即興詩人」をちらっと見た。

「あなたを紹介したい人がいるわ」と女性は言った。

FUNCTION 1

「ネオ」レザーの誕生

鈍い光沢を放つマットな質感、表面の細かなシワ模様。**理想とするリアルレザー特有の表情を求めて幾度もの試作をくり返し、あたらしいネオレザー生地を開発しました。**

表地に現れる不自然なシワをできるだけ無くし、柔らかく軽やかなこれまでのネオレザーに足りなかったハリ感は、**本来あまり使用されることのない極薄いシート中綿を内側に採用することで解消され、同時に防寒性も兼備。**アウターとしての安心と存在感が生まれました。

FUNCTION 2

新たなデザインバランス

レザージャケット特有の**スリムフィットでありながらも、インナーを選ばないちょうど良い着丈、袖の形状に沿ったカーブや肩幅から身幅には窮屈さを感じないオリジナルシルエット。**

フロント、ポケットスライダー（引き手部分）はルーツを大切に、匿名性の高いシンプルなオリジナルパーツを採用。エポレットや背中のバックルなど本来のライダースが持つ装飾などは排除しながらも、前立ての無骨さは残す。**こだわり派もこれからの人も満足できるライダースの新解釈です。**

008

MEN
ネオレザー
ライダース
ジャケット

毎日着る。とことん着る。
コーディネートなんて考えない。
するとライダースジャケットは、
自分の意志となる。

松浦弥太郎

MEN
ネオレザー
ダブルライダースジャケット
¥5,990 ＋消費税

2017.9.26

009

MEN
スウェット
プルパーカ

今、この瞬間、何を学ぶのか。

純粋なこころ

「さ あ、行きましょう」。女性は、銀の持ち手がついた杖を突いて、ベンチから立ち上がった。その時、女性の背丈が、母と同じくらいだと気づき、その姿に母が重なって見えた。

「このあたりは春になると、アベリアの赤い花が咲いて、とってもきれいなのよ」ストロベリー・フィールドを通り抜けたところにあった垣根を指差して女性は言った。

女性の名はトーコさん。父が日本人で、母がイギリス人。自分はニューヨークで生まれ育ち、日本には何度も訪れたことがあり、少しは日本語が話せると言った。「トーコさんと呼んでください」と女性は笑って言った。

トーコさんは、セントラルパークの小道をゆっくりと歩きながら、「で、それからどうしたの?」と、これまでの僕のこと、旅の経緯など、いろいろと聞いて、嬉しそうな声で「そうなのね」と繰り返して言った。

セントラルパークの中心にある広場、ベセスダ・テラスに着いた。ここには水の天使と呼ばれる大きな噴水があり、何度か訪れた大好きな場所だった。

「こっち、こっち」と、トーコさんは足早に僕の前を歩いた。そして、ある胸像の前で立ち止まった。

「こんにちは、ベートーベンさん」。

トーコさんは、石の台座をぽんぽんと手で叩いた。あなたを紹介したかったのは、こちらにいらっしゃる、ベートーベンさんよ」と言って、クスクスと笑った。

ベートーベンは、首にストールを結び、むっつりと口を一文字に結んで、下を向いていた。胸像は一八八四年に建造と記されてあった。

「私がベートーベンの言葉で一番好きなのは、『純粋なこころだけが、おいしいスープを作る』という言葉なの。暮らし、仕事、人づきあいで、純粋であることは、本当にむつかしいけれど、生きる上でいちばん必要なことは、純粋であること。私はいつも自分の純粋が失われそうになったら、ベートーベンさんに会いに来るの」

トーコさんは、ベートーベンの顔を下からじっと見つめて、「そう、純粋であること……」と小さな声でつぶやいた。

「あなたはとっても純粋な目をしていると思ったの。大丈夫、迷うことなく、もっと自分を信じていいと思う。あなたの純粋なこころをもっと育ててください。そして、もし困ったり、迷ったりしたら、ベートーベンさんに会いに来たらいいと思う」トーコさんはそう言って僕の背中に手を置いた。

僕はベートーベンの前に立ち、胸に手を当てて自問した。

「僕の純粋なこころって何だろう……」と。

トーコさんは、ポケットから小さなバッジを取り出し、「これをあなたにあげる。今日から私たちは友だちよ」と言って笑った。

バッジには赤い文字で「ＳＭＩＬＥ」と書いてあった。僕は着ていたスウェットパーカーの胸にそれをつけた。トーコさんは嬉しそうにうなずいた。

学びと感謝

トーコさんと別れ、宿にしているホテルへの帰り道、僕はずっと「自分の純粋なこころって何だろう」と考え続けた。

「自分の信じたことを一所懸命にやりなさい。そうすれば、きっとあなたをサポートしてくれる人がたくさん現れる。それがニューヨークよ」。トーコさんはそう言って、僕をはげましてくれた。

今日は地下鉄に乗らずに歩いて帰ろう。僕はブロードウェイをひたすらダウンタウン方向へと歩いた。

歩きながら、すれ違う人、そこに立っている人など、とにかく僕はニューヨークという街特有の、そこで暮らす多種多様な人々を見つめて、何か自分の中で悶々としている答えを見つけようとした。

道の向こうからスエットパーカーを着た大きな身体をした男の人が、こっちに向かって歩いてきた。

不思議なことに、その時、大勢の中で、その男の人だけが、スポットライトを浴びているように僕には見えた。ずんずんと僕に向かって歩いてくる。

スエットパーカーには、グレイの文字で大きく「ｌｅａｒｎ」と書いてあった。

その男の人と僕は近い距離で目と目が合った。その時、男の人は、小さく微笑んで、声を出さずに「やあ」と言い、すれ違っていった。

僕の目には、「ｌｅａｒｎ」という文字が、何かの啓示のように焼きついて残った。

「ｌｅａｒｎ」とは学ぶこと。何かを身につけること。もっと素直になること。

「そうだ！」。

僕は丸太で頭を叩かれたような衝撃を受けた。何をしたらよいか、何がしたいではなく、今日、今、この瞬間、何を学ぶのか、何を学びたいのか、それだけでいいのだ。そのひたむきさが純粋なこころなのだ。

ただ時を過ごしていくのではなく、今この瞬間にも、それがどんなにつらいことであろうと、何か必ず学びがある。それと向き合って、ひとつひとつしっかりと学ぼう、という姿勢が大切であり、それが一所懸命という言葉につながるのだ。

一所懸命とは学ぶということ。そうだ、暮らし、仕事、人づき合いなど、やるとかやらないではなくて、どんなことでもすべてが学びなんだ。そう、学べばいいんだ。そのために、かぎりなく素直な気持ちで、よく見て、よく感じ、よく考え、しっかりと身につける。人生とはその繰り返しなんだ。

学びの先にあるものは感謝であろう。すべてが学びであるならば、すべてに「ありがとう」という感謝を伝えるべきで、何かをしてくれたから「ありがとう」と言うのではなく、いつでもすべてに「ありがとう」という態度が正しいのだ。

その自分らしい感謝の仕方が、これからの自分のライフスタイルを育み、自分の人生を築いていくのだろうと僕は気づいた。

ありがとう、ニューヨーク！　今、この瞬間から、僕は自分が変われることを確信できた。僕はうさぎのように、道を跳ねるようにして走った。

FUNCTION 1

完璧なフードを

太い20番手の糸を使い、密度を詰めて編み立てたスウェット生地を開発。**肉厚にすることで立体感が生まれ、しっかりと包まれるような着心地に。**細やかな編み目による品のよさが、着こなしの楽しみを広げてくれます。

一番のこだわりはフードの「立ち方」。立体的でうつくしく見えるように付け根部分やフード周辺のパターン試作を何度も重ねました。**フードの適度なボリュームは、1枚で着ても、ジャケットと重ねても抜群の存在感を発揮します。**

FUNCTION 2

「着る」から「洗う」まで

縫い目はすべて2本針ステッチ。縫い代がフラットになり肌あたりはなめらか。フロントのカンガルーポケットはリブを採用したクラシックなデザイン。**ポケット口は裏から布を当ててさらに補強縫製して丈夫に。**

ボディと袖はゆったりとしたシルエットながらも、肩の位置とパターンを見直し、動きやすさがアップ。フード紐の先端を金属チップでカバーして高級感を。フード裏のみにポリエステルコットンを採用し洗濯後の乾きやすさを考えました。

きれい目スラックスに、
ジャストサイズで着るのが、
一番しっくりくる。
そんなパーカーです。

松浦弥太郎

MEN
スウェットプルパーカ（長袖）
¥2,990 ＋消費税

2017.10.3

010

MEN
カシミヤ
クルーネック
セーター

セーターを着直して、部屋の窓を開けた。

「ニューヨーカーのセス」

セスは、僕より四歳上のフリーで働くジャーナリスト。レストランビジネスをしているトーコさんの会社で、以前働いていた青年だった。

「本好きなあなたと、きっと気が合うと思うわ」。そう言って、トーコさんは、僕らを引き合わせてくれた。

セスのアパートは、三十八丁目のレキシントン・アベニューにあった。住所を教えてもらい、訪ねてみた。そこは六階建ての古い建物だが、とても清潔感があり、入り口には、アンリ・ルソーのポスターが飾られた小さなロビーがあった。

僕がエレベーターの場所を探していると、ドアマンが近づいてきて、「あなたはセスの友だちですよね？聞いていますよ」と言って、親切にエレベーターの場所を教えてくれた。

セスの部屋は最上階のペントハウスだった。「PH」というボタンを押して、彼の部屋へと向かった（「PH」というボタンがかっこいいと思った）。エレベーターの中は、ローズマリーのいい匂いがした。

エレベーターのドアが開くと、セスが満面の笑顔で僕を待っていてくれた。

「君が来たことを、ドアマンが連絡くれたんだ。ようこそわが家へ！」と言って、僕の肩を抱いて、部屋へと案内してくれた。

ペントハウスというと豪奢なイメージがあったが、そこは普通のアパートの最上階で、一人暮らしにはちょうどよい広さの、気取りのないシンプルなワンルームだった。

「こっちこっち」と、セスは僕をバルコニーに連れ出し、「見てごらん。ここからの景色が僕は大好きなんだ。どうだい？」と言った。

バルコニーに置かれたプランターには、ローズマリーが植られていた。

「部屋よりも外のほうが気持ちいいんだ」と言って、セスは、バルコニーに置かれた折りたたみの椅子に「どうぞ、ヤタロウ」と言って僕を座らせた。

そこから見えるニューヨークの広い景色、階下から聞こえる街の音、そよぐ風、きらきらとした秋の陽射し、そのすべてが、セスの言うように心地よかった。

「ほら、あそこにエンパイヤーステートビルが見えるだろう。夜になるときれいなんだ」。

この部屋は、長年、仲違いしている不動産屋を営む父の持ち物であること。時折、ニューヨーク・タイムズにコラムを寄稿していること。トーコさんとの関係など、セスは自分のことを僕に話してくれた。

「いろいろ話してくれてありがとう」と言うと「いつか君のことも話してくれたら嬉しいよ、ヤタロウ」とセスは言った。

「今度、僕が好きなニューヨークの本屋を紹介してあげよう。あとは、これからしばらくニューヨークにいるなら、ホテルではなく、どこか部屋を借りるといいよ。僕が探すのを手伝うから心配しないでいいよ」。

「ほんとうにありがとう」と言うと、「君はもう僕の友だちだよ。ニューヨークは人と人が支え合う街なんだ。気にしないで」と言ってセスは笑った。

「さ、ピザでも食べに行こう！寒くなったからあったかい服を着たほうがいい」。

シャツ一枚の僕に、セスはセーターを貸してくれた。セーターは大きくてぶかぶかだったが、とてもあたたかった。

セーターのぬくもり

セスは「僕の好きなピザ屋だよ」と、ブリーカー・ストリートの老舗「ジョンズ・ピッツェリア」に連れていってくれた。僕らは本場ナポリの名物マルゲリータを頼み、一枚を分け合って食べた。

「おいしい！」と僕が喜ぶと、「ここはウディ・アレンの映画にも出てくる、ニューヨーカーに愛される店なんだよ」とセスは言い、この店のピザが、なぜこんなにおいしいのかを僕に詳しく説明してくれた（小麦の種類と焼き方らしい）。

セスは、どんなことにも、好みやこだわりがはっきりとあり、何か聞くと、かなり詳しく教えてくれるところが、いかにもニューヨーカーらしいと思った。

食後、僕らは夜のグリニッジ・ヴィレッジを散歩して、一軒のカフェに入って、熱いコーヒーを飲んだ。するとセスは、バッグからニューヨーク・タイムズを取り出し、「個人が期限付きでアパートを貸してくれるサブレットというのがあるんだ。その投稿を見てみよう」と言って新聞を広げた。「一カ月四百ドルくらいで、いい部屋があるといいんだけどな……」。

すると、西七十四丁目に小さなワンルームの貸出しが載っているのをセスが見つけた。

「ここは場所がいい。明日、僕が持ち主に電話して聞いてみよう。ホテル暮らしよりこっちのほうが絶対にいいよ」とセスは言った。僕は、短期にしろ、ニューヨークで部屋が借りられるなんて夢みたいだと思った。

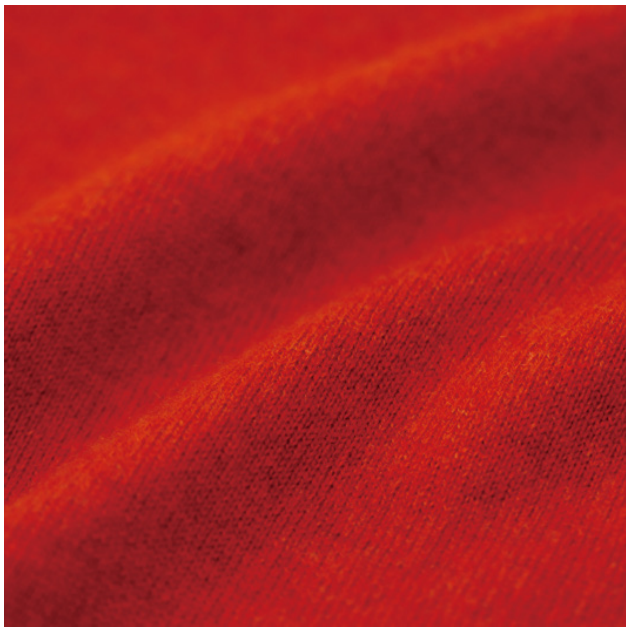
別れ際に、貸してくれたセーターを脱いで返そうとすると、「寒いから着て帰ったほうがいいよ。今度会う時に返してくれれば大丈夫」とセスは言った。

「明日の夕方に僕に電話してくれ。その時には、きっと部屋のことがわかっていると思う」。

セスは「今日はありがとう、ヤタロウ」と言って、軽くハグをしてくれた。僕も「ありがとう、セス」と言った。言葉の最後に、こんなふうに僕の名前を、セスが言ってくれるのが、とても嬉しかった。嬉しかったから僕も真似をして、そう言ってみたら、もっと嬉しい気持ちになった。

ホテルの部屋に戻り、セスに借りたセーターを脱いだ。ぶるっと身体が震えて、今夜がこんなに寒かったのかと驚いた。

僕は、セーターを着直して、部屋の窓を開け、ニューヨークの夜景を眺めた。



FUNCTION 1

最上級のやわらかさ

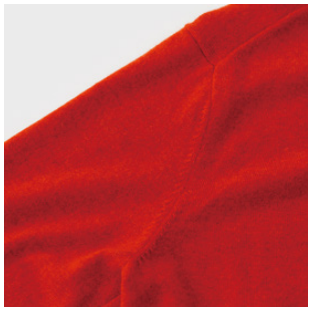
しなやかさとなめらかな艶、あたたかさと吸湿性の高さ。**繊維の宝石と言われるカシミヤを惜しみなく100%使用。**一番のこだわりは「風合い」の仕上げです。**着るたびに毛羽が立ち、だんだんと柔らかくなるものがほとんどですが、ユニクロのカシミヤは購入してすぐに極上のやわらかさを肌で感じていただける**はずです。

気持ちまでほころぶこの上ないカシミヤの風合いは、数え切れないほどのサンプルを作り、研究を重ねてたどりついた成果です。

FUNCTION 2

究極のベーシックとは

常に変化し続ける時代の中でベーシックであるためには、すべてのバランスが重要だと考えます。**ニットの厚み、サイズ感、時代に寄りそうフォルム。首回り、袖付けのラインや形など、毎シーズン数ミリ単位のアップデートを繰り返し、究極のベーシックを追求**しました。



今シーズンからはエクストラファインメリノと同様にリブを改良。**袖を付け根、中腹、袖口と編み地のテンションを変えてストレスにならない自然なフィットに**仕上げました。

カシミヤを着る。
カシミヤをさわる。
カシミヤを感じる。
今日のしあわせ。

松浦弥太郎

MEN
カシミヤ
クルーネックセーター（長袖）
¥9,990 ＋消費税

2017.10.10

011

MEN
フランネル
チェック
シャツ

トラッドなワードローブが揃っていた。

部屋探し

約束通りに、次の日の夕方、セスに電話をした。「グットニュースがあるよ！ 西七十四丁目のアパートの持ち主に連絡したら、借り手はまだ見つかってないらしいんだ。貸してくれる期間は一カ月。家賃は五百ドル。まあまあ、いいかも！」セスは声を高めて言った。

「ありがとう、セス。持ち主はどんな人なんだろう？」

「うん、ジャズピアニストの女性で、どうやら近くの『バードランド』というジャズクラブで演奏しているらしいんだ。そこでひとつ相談なんだけど、ワンルームの部屋に大きなグランドピアノが置かれているんだ。それでも良ければって話なんだけど。一度見に行ってみよう」

セスは、二日後に、部屋を内見する約束をとりつけてくれた。

僕らは、七十二丁目の地下鉄の駅の入り口で待ち合わせをした。ブロードウェイに面した七十二丁目の駅舎は、レンガ作りの小屋のような建物で、百十年の歴史があるランドマークだ。

このあたりはアッパーウエストサイドと呼ばれるエリアで、治安もよく、緑が多く、とにかく街がきれいだった。ボザール様式で有名な「アンソニア・コンド

ミニアム」といった、ニューヨークで最初に空調設備を備えた高級マンションや、立派な邸宅が、道沿いに並んでいた。

セスは僕と会うなり、「よし、あそこのホットドッグを買って食べよう。大好きなんだ」と駅からすぐの場所にある「GRAY'S PAPAYA」というホットドッグ屋に駆け込んで、おすすめのホットドッグを、僕の分まで買ってくれた。ホットドッグは、玉ねぎがたっぷりで、チーズがトッピングされて、チリソースがあふれんばかりに載っていた。

「この組み合わせが最高においしいんだ」と言って、セスはホットドッグを僕に手渡した。

「ストロベリーフィールドに近いよね」と僕が言うと、「うん、すぐそこだよ。トーコさんの家もすぐ近くだよ」と、チリソースを口のまわりにたくさんつけながらセスは言った。

貸し出されているアパートは、駅からほんの数分の距離だった。なんてことのない雑居ビルで、入り口奥のエレベーターの前には、小さなデスクがあり、そこに門番のように男性が座っていた。

セスが、部屋の持ち主と約束があることを門番の男性に告げると、「勝手に行きな」という素振りで僕らを通してくれた。

部屋は四階の一番奥だった。狭い廊下には古びたカーペットが敷かれ、廊下に面したドアは、すべてが白いペンキで厚ぼったく塗られていた。

「ここだ」セスがドアをノックすると、部屋から女性の声が聞こえ、少し待つと、ガチャリ、ガチャリ、ガチャリと鍵を開ける音のあとにドアが開いた。ドアには鍵が三つもついていた。

ピアノのある部屋

「はじめまして、ケイトです。どうぞ中に入ってください」

女性は三十代半ばで、ふわふわにカールした長い髪がよく似合う、とても気さくでやさしい雰囲気だった。

僕とセスは彼女に挨拶をし、部屋に入った。その途端、セスは結んだ口を横に伸ばして、僕の目を見た。僕も目を丸くして、セスの目を見つめた。

「えーと、彼は英語が話せるのかしら?」と、僕を見つめながら彼女が言った。

「少しなら話せます。何を言っているかは大体理解できています」とセスが答えると、「あら、それならいいわ。日本人はきれい好きだから部屋を貸しても安心ね」と女性は言った。

「ケイトです。よろしく」と、もう一度、彼女は僕に握手を求めた。

「お貸しするには、ひとつ条件があるの。それは毎週、水曜日と金曜日の三時から六時までは、ピアノ教室をここでしているので、その時間だけは、部屋から出ていてもらいたいの」

セスはどうする?という視線で僕を見た。それよりも、

僕らがびっくりしたのは、狭い部屋の真ん中にグランドピアノが占拠されていて、部屋のどこにもベッドもソファもないことだった。

「ちょっと値切ってみよう……」セスは僕に耳打ちした。

「しかし、ベッドもソファも無いと不便ですね。たとえば、一カ月四百ドルにしてもらうことは可能でしょうか?」と、セスは交渉をはじめた。

ニューヨーカーはどんな時でも、ごねてみたり、交渉をするのが好きだとセスから聞いていたので、僕は笑いをぐっとこらえて、二人のやりとりを見ていた。

「では、一カ月四百二十ドルで!」二人は僕を抜きにして、勝手に交渉をまとめて握手をした。

「彼女はボーイフレンドと長年ここに住んでいたけれど、新しく付き合うことになった人の家で同棲することになった。けれど、ピアノ教室だけは続けたいので、この部屋を残しておきたいんだって」とセスは言った。

「ピアノ以外なら、ここの部屋にあるものはすべて使ってくれて結構よ。よかったら、クローゼットの中にある、男ものの服も自由に着てもいいわよ」とケイトは笑いながら言った。

クローゼットを開けてみると、男ものの服がきれいに畳まれて、几帳面に収納されていた。よく見ると、プレッピースタイルとでもいおうか、ニューヨークトラッドなワードローブが揃っている。しかも、かなりマニアックだ。

「これなんかあなたに似合うんじゃない?」ケイトはウールのシャツを広げて見せた。

FUNCTION 1

種類豊富なデザイン

圧倒的なバリエーションが自慢のフランネルシャツ。**約1,000パターン以上の色柄候補の中からトレンドとベーシックをバランスよく選びました。**衿の形は2種類。**ボタンダウンはヨーロピアンテイストの色柄を採用して上品な印象に。**タックインしても収まりがいいように着丈を1cm長めに設定しています。

レギュラーカラーはラフに羽織って楽しめる、アメカジなチェック柄を中心に構成。両タイプとも身頃と袖周りをすっきりさせたシルエットが特徴です。

FUNCTION 2

使い分けのすすめ

コットン100%生地の表裏を起毛させたフランネルの特徴は、**ふわりと柔らかな風合いと、ほどよい暖かさ。生地の厚みの違いで使い分けると、着こなしの楽しみが広がります。ボタンダウンは少し薄手なので、早い時期から活躍してくれます。**

季節が進んだらニットやジャケットと品よく重ね着がおすすめ。**厚手のレギュラーカラーは主役として1枚での着用はもちろん、ダウンベストやパーカなどカジュアルな合わせと相性抜群**です。

柄選びに迷ったら、
できるだけ地味な柄を選ぶ。
いたって地味な柄を、
地味に着こなすのが僕は好き。

松浦弥太郎

MEN
フランネル
チェックシャツ（長袖）
¥1,990 ＋消費税

2017.10.17

012

MEN
フリース
フルジップ
ジャケット

フリースを着て、カメラを構えた。

街の物語

一カ月の約束で借りた西七十四丁目の部屋に住んで、一週間が過ぎた。

老舗のスーパーマーケット、二十四時間営業のベーグル屋、おしゃれで広い本屋など、近所にお気に入りの場所がたくさん見つかった。僕はこのエリアが大好きになった。

ニューヨークでの日々は、本を読むこと。街を歩くこと。このふたつに僕は熱中をした。

本を読んで出会った、はっとしたフレーズ、もっと知りたいと思うこと、深く感動した文章は、できるかぎりノートに書き留めた。

街を歩いて、目にとまったもの、いつかの記憶とつながったもの、忘れたくない光景、いつまでも見ていたいものなども、克明にノートに書き留めた。

そんな読書ノートと街歩きノートの二冊を、僕はいつも持ち歩き、いつでもそこに自分の今という時間を、言葉や文章として記録をした。

ニューヨーク滞在中、僕はマンハッタンの道という道を、すべて歩くことを小さな目標にしていた。

街歩きノートに、マンハッタンの地図を描き、歩いた道は、今日はここからここまでというようにペンで塗りつぶし、

そこで出会った光景や物事を書き記した。

ある日、そんな自分が書き綴った街歩きノートを、トーコさんに見せた。

トーコさんは、ストロベリーフィールドのベンチに座って、そのノートを一ページ一ページゆっくりと丹念に、うなずいたり、笑ったり、時には目をつむったりしながら、最後のページまで見つくして、静かにノートを閉じた。

「ここには、私の知らないニューヨークがたくさんあったわ。ありがとう。ノートを見ていたら、なんだか、写真集を見ているような気持ちになったの。もちろん、言葉や文章もすばらしいけれど、あなたよかったら写真を撮ってみたらどう？　あなたが感じているものは写真という表現と相性がよいと思うの」とトーコさんは言った。

「写真ですか……。あまり撮ったことがないから、よくわかりませんが興味はあります。写真って何でしょうね……」と、僕はトーコさんに聞いた。

「写真は……。そうね、たとえば、あなたがノートに書いた文章という表現を、写真という表現に変えてみればいいのよ。たとえば、コロンバスサークルで出会った、馬の悲しい目が、詩的な言葉と文章で書かれているけれど、これを一枚の写真で表すなら、あなたは何を写真に撮るのか。そうそう、あなたは街を歩きながら、きっとあなたしか見えない物語を探しているのよ。その物語を写真に撮ればいいのよ」とトーコさんは言った。

最初の被写体

物語を写真に撮る……。確かに僕は街を歩きながら、それはなんてことのない光景だけれど、見ていると、あたかも本一冊分くらいの物語が想像できるような、“ある状況”に足を止め、それを自分なりの言葉や文章で書き留めていた。

「写真か……」トーコさんと別れたあと、僕は道を歩きながら、もしカメラを持っていたら、僕は何を撮るのだろうと考えてみた。

その時、借りている部屋のクローゼットにカメラがあったことを思い出した。

部屋の持ち主のケイトは、ここにあるものはすべて自由に使っていいと言っていた。僕は急いで部屋に戻り、クローゼットを開けて、カメラを取り出した。

カメラはフリースのジャケットに包まれて置かれていた。おそらくフリースのジャケットをクッション代わりにしたのだろう。包みを広げると、ドイツ製の古いマニュアル式の小さなカメラだった。

しかも、カメラを包んでいたフリースのジャケットのポケットには、フィルムが二本入っていた。「このカメラ、使ってもいいのだろうか……」

これからケイトはピアノ教室のために、この部屋にやってくる。僕はその時にカメラを使ってもいいかと聞いてみようと思った。

その日の夕方、部屋にやってきたケイトに「カメラを見つけたけど、使ってもいいかな……」と聞くと、「あ、それは父のお下がりのカメラよ。ジャックに貸したけれど、結局使ってなかったみたい。だから、いいわよ使っても。そのフリースはジャックのものだけど、もちろんそれも着てもいいわよ」と、ケイトは、カメラなんか興味ないわ、と言うように答えた。ジャックとは、ケイトのボーイフレンドだ。

正直に言うと、僕にとっては、フリースのほうが嬉しかった。ニューヨークの秋がこんなに寒いとは思わなかったのだ。しかも、それまで僕は、フリースという素材の服を着たことがなかった。

フリースに袖を通し、ジッパーで前をしめると、軽くてあたたかくて、肌ざわりが良くて、そのまま横になって眠りたくなるような気分になった。

僕はフリースのジャケットを着て、肩からカメラを下げて街に出た。不思議なことに、フリースを着ていると、部屋から外に出た時のほうがあったかく感じた。

最初の一枚は何を撮ろうかと考えた。いや、何を撮らないといけないのか、撮るべきなのかと考えた。

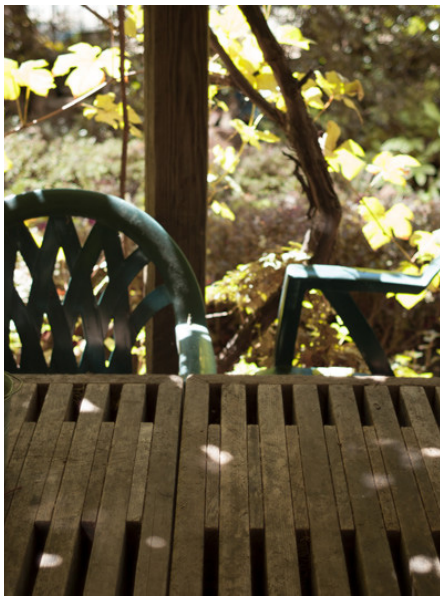
僕は直感的に、今ニューヨークにいる自分を撮ってみようと思った。

僕は、道に面した家具屋の、ショーウインドウに置かれた鏡に映った自分に、カメラを向けた。

フリースを着て、カメラを構えた自分の姿がそこにはあった。僕はハッとした。その姿は痩せてみすぼらしかった。けれども、よく見ると、何かの物語の主人公のようにも思えた。

「旅とはいつも自分が主人公である……」いつかノートに僕はこんな言葉を書いていた。そうだ、主人公は自分なんだ。

僕は、フィルムをゆっくりと巻き上げ、絞りとシャッター速度を決めて、ピントを合わせ、シャッターを切った。



FUNCTION 1

アップデートしたフリース

体温を蓄えて暖かく、外気は遮断。高い通気性と速乾性をあわせもち、かつ軽量な機能素材。ユニクロのフリースはきめ細やかでしっとりした表情の生地を開発し、さらなる極上の着心地を目指しアップデートしました。**肌に直接触れる首裏には柔らかなハイピングを走らせ、摩擦によるストレスを軽減。**

サイドポケットに手を入れると、フリースと通気性の高いメッシュが包んでくれます。**ジップには引き手を追加し、手袋のままでも開閉できる仕様に。**

FUNCTION 2

オールマイティウェアとして

細すぎない適度なボリュームのアーム、腕周りの可動域を広く、身頃はすっきりと。「オールマイティウェア」を掲げ考え抜いたフォルムは、アウターとしての存在感とインナーとしても収まりのよい絶妙なパターン設計。

シャツやニットを中に着て、ダウンベストとのレイヤードで街へ、ランニングなどのスポーツウェアに、ダウンやブルゾンのインナー使いでアウトドアへ、リラックスして過ごす暖房いらずのホームウェアとして。LifeWearの本領発揮です。

012

MEN
フリース
フルジップ
ジャケット

フリースを着ると、
街に出て、自由気ままに、
どこまでも歩きたくなる。
旅がしたくなる。

松浦弥太郎

MEN
フリース
フルジップジャケット（長袖）
¥1,990 ＋消費税

2017.10.24

013

MEN
ラムVネック
カーディガン

母のキャメル色のカーディガン。

こだわりのワードローブ

「今、ニューヨークの西七十四丁目の小さなアパートを、一カ月間だけ借りて、一人暮らしをしています。ワンルームの真ん中に、大きなピアノがあり、その下に布団を敷いて寝ています。寝転がって上を見ると、ピアノの内側がよく見える、面白い体験をしています。おかあさん、心配しないでください。ごはんはしっかり食べてます。ニューヨークは、秋が深まり寒くなってきました。また手紙を書きます」

母から届いた葉書に、電話をするように、と書いてあった。声を聴いたら、きっと帰りたくなってしまう。だから、電話はせず、母に手紙を書いた。

さて。部屋の持ち主のケイトは、なぜ、同居人だったボーイフレンドの服を、置いたままなのだろう。ボーイフレンドも、なぜ自分の服を引き取らないのだろう。

ある日、僕はそんなことをぼんやり考えながら、クローゼットの中にある、きれいに畳まれた服をひとつひとつ取り出してみた。

質実剛健。生地や縫製がいいものばかり。外国の洗剤の匂い。それが服の印象だった。ゴワッとしたオックスフォードのシャツ。肉厚のスエットとパーカー。フランネルのパンツ。色落ちしたデニム。仕立ての良いジャケットと、ダッフルコート。そして、他のアイテムに

比べて数が多いニット類。ふっくらしてやわらかいウールのカーディガンは色違いで三枚もあった。

服の下に頑丈そうな木箱が二つあった。なんだろうと思って開けてみると、中には古雑誌や本がぎっしり詰まっていた。僕は何冊か取り出してみた。

雑誌は見るからに古いもので、そのほとんどが一九三〇年代から一九五〇年代にかけてのメンズファッション雑誌だった。雑誌のタイトルは「APPAREL ARTS」とあった。

ページを開くと、そこにはイラストによるメンズファッションのコーディネートやアイテムの紹介がされていた。非常に上品で、スタイリッシュで優雅な、メンズファッションを紹介した雑誌だ。

持ち主は、相当なファッションマニアか、メンズファッションの研究者か、ファッションデザイナーかと思った。けれども、こんなに貴重なものを、なぜここに置いたままなのか。謎は深まるばかりだった。

クローゼットから取り出した服を見ると、そのほとんどが、この雑誌から飛び出してきたようなスタンダードなアイテムばかりで、しかも、タグなどをよく見ると、現代のものではなく、何十年も大切に着続けてきた服ばかりだった。

僕はジャックという人物にますます興味が湧いた。

カメラ、服、雑誌、すべて価値のある、こだわり抜いたコレクションばかり。

明日はレッスンのためにケイトが部屋にやって来る。そうしたら、ジャックのことを詳しく聞こう。僕は取り出した服を、クローゼットに戻した。

一着だけ、キャメル色のカーディガンを借りることにした。それはいつも母が着ていたカーディガンにとても似ているカーディガンだった。

袖口の匂い

母は一着のカーディガンをとても大切にしていた。昔、家族が写った古い写真を見ていた時、赤ん坊の僕を抱きかかえている母が、いつも見慣れているカーディガンを着ていたのでびっくりした。こんなに昔から着ているんだと。

もしかしたら、僕が生まれる前から着ているのかもしれない。

母のカーディガンの袖口には、小さな毛玉ができていて、幼い頃の僕は、丁度それが目の高さにあったので、指でつまんだり、いじくって遊んだりしていた。

一度、匂いをかいだことがある。「コロッケの匂いがする」と母に言うと、母は笑い転げて、「そう？　おもしろいわね」と言った。

母のキャメル色のカーディガンは、いつも台所の椅子にかけられていた。

借りたカーディガンを羽織った時、僕はおもむろに袖口を見た。このカーディガンの袖口にも小さな毛玉がいくつもできていた。サイズが大きいせいか、手首が少し隠れて、もったりした感じも、母が着るカーディガンと似ていた。

やっぱりカーディガンは少し大きめがいい。心の中でそんなふうに思った。ボタンははめるのか、外しておくのか。母はいつも外していた。授業参観に来てくれた時、母はボタンをはめていて、見た目が違って、はっとしたことを覚えている。

僕は部屋の窓辺に立って、外の景色を見ながら、そんなふうに、母とカーディガンの記憶をいくつも思い出した。

ケイトが部屋にやってきた。

「あら、なんでいるの？　これからレッスンだから早く出ていって」とケイトは僕に言った。けれども、出かける支度を済ませてある僕を見て、「うん、まあ、でも、ゆっくりでもいいわよ」と、気遣ってくれた。

「ケイト、このカーディガン借りるよ。あと、ジャックってどんな人？　なぜこんなに服を置いたままなの？」と聞くと、ケイトは聞こえない振りをして返事をしなかった。

「ジャックに会ってみたいな」と僕が言うと、「ストランドに行けばいるわよ、たぶん」とケイトは呟くように言った。

「ストランドって？」と聞くと、「十二丁目の大きな古本屋よ……」とケイトは答えた。

十二丁目のストランドという古本屋は、セスから、好きな本屋だと聞いたことがあった。

僕はカーディガンを羽織って部屋を出た。信号待ちしている時、袖口の匂いをかいでいる自分がいた。

FUNCTION 1

ラムウールは冬の味方

ラムウールは、ウールのよさを凝縮した天然素材です。**軽量で柔らかくふんわりとした肌触り、吸湿性と放湿性、弾力性があるのでシワになりにくく、繊維の縮れ部分に空気を含みあたたかい**のが特徴。

肌寒い朝晩にサラリと羽織る、カットソーやシャツの上に重ねる、ジャケットやブルゾンの中に着る。**日常のいろんなシーンで“ちょうどいい温もり”を得ることができるワードローブの心強い味方**です。

FUNCTION 2

定番をあたらしく

Vネックの角度、深さ、開きはミリ単位で調整し、襟、袖、裾のリブは編みのテンションを変えてもたつきを解消。肩周りの動きやすさを意識した袖付けと、すっきりとしたアームホールを設計、ボタンホール裏にはナイロンテープで強度を高め、着丈とフロントポケットのベストなバランスを探しました。

ベーシックカラーに杢調のミックスニットを追加することで、定番色が新鮮に映ります。ジャストでもオーバーサイズでも。年齢性別を超えて着こなしの幅を広げてくれるあたらしい定番です。

013

MEN
ラムVネック
カーディガン

カーディガンは、
ふわっと羽織るのが好き。
ボタンは外しておく。
後ろ姿がすてきなんだ。

松浦弥太郎

MEN
ラムVネック
カーディガン（長袖）
¥2,990 ＋消費税

2017.10.31

014

MEN
ウール
チェスターコート

彼は毎日ストランド書店にいる。

今と生きる

今朝はずいぶん早く起きた。外はまだ暗かった。僕は横になったまま夜明けを待った。

毎朝、起きるたびに、今ここはどこなのかという戸惑いを感じていた。そして、今日は何をしようかと考えた。いや、一体、僕は今、ここで何をしているのかと自問しつつ、まあ、いいかと思ったりする自分がいた。

いつか読んだ、ソール・ベロウの『この日をつかめ』という一冊があった。

その本の中に、現在と生きる、という一文がある。何事も今、今を見る、今を感じる、今と向き合い、今から逃げない、すなわち、今を大切にするという生き方だ。

外が明るくなった。冬のニューヨークを過ごすために買ったコートを着て、アパートを出た。朝食を食べに行く。寒さのせいで息が白い。それも今だ。

朝のブロードウェイは、通勤する人々が川の流れのようにせわしなく歩いている。そうだ、みんな今日を必死に生きている。それも今だ。

空を見上げると、冬の薄い青空に、綿のような白い雲が浮かんでいる。それも今だ。

世の中から取り残されているような自分がいる。けれども、今に見てろ、と歯をくいしばる自分がいる。それも今だ。

そして、今、何を思うのか。今の自分がどうであろうと。そうだ、今という真実ともっと向き合おう。それが今を生きるということだから。

今から目をそむけない。明日や未来も、今この時、ここにあるのだから。

コーヒーを片手に、ブロードウェイ沿いの花壇の脇のベンチに座った。

何もできなくたって、いいじゃないか。くんずほぐれつで、いいじゃないか。わからないままで、いいじゃないか。もっと、今と戦ってやろう。

戦いというのは勝ち負けではない。今としっかり向き合って逃げないということだ。

立ち上がって、コートのポケットから手を出すと、少し背が伸びたような気がした。

日本を離れて、サンフランシスコからニューヨークへと移動し、今、僕は西七十四丁目にいる。

今と生きる。僕はいつも自分が弱った時、困った時、悩んだ時、この言葉の意味を思い浮かべる。自分がどんな状況であろうと、今と生きるんだ、と。

ストランド書店

十二丁目のストランド書店を訪れた。元ボーイフレンドのジャックに会いたいと、ケイトに言うと、彼は毎日ストランド書店にいる、と聞いたからだ。

僕はジャックの顔を知らないけれど、行けばきっと会える予感がしていた。

ストランドは十二丁目の角に建つ、ビルの地下一階から三階までを占めた大きな古書店だ。キャッチフレーズに「蔵書を並べると八マイルもの距離になる」とあった。

店に入ると、自分のバッグを預けるカウンターがあった。店内では誰もが手ぶらになるシステムだ。本の盗難防止であろうが、本屋で手ぶらになれるのは嬉しい。僕はバッグからカメラを取り出し、肩にぶら下げて、売り場に入った。

広い店内の、どの場所にいっても客がたくさんいて、レジの前では会計を待つ人が長い行列を作っていた。老舗のストランド書店は、ニューヨーカーに愛されているのだろう。

地下のフロアに行ってみると、そこは倉庫のように殺風景で客が少なかった。僕は、フロアの片隅に、未整理のアートブックが積まれたセクションを見つけた。そこには、表紙カバーが破れたりした五〇年代から

六〇年代のデザイン年鑑がどっさりとあった。しかも、アメリカ、フランス、イタリア、ドイツといった様々な国で出版されたものだ。

グラフィカルなポスターや、その時代性が描かれた広告が好きだった僕には宝の山に見えた。値段を見ると、どれも均一で五ドルだった。全部欲しいと思った。

客が少ないことをいいことに、欲しいものだけを厳選して、テーブルに積み上げていった。積み上げてみると、二十二冊にもなった。それだけ買っても百十ドル。安いけれど、その日の手持ちのお金では足りなかった。

一階に駆け上がり、店員に取り置きができるかと聞いた。すると、一週間なら取り置きをしてくれるとわかった。僕は店員の腕を引っ張って地下に戻り、本を運んでもらおうと思った。すると、積んでおいた本を、一冊一冊丹念に見ている、カールした金髪に、ニットキャップをかぶり、グレイのチェスターコートを着た男がいた。

「すみません、これ僕が買う本なんです」と声をかけると、その男は僕をじっと見て、「安くていい本ばかりをよく選んだな。君は本屋か？」と聞いてきた。

「本屋ではありません。欲しいと思った本を選んだだけです」と僕は答えた。男はにっこりと笑って、「昨日は、ここにこの本は無かった。きっと今ここに置かれたばかりの本だろう。そんな本に出会えた君はラッキーだな。僕もこの本は全部買いたいくらいだ。君はいい目をしてる」と言った。そんなふうに言われた僕は嬉しくなった。

「そのカメラもいいな。君は写真家かい？」と、僕が肩からぶら下げているカメラを指差して男は言った。

「いえ、知り合いから借りてます」と、僕が答えると、「そのカメラ見たことがあるな……」と男は言った。

FUNCTION 1

カシミヤ混の上質

上質なドレープとぬくもりある風合いの秘密は、ウールに10%のカシミヤをブレンドしたこと。贅沢な素材であるカシミヤ混の生地は通常、表面の光沢が強くエレガントな印象が色濃くなりがちです。

ユニクロのチェスターコートは、カシミヤ特有の柔らかさと滑らかさを残しながら、ほどよい光沢を持つオリジナル生地を採用。英国の伝統服に起源をもつ品格と、あらゆるシーンで羽織れる気軽さを融合させた、LifeWearを体現する一着です。

FUNCTION 2

本格的なつくり

チェスターコートの顔はVゾーンです。第一ボタンの位置や首回りの幅、襟やラペルの太さなどを何度も微調整。**スーツやジャケットとの着合わせだけでなく、パーカやタートルネック、ダウンベストなど、カジュアルに組み合わせても決まるVゾーン**が自慢です。

オーダースーツなどに用いられる**AMFステッチ（手縫い風の縫い目）を襟やポケットのフラップ縁に施し、ふんわりと折り返る立体感を実現。内ポケットの仕様と共に本格的なつくりで仕上げています。**

014

MEN
ウール
チェスターコート

冬の寒い日、
チェスターコートを着て、
ベンチに座ってコーヒーを飲む。
白い湯気と一緒に、
あの日の思い出が浮かび上がる。

松浦弥太郎

MEN
ウールカシミヤ
チェスターコート
¥14,900 ＋消費税

2017.11.7

015

MEN
ブロックテック
ウォームイージー
パンツ

オーセンティックだから、飽きることはないんだ。

美の出発点

「そのカメラをちょっと見せてくれないか？」と、ブロードウェイ十二丁目の角に建つ、大きな古書店「ストランド書店」の地下フロアで、僕に話しかけてきた男がいた。

このカメラは、ある人から借りているものだと告げると、男は、「うんうん」と頷いてから、カメラをしげしげと見て、「やっぱりそうだ、このカメラの持ち主は僕の知り合いだ」と言った。

「もしかしたら、あなたはジャックさんですか？」と聞くと、「なんで僕の名前を知っているんだい？」と男は驚いた。

西七十四丁目のアパートを、期限付きで借りた経緯、クローゼットの中に残されていた服や本、雑誌に興味を持って、ケイトからあなたの存在を知ったことを僕は男に話した。

男は「なるほど」と言って、クスクスと笑い、「僕がジャックです。面白い出会いだな。よろしく」と言って、手を差し出した。

「君は本が好きなのかい？いや、古い本が好きなのかい？選んだ本を見ると、君はグラフィックデザインに詳しくて、いろいろなことを知ってるようだけど……」と、ジャックは僕に聞いた。

「本は新しいのも古いのも好きです。デザインについては、ひとつも詳しくはありません。しいて言えば、自分が出会って感動した何か、それは文章であったり、写真であったり、絵であったり、デザインであったり、そういうもののルーツというか、その感動の原点は何かということに、とても興味があるんです。美しいものには、必ずその美しさの出発点があるはずで、僕はその出発点を、自分なりの視点で見つけて、学びたいといつも思っているんです」

「その考え方はすばらしいな。日本人は、そういう考え方をみんな持っているのかい?」とジャックは聞いた。

「この考え方が日本人的なのかどうかは、わからないけれど、日本人の美意識は、目に見えるもの以上に、目には見えない、そのものの本質と奥行きを重要としているのかもしれません。たとえば、その目に見えない本質と奥行きを、心の働きである、おもてなしという概念で、目に見えるように試みる行為のひとつに、日本の茶の湯がありますね」と僕は話した。

「おもてなし……。アメリカ人の僕には難しい概念だけど、君が言おうとしていることは、よくわかる。美に対する探究心が強いということだね。心の目で見る、という意識は、鈴木大拙という仏教哲学者の本で読んだことがあるよ。僕らが話しているのは非常にZEN的だね」とジャックは言った。

「むつかしい話をしてしまって、すみません。とにかく、僕はあなたのワードローブや、本や雑誌が、自分の琴線に触れたんです」

「いやいや、僕こそ興味深い話ができて、嬉しいよ。よかったら、どこかにコーヒーでも飲みに行かないかい」

僕とジャックは、一緒に店を出た。

「今日は一段と寒いな」とジャックは言って、あったかそうなパンツのポケットに手を入れた。

ドーナツ屋で

僕らは「ストランド書店」のすぐ近くにあったドーナツ屋に入った。

「僕はドーナツが好きです。だから、ドーナツ屋のカウンターで、ドーナツとコーヒーを味わうのは至福なんです」と言うと、「僕もそうだよ。ニューヨークにおいてドーナツ屋はなくてはならない存在なんだ。僕らは気が合うな」とジャックは笑った。

「僕は雑誌が好きなんだ……」と、大きなマグカップに注がれたコーヒーを飲みながら、ジャックは独り言のように言った。

「アメリカにおいて雑誌が生まれたのは、一七四一年。その名も『アメリカン・マガジン』。退屈な新聞の社説のようなものだったから、読者がつかず、たった三号で廃刊になった。その後、一九一三年に社交と流行をテーマにした『バニティ・フェア』が創刊されて、本当の意味での、アメリカの雑誌文化が始まったんだ…。まさに君の言う出発点だね。その『バニティ・フェア』は、今のものとは別格に違っていて、まさに当時のアメリカの美のクオリティが『バニティ・フェア』には集結していたんだ」

ジャックは自分の好きな雑誌のことを、ドーナツをかじり、コーヒーを飲みながら、淡々と僕に語ってくれた。

「とにかく、雑誌の醍醐味は、見て楽しむ、ことなんだ。そのために、絵やイラストレーション、写真、そして、タイポグラフィやレイアウトデザインが、読者の目をひきつけるために、競い合うように美を追求していった。そしてまた、それを生み出す世界中の才能が集まったのも、雑誌というメディアなんだ」とジャックは言った。

この日、ジャックは、ブルーストライプのシャツの上に、ネイビーのクルーネックのニットを着て、グレイのウールパンツに、黒のウイングチップシューズを履いていた。

「部屋に残されたワードローブだけど、どれもすてきですね。うまく言えないけれど、ああいったトラッドなアイテムが僕も好きです。今日着ているニットも長く着ているんですか?」と僕は聞いた。

「これはもう十年以上着ているよ。オーセンティックだから飽きることはないんだ。今日着ている中では、パンツが一番古いかな。これは大学の時に買ったから十五年以上。ニューヨークの冬は寒い。だから、あったかいウールのパンツは必需品なんだ。父によく言われたのが、冬の寒い日に出かけるときは、とにかく下半身を冷やさないように、あったかいパンツを履くということ」と、ジャックは言った。

「ところで、毎日『ストランド書店』にいるって、ケイトから聞いたけれど…それは本当?」と言うと、「ああ、毎日『ストランド書店』にいるよ。仕事だからね」とジャックは答えた。

「仕事って?」と聞くと、「どんな仕事か知りたいかい?」とジャックは、ドーナツをかじりながら言った。

FUNCTION 1

あたたかさの追求

足を通した瞬間からあたたかさを実感できる通称“暖パン”。**裏地にはやわらかなフリースを、表地には軽量で高強度なリップストップ生地、さらに表地と裏地の間には冷たい風を防ぐフィルムを挟んだ3層構造。**

フロントポケットの中にもフリースを使用し、モバイルを入れられるようにポケットインポケットを搭載。ジッパー開閉式で中のモノが落ちない工夫をした太ももものサイドポケット、バックポケットは1つから2つに変更。収納力も自慢です。

FUNCTION 2

高いファッション性

ヒザ下から裾にかけてテーパードしていくスリムフィットのフォルム。**着用時の窮屈さや、裏地付きによる厚みを感じさせないデザインを追求しました。フィッティングを何度も繰り返して完成した自慢のシルエットです。**手袋をしたままでも着脱が容易なウエストバックルはイージーベルトの仕様に、裾のドローコードを絞ればブーツインもできます。

アウトドアに映えるアースカラーからウールのようにタウンユースに最適なものまで幅広い色展開。いつものパンツを暖パンに換えても違和感なくコーディネートに溶け込むスタイリッシュさ。冬の即戦力です。

015

MEN
ブロックテック
ウォームイージー
パンツ

寒くなると、
暖パンとの付き合いがはじまる。
何があろうと守ってくれる、
冬のたのもしい用心棒だ。

松浦弥太郎

MEN
ブロックテック
ウォームイージーパンツ
（リップストップ・丈標準79〜82cm）
¥3,990 ＋消費税

2017.11.14

016

MEN
ヒートテック
ニットキャップ
&
ヒートテック
ニットグローブ

誰かの役に立つことを すればいいのさ。

仕事の見つけ方

ジャックの口から、「仕事」という言葉が出て、なんだか僕は取り残されたような気持ちになった。

毎日、写真を撮ったり、文章を書いたり、本を読んだり、街を歩いたりしているけれど、今の自分には、堂々と仕事と呼べるものが無かったからだ。

コーヒーを一口ごくりと飲んで、仕事とは一体何だろうと思った。ドーナツ屋のカウンターの中では、ウエイトレスが客の注文を聞いたり、ドーナツを運んだり忙しく働いていた。

仕事という二文字の言葉を考えて、思いつくことを頭の中に並べてみた。

お金を稼ぐこと。生活を支えること。生きがい。大変なこと。疲れること。面倒くさいこと。朝から晩まで。人の言うことを聞くこと。叱られること。頭を下げること。毎日しなければならないこと。朝早く起きること。

思いつくことは、結局、我慢しなければならないことばかり。なのに、なぜみんな仕事をするのだろう。もちろん、仕事をしないと不自由なのはわかっている。目の前にいるジャックでさえ仕事をしている。しかも、楽しそうだ。ジャックも我慢しているのだろうか。

「ジャック、仕事って何だろうね」

僕がそう聞くと、「うーん。少なからず、嫌なことではないな」とジャックは答えた。

「仕事は嫌じゃないの?」と僕は言った。

「仕事はさ、誰かに必要とされているから、仕事として存在するのさ。ということは、仕事とは、いつも誰かの役に立つための何か、じゃないかな。もちろん、お金のため、生活のためという考え方もあるけれど、それは仕事を意味することではないよね。いつも面白いなと思うのは、こうして世の中を見渡してみると、ほとんどの人が何かしらの仕事をしている。みんな忙しそうにしている。さっき言ったように、仕事という名のもとで、みんな誰かの役に立つために働いているのさ。そうであれば、この世も捨てたもんじゃないと僕は思う。一人ひとりが仕事という行為によってつながっているということさ。このドーナツとコーヒーでさえ、僕らの会話に役立っているし、この甘い一口が、今の僕を癒やしてくれるというように」

ジャックは、ちぎったドーナツを口の中にぽんと入れて、片目をウインクさせた。

「君はどんな仕事をしているんだい?」とジャックが聞いた。

「何もしていない。無職なんだ……」と僕は答えた。

「仕事を探しているの?」

「生活するためのお金が必要だから、仕事をしないといけないと思ってはいる。けれども、何をしたらよいかわからないんだ」と、僕は答えた。

「仕事の見つけ方を僕は知っている。せっかくだから教えてあげよう。とても簡単だよ。それはね、自分がやったほうが、きっとうまくいく。もっとよくなる。要するに、きっと誰かの役に立つ。もっと誰かの役に立つということをすればいいのさ」

ジャックはこう言って、コーヒーのおかわりを頼んだ。

ブックハンター

仕事を見つけるということは、自分がやったほうが、きっとうまくいく。もっとよくなることを見つけること。誰かの役に立つために……。僕はジャックの言葉の意味をよく考えた。

「ニューヨークに、古書店がいくつあるか知ってるかい? おそらく百以上はある。古書店を訪れる客の十人に一人はコレクターと言われている。コレクターは毎日のように本を探している。彼らが探している本のほとんどは高価な本。高価ということは、それだけ探している人が多いということと、現存数が少ないということ。僕の仕事は、コレクターの代わりにそういった本を探してあげることなんだ。『ストランド書店』以外にも、毎日たくさんの本屋を訪れて、自分の顧客が探している本をいち早く、適正な価格で見つけてあげるのが仕事なんだ」とジャックは言った。

「僕は元々、古書好きで、ニューヨーク中の古書店を歩きまわっていた。すると、コレクターの代わりに本を探すという仕事をしている人の存在を知ったんだ。で、ある日、その仕事をしている人から、探している本のリストを見せてもらったら、その本のいくつかは、どの店で、幾らで売っているかを僕はすぐにわかった。その時、本を探すことに関しては、自分のほうが優れていて、もっと早く見つけられると気づいたんだ」

ジャックの話を聞くと、コレクターは、何人ものそういったブックハンターを抱えているから、すぐに誰が優れたブックハンターなのかがわかり、他のコレクターに負けないために、専属を求めてくるようになるという。

「もちろん、自分の得意なジャンルに限ってだけどね。僕のジャンルは、雑誌、写真集、アートブック、モダンファースト（現代文学の初版本）の四つ。このジャンルに限っては、ニューヨークでは、かなり腕の高いブックハンターの一人だよ。たまに、他のコレクターに引き抜かれることもあるんだよ」と、ジャックは言った。

僕は頭の後ろに手を組んで、椅子の背にもたれかかって、ドーナツ屋の窓の外を眺めた。

僕がやったほうがきっとうまくいくこと。もっとよくなることって、この世にあるのだろうか……と思いに耽った。

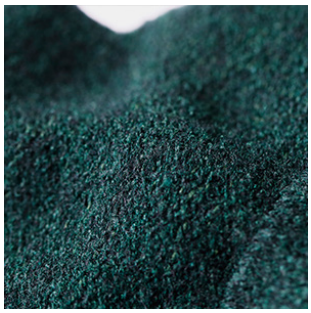
窓の外は、もう暗くなり、街のネオンがきらびやかに目に入った。風も強そうで、道行く人々はコートの襟を立てて歩いていた。

「そろそろ行こう」とジャックが言った。

僕らはドーナツとコーヒーの代金を払って、外に出た。

ジャックは、コートのポケットから、ニットキャップと手袋を出して身につけた。見るからに上質であたたかそうだった。

仕事の話をいきいきとしてくれた後だからか、ネイビーのニットキャップを深々とかぶった彼がとてもすてきに見えた。僕は、こんな人と仲良くなれたら嬉しいな、と思った。



FUNCTION 1

ぬくもりの秘密

肌触りなめらかなニット帽と、ふっくらと柔らかな手袋。実はどちらもヒートテックの糸から出来ています。体から発せられる水分を吸収し、繊維自体が発熱。さらに保温機能を持つヒートテックは、ユニクロが誇る機能素材。

ヒートテックが抜群のあたたかさを発揮しながら、ウールを加えることでぬくもりある表情を、アクリルのブレンドによって軽量化を実現。各素材の混率や原料選定の試作を重ねてたどり着いた、新たな冬の定番です。

FUNCTION 2

いつでもカバンに

ニット帽は、**パーツ同士を組み立てるのではなく、編み込みながら仕立てる「成型編み」を採用。伝統的なニットのテクニックを最大限に活かし、ローゲージで手編みのように仕上げました。**

柔らかな風合いの手袋は、親指と人差し指にタッチパネル対応の特殊加工を。シンプルな中に普段使いには欠かせない機能を加えました。どちらも豊富なカラバリが自慢。**アウトドアに、タウンユースに、そして旅先に。いつも近くに置いておきたいLifeWearです。**

016

MEN
ヒートテック
ニットキャップ
&
ヒートテック
ニットグローブ

あったかそうにすると、
なぜかみんな嬉しそう。
あったかそうにしてくれる、
冬の友だちがこれ。

松浦弥太郎

MEN
ヒートテックニットキャップ
¥990 ＋消費税

MEN
ヒートテックニットグローブ
¥990 ＋消費税

2017.11.21

017

MEN
シームレス
ダウンパーカ

明日の朝はダウンを着よう。

得意なことを

自分がやったほうが、きっとうまくいく。もっとよくなることを見つける。誰かの役に立つために……。

それがいわゆる、他人から見て、すてきなことではなくとも、ひとつやふたつは、こんな僕でも、きっとあるだろう。

思いつくことがある。

それは、自慢できることではないかもしれないが、掃除と片付けだ。子どもの頃から、掃除をしたり、散らかしたものを片付けるのが得意だった。

なぜそんなことに気づいたかわからないが、掃除であれば、目に見える場所だけでなく、たとえば、隠れているところというような、目に見えない場所こそが、実は汚れていて、そういうところをしっかりきれいにすると、掃除後のきれいさが違う。目に見えない場所だからこそ、きれいにすれば、なぜかその場の空気が変わるという、魔法のような不思議を小さい頃から感じていた。

片付けに関していうと、散らかった状態から、何をどのような順序で片付けていったらよいかを考えるのが好きというか、おそらく人よりも早く判断できた。いわばパズルを完成させるような感じで。

だから、掃除と片付けを苦と思ったことはなく、どちらかというと好きなほうだ。何が好きなのかというと、整理され、きれいになった時の達成感が嬉しかった。

だから、時たまこう思うのだ。潔癖症というわけではないけれど、僕が掃除したり、片付けをしたりしたほうが、もっときれいになるのに、と。

あともうひとつ、こんなこともある。

どんなものでも、それが人であっても、いいところを、すぐに見つけるのが得意だった。子どもの頃から、いつも思っていたのは、なぜみんなは、こういうすてきなところに気づかないのだろう、と思うことが多かった。もしかしたら、僕の価値観がみんなと違っているのかもしれないが、結局いつも遠回りして、僕が先に見つけたいいところにたどり着く。「ほら、やっぱり」と思うのだった。

ヨーイ、ドン、で、目の前に置かれたもののいいところを見つける競争があれば、かんたんに優勝できるのにな、と自惚れる自分もいた。

とにかく、自分がやったほうが、きっとうまくいく。もっとよくなることを見つける、という意識を、あらためて与えてくれたジャックに、僕は感謝をした。

ほんの少しだけど、先の未来に明るい希望が灯った。真っ暗闇ではなくなった。

もっとよく見よう

あ、そうだ！と、もうひとつ気がついた。自分がやったほうがきっとうまくいく何か。もっとよくなる何かを見つけるという、いわば、自分のいいところを見つけるということは、同時に自分の苦手なこと、うまくできないこと、わからないことを見つけることでもあるんだ、と。

僕は、いろいろな物事のいいところを見つけるのが好きで、得意だけれど、実を言うと、よくないところも同時にしっかり見つけていて、けれども、それは意識的に言葉にしてこなかったと思い出した。

「どんなものにも必ず、いいところもあるし、そうでないところもある。どちらも大切なことだ」。

昔、父が僕にこんなふうに言っていた。

苦手なことや、できないことに、あまりこだわる必要はないかもしれないが、自分は何が苦手で、何ができないのかを、しっかりと知っておくべきことが大切だろう。

夜空を見上げると、摩天楼の上に大きくてまんまるな月が浮かんでいた。道行く人は皆、寒そうに歩いている。

僕は誰ともなしに呟いた。

こんなふうにいろいろと考えているけれど、結局どうやって自分を社会に役立てたらいいか、ということ。だから、もっと世の中を観察しよう。もっと見て、見て、見尽くそう。

今、僕が着ている服にしても、自分が作ったほうがもっといいものができるという、誰かの情熱と仕事によって作られたものなんだ。

もしかしたら、あそこに自分がやったほうがうまくいくことがあるかもしれないし、それは目の前かもしれない。そうやっていつも外の世界を、よく観察しよう。

そして、もっと、困っている人を見つけよう。その人たちが、何に困っているのかを知ろう。この世の中には、困っていることは無限にあるだろう。無限にあるからこそ、そのうちのひとつかふたつは、きっと自分が役に立てることがあるはず。

歩いていると、ユニオン・スクエア・パークの脇で、偶然、友人のセスと道で会った。

セスとは、しょっちゅう会っているから、驚きはしなかったが、こんなふうに偶然に道端で会うのは、ニューヨークらしいといえばそうだ。

セスは、ふわっとしたダウンジャケットを着て、ストライプのマフラーを巻いて、あたたかそうだった。

「こんばんは。そのダウン、あったかそうだね、セス」と僕が言うと、「やあ。ニューヨークはこれからもっと寒くなる。君もダウンを着るといいよ。朝が来るたびに、ダウンに袖を通すのが、僕はほんとに楽しみなんだ」とセスは言った。そして、ジムに行くからと足早に去っていった。

僕は、部屋のクローゼットに、ジャックのダウンジャケットがあることを思い出した。

明日の朝はダウンを着よう。

FUNCTION 1

全天候型の頼もしさ

ダウンジャケットの特徴であるキルティング加工のステッチ部分を圧着仕様にした未来思考のデザイン。**縫い目をなくすことで風や雨の侵入を防ぎ、内側から羽毛が吹き出るのも防止。**

表地には軽量かつ耐久性の高いリップストップ生地を採用し、スポーティな印象ながらマットに仕上げることで上質さを加味。**生地表面には撥水剤をしっかりと固着させることで、撥水効果も格段にアップ。インナーが薄着でも、余裕のあたたかさ、高い機能性と軽さ。真冬の強い味方です。**

FUNCTION 2

「着る・使う」機能を集約

被っていない時やファスナーが開いた状態でもしっかりとしたボリュームと立体的な形状を保てるように、フードのパターンや構造を設計しました。**フード内側と裾のドローコードアジャスタは外から見えない位置に設置してミニマルな印象に。**

首元のインナー襟とリブ付きの内袖が風の侵入を防ぎ、外ポケットの裏地はフリース仕様。あたたかさを保ちます。右側腰部には雑誌も入る収納力を誇る内ポケットを、左側胸部にはイヤホンホールを設置。スタイリッシュで機能的。LifeWearの哲学を凝縮しました。

冬がいやでなくなり、
楽しい季節になった。
もっと寒くても、大丈夫さ。
ダウンが助けてくれる。

松浦弥太郎

MEN
シームレス
ダウンパーカ
¥12,900 ＋消費税

2017.11.28

018

フリース
ルームシューズ

服とは、着る人を元気にするもの。

服って何？

僕は、アパートのクローゼットの前に椅子を置いた。

座ると、クローゼットの端にある鏡に自分が映った。自分という姿をしげしげと見た。ちからが抜けて、とてもリラックスしている。

僕は、僕自身に対して少し安心した。これまで、自由な旅とはいえ、とにかくいろいろなことを悶々と考えがちで、不安が募るばかりの日々だった。けれども、ここニューヨークで、わずかに成長しているような実感があった。自分の中の何かが変わっていた。

その成長と変化って何か。

ひとつは、引きこもり気味の僕に何でも話し合える友だちができたこと。そして、もうひとつは、「自分が」という自己中心的な意識から、もっと広い世の中に対する「自分を」という意識に変わったことだ。

ニューヨークでの生活は、二週間が過ぎようとしていた。グランドピアノが置かれた、この小さな部屋にも、アッパーウエストサイドという町並みにも、マンハッタン中を歩いてふれあう人々にも慣れてきて、なんとなく緊張していた気持ちに余裕が生まれていた。

僕は椅子に座って、ジャックが置いていった服をじっと見つめた。

ジャックのワードローブが、なぜ自分を魅了するのだろう。そこから何を感じているのだろうと、まるで美術館の絵画を見るように、ひたすらじっと見続けた。クローゼットの一角には、僕自身の服も積み上がるように置かれていた。

頭によぎったのは、服って一体なんだろう……という素朴な問いだ。

服が欲しい。いつからかこんな思いを、当たり前のように、ずっと抱いている自分がいる。

なぜ服が欲しいのだろうか……。

かっこよくなりたいから、かっこよく見られたいから、服が欲しいという気持ち。

服は人をかっこよくしてくれるのか。いや違う、服は、自分が他人からどう思われたいか、というためのひとつの表現かな?すなわち、自分がどんな人間であるかを、知ってもらうためのもの。言葉にできない自分の中にある何かしらの主張を表したもの。ひとつのコミュニケーション。そのために服を選んでいる。服を着ている。

ジャックのワードローブは、とてもシンプルだ。限られた色、親しみのある素材、簡素なデザイン、それらが上質という品質で統一されている。その上質というものが、ジャックという人をそのまま表したものであった。

僕はこうも考えてみた。服を着るとどうなる?と。

自分で選ぶこと

服を着ると、僕は元気になる。なんだか嬉しくなる。セスが言っていた、寒い朝にダウンに袖を通すのが楽しみというのも、そうだ。様々なデザインや素材によって、寒さや暑さから身体を守ってくれるのも、元気を生むための役割だ。

服とは、着る人を元気にするもの。すてきにするもの。しかも毎日。

考えてみたら、今日は何を着ようかなと服を選ぶことは、今日の自分は、どんな服を着たら元気になるのかと無意識的に考えているのだろう。

僕が今、部屋で履いているコロンとしたかたちのルームシューズにしても、履くと心地良い（元気になる）から、どこにでも持って行くようになっている。

服って何だろう?の答え。

それは、暮らしや仕事、あらゆる日常につながる、人を元気にするために、人をすてきにするために考え抜かれた、様々な知恵と発明から生まれた必需品。

服は、自分が自分らしくあるためにある。考えた末、僕はこう辿り着いた。

その日の午後、僕はジャックのワードローブから、赤いダウンジャケットと、白のタートルネックのニット、色の落ちたデニムを選んで、ストランド書店に取り置きしてある、本を引き取りに行った。

ホリデーシーズン間近だからか、ストランド書店は、いつにも増してにぎわっていた。

どこかにジャックはいるだろうか、と思いながら店内をぶらぶらと歩いていると、本を抱えたジャックが、店員らしき人と立ち話しているのを発見した。

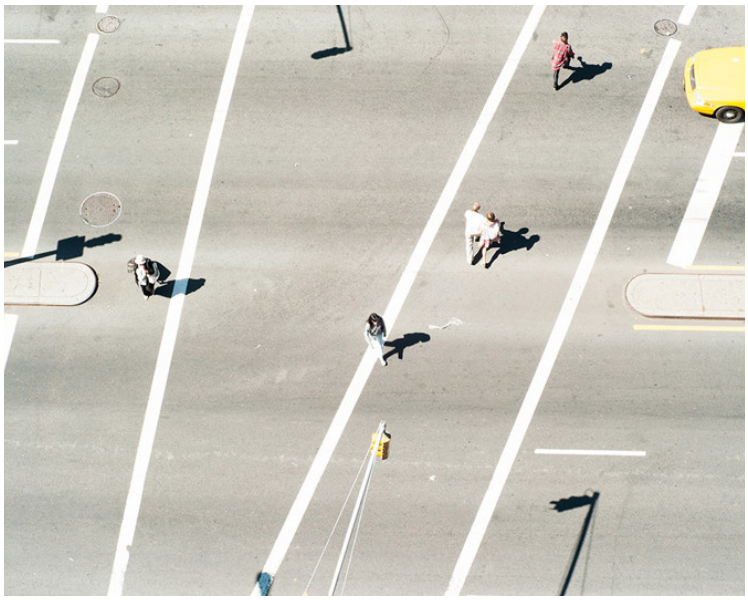
僕は近づいていって「やあ、ジャック」と声をかけた。

ジャックは、すぐに挨拶を返してくれたが、少しばかりシビアな話をしているようだった。ジャックは「ちょっと待ってて」という素振りを見せて、店員との話に戻った。

ジャックを待っている間に、僕は取り置きしていた本の代金を払い、あの日に選んだ本を自分のものにした。

ジャックの元に戻ると、立ち話に品の良い老紳士が加わり、さらに深刻な話になっているように見えた。どうやら、ジャックの抱えている本を、老紳士が受け取ろうとしているのを、ジャックは首を振りながら拒んでいる。

僕に気づいたジャックは、片目をつむって、「もう少し待ってて」と言った。



FUNCTION 1

ミッドソールの秘密

「世界一履き心地のよいルームシューズを」ユニクロのルームシューズに込めた想いです。快適な履き心地を実現したのは二層式のミッドソール。**足を入れた瞬間からずっと続くフカフカな感触の秘密は中反発ウレタンシート。体重が移動するたびにウレタンが戻ることで、履いている時は常に絶妙な弾力を体感していただけます。**

そして底面の「SOFT EVAカップソール」が足裏の形にフィットし、クッション性を発揮。フカフカと衝撃性を両立しているのです。

FUNCTION 2

ころんとしたシルエット

つま先が上がった可愛らしいフォルムにも意味があります。上がっていることで足を一歩前に出しやすくなり、歩行が楽になるのです。そして履いている際に圧迫を感じない秘密は、足全体の形に沿う立体フォルム。つま先には空間があり、指も自由に動かせる設計になっています。

最後の工程で、靴を作成するときに使用する足型を用いて熱成形を行い、立体フォルムを完成させるのです。**手洗いもできるから、いつも清潔。世界で一番快適なルームシューズです。**

018
フリース
ルームシューズ

家だけでなく、
旅先など、どこでも、
これを履くと、
そこは自分の部屋になる。

松浦弥太郎

フリース
ルームシューズ
¥990 ＋消費税

2017.12.5

019

MEN
ヒートテック
クルーネックT
(9分袖)

老紳士は一万ドルなら買おうと言った。

母のぬくもり

ある日の朝、いつものようにセントラルパークを歩いた。

僕は冬のセントラルパークが大好きだ。淡い冬の色をした空、うっそうとした木々、澄んだ空気など、時に驚くほどの静寂さを感じて、なんだか、ファンタジーの世界に迷い込んだような気持ちになる。

あそこにも一人、あちらにも一人と、ここを訪れた人は、一歩一歩ゆっくりと歩いて、散歩というひとときを楽しんでいる。みんなここで何を思い、何を考え、何を味わっているのだろう。そこにはどんな暮らしの日々があるのだろう。そんな気持ちで、僕も枯れ葉舞うセントラルパークをゆっくりと歩いた。ジャックから借りたダウンジャケットのポケットに手を入れて。

小さい頃の冬、遊びから帰った僕の冷たい手をあったかい手で包んでくれた母のぬくもりを思い出した。

学校が終わった夕方、どんなに寒かろうと、毎日のように、僕は友だちと、公園のすべり台やブランコや鉄棒で遊んだり、木登りを楽しんだりした。だからか、僕の手の甲はいつもあかぎれができていて、水で手を洗うとひりひりと痛んだ。

日が暮れ、夕飯の時間が近くなると、バイバーイと手を振って友だちと別れ、家に帰ると、母はいつも僕の手を

とり、「ああ、こんなに手を冷たくしてこの子は」と言い、あかぎれのできた僕の手を見て、「手を洗ったらちゃんと拭かないからよ」と叱りつつ、僕の手を、自分の手の内側であたためてくれた。

かさかさになった指先を見て、「ささくれもこんなに作って、親不孝だねー」と微笑んだ。

「あったかいお湯で手をよく洗って、しっかり拭くのよ」と母は言い、手を洗い終わると、僕の手にハンドクリームを入念に塗ってくれるのだった。

僕は母に手をあたためてもらったり、ていねいにハンドクリームを塗ってもらうのが好きで、毎日そうしてほしいから、わざと手や指の先のことは構わずに遊びまわった。

「あんた、手をもっといたわって大切にしなさいよ。この手に感謝しないといけないよ……」と母は言い、僕の手を包んだり、さすったりして、いつまでも、いつまでも、あたためるのだった。

僕は、シープメドウ脇の大きなくすの木の下のベンチに座って足を休め、ぼんやりと空を見上げ、「この空は、きっと日本にもつながっている……」と呟き、母を想った。

明日から僕は、ジャックの仕事を手伝うことになっていた。あることがきっかけになり、週に三日だけ手伝ってほしいとジャックに言われたのだ。

仕事を始めることを、母に手紙を書いて知らせよう……。そう思って、もう一度、空を見上げた。手をダウンジャケットのポケットから出し、しげしげと見た。

「手をもっと大切にしなさい。手に感謝しないといけないよ」と、母の声がどこかから聞こえてきた。

A GOLD BOOK

ジャックに会おうと十二丁目のストランド書店に行くと、店の中でジャックは、一冊の本を脇に抱え、店員と、エレガントな雰囲気の老紳士との三人で口論をしていた。

僕に気がついたジャックは目配せしたあとに、「やあ、こんばんは。ヤタロー」と言い、少し大げさに「彼は日本から来ている僕の友だちなんだ。紹介しよう」と言って、店員と老紳士に僕を紹介した。老紳士は、「ようこそ、ニューヨークへ」と柔和な笑顔で言った。

三人の話を聞いて事情がわかった。ジャックは、ある貴重な本を格安の値段で見つけた。そして、その本を買おうとした時、あまりの安さにレジ係の店員が気づき、値段を確かめると、その本はとんでもなく価値が高い本だとわかった。

しかし、ジャックは引き下がらず、価値があろうとなかろうと、値段を書いたのは店の責任だから、この値段で売るべきだと主張した。

揉めているところに、偶然、ジャックのクライアントであるコレクターの老紳士が通りかかり、今度は、その本を自分が正しい値段で買い取ると言い出した。

ジャックとしては、掘り出し物を見つけたのは自分であるから、クライアントとはいえ譲るわけにはいかず、

ここに書かれている値段で買う、と言ってきかなかった。

その本は、ポップアートで知られたアンディ・ウォーホルの「A GOLD BOOK」という、一九五七年に作家本人によって手作りされた作品集だった。金色のペーパーボードに、花や猫や、少女などが細い線で描かれた、オフセットリトグラフで、わずか二十二ページながら、表紙カバーが金色に輝く、実に美しい一冊だった。手作りなので、当然、数は少ない。

僕はジャックの耳元で「いくらで見つけたの?」と聞くと、「八十ドル……」と言った。店員はオーナーに値段を確かめなくてはならないから、この本は一旦預かると言い、コレクターの老紳士は一万ドルなら買おうと言った。

外出先のオーナーと電話がつながったらしく、あれこれと交渉の末、ジャックは渋々と本を店員に渡し、「決して値段のつけ間違いをしないでほしい」と店員に言い、コレクターの老紳士には、この本を買う権利を自分は得たので、入手したら連絡しますと告げた。

「一万ドルで買いますので……」と、老紳士はジャックに何度も伝えていた。

店を出た僕とジャックは、いつものドーナツ屋に入って、コーヒーを注文した。ジャックはひどく落ち込んで一言も話さなかった。

「ジャック…。さっきの本だけど、アパートの近くの古本屋で僕見たよ。値段はいくらかわからないけれど、本棚の上のほうに積んであったよ。金色だから覚えているんだ」

僕がそう言うと、ジャックは驚いた顔で僕の顔を見て、「え!ほんとかい?確かにあの本かい?今すぐ行こう。あの本が本棚にあるはずがないんだ!!」と言った。

僕とジャックは大急ぎでタクシーを捕まえて、その古本屋へと向かった。

FUNCTION 1

最高のインナーであるために

ヒートテックインナーはユニクロが誇る機能服。お客様からの声を元にプロダクトを見直し、毎年改良を行なっています。**4種の糸を組み合わせて独自開発した生地は、高いストレッチ性とつっぱりの軽減を実現。**

縫製糸は通常よりも柔らかなタイプを採用し、肌に直接触れる部分の摩擦を軽減させる工夫を行いました。**軽量で肌当たりよく、着ていることを忘れるような快適さと、究極の心地よさを目指しました。**

FUNCTION 2

着心地はさらなる高みへ

美容オイルとして支持される希少なモロッコ産アルガンオイルを繊維に練りこんだのは、世界初の試みです。これによって極細繊維の生地はしっとりと滑らかに、保湿効果を備えました。着脱時の不快な静電気も心配ありません。

ヒートテックの発熱、保温、吸湿速乾の性能はそのままに、暖房の効いた電車や部屋などで汗をかいた後もムレを軽減して汗冷えしにくいドライ機能をプラス。普段着から仕事着まで、冬の素肌にいつでも寄り添うLifeWearです。

019

MEN
ヒートテック
クルーネックT
(9分袖)

あの日の
母の手の平を思い出す、
やさしさと、
しっとりしたあたたかさ。

松浦弥太郎

MEN
ヒートテック
クルーネックT (9分袖)
¥990 ＋消費税

2017.12.12

020

特別編

明日着る服が決まっているのは、ほんとうに嬉しい。

明日も着る服

朝は五時に起きる。カーテンを開けて、シーツのシワを直し、ベッドを整える。起きたばかりだから、頭はまだ、ぼんやりとしている。

整然ときれいになったベッドを見ると、ふともう一度横になりたい気持ちが浮かぶけれど、そうしたことは一度もない。

寝間着を脱いで、熱いシャワーを浴び、顔を剃る。歯磨きをして、鏡に写った自分の顔をしげしげと見る。顔にはその日の調子がよく現れる。いわば健康チェック。

服を着ると、心のどこかのスイッチがカチッと入って、今日という一日がはじまる。窓を開けて、朝の空気を胸いっぱいに吸い込む。空を仰いで背伸びをする。さあ、今日をはじめよう、と気合を入れる。

小さい頃のことだ。「明日の用意をちゃんとしてから寝なさい」と母に言われて、僕は育った。明日の用意とは何か。それは明日着る服のこと。

だから、毎日、明日着る、シャツとパンツ、ニットなどを選び、きれいに畳んで、枕元に置いてから寝るのが習慣だった。

母の言うとおりにすると、あわただしい朝の時間に、その日に着る服に悩むことなく、すぐに着替えができて、

とてもよかった。おかげで、一日をすっと始めることができた。しかも、不思議なことに、枕元に服を置いて寝ると、安心するのか、よく眠ることができた。

その習慣は今でも身についている。枕元ではないが、明日着る服はすでに決まっていて、きれいに畳まれて、クローゼットに置いてある。

僕には、気に入って、これと決めた服を毎日のように着てしまうおかしなクセがある。いや、着てしまうというよりも、一度、気に入ると、毎日着たいがために、同じ服を何枚も買って、そればかりを着るようになる。

もっと言うと、気に入った服とその組み合わせが見つかったら、その服と組み合わせを、まるで決められたユニフォームのように、ずっと着続けられるのが、とても嬉しい。

こうすることによって、明日どうしよう、明日何を着よう、と選んだり、悩まなくてよいのは本当に楽なのだ。

今は、こんな服の組み合わせを、毎日、着続けている。

ブルーストライプのボタンダウンシャツ。それに、ネイビーのクルーネックセーター。リジッドのジーンズ。すべてユニクロである。

この三つの服が、明日の身支度として、毎日クローゼットに置かれている。

おしゃれには、いろいろな服を着るという楽しさがあるけれど、本当に気に入った服を、そればかり毎日着続けるという嬉しさもある。最近しみじみとそう思っている。

今までいろいろな服を着てきた中で、そんな服と、その組み合わせが、今、なぜそんなに好きなのか。

少し書いてみようと思う。

LifeWearとは

シャツは、毎週日曜に一週間分アイロンをかける。

持論であるが、シャツの良し悪しは、アイロンがかけやすいかどうか。アイロンをかけた時の仕上がりがどうかで大体が判断できる。

アイロンをかけていると、生地の質感と同時に、シワの伸び方やカットの妙、普段気がつかないシャツの細かな仕様やディテールが、否が応でも目に入る。

エクストラファインコットンシャツは、アイロンがけが実に楽しいシャツである。さっとかけただけで、びっくりするくらいピシッと伸びる生地で、使っている糸のきらっとした輝きと、そのステッチの美しさ、気づかいされた細かな仕様など、アイロンをかければかけるほどに感動の発見がある。

シャツのチェックポイントにボタンつけのクオリティがある。着ていくうちにボタンの糸がほつれるシャツが多々ある中で、これでもかと丈夫にボタンがつけられている。こういうこだわりも好きだ。

とにかく、シャツが好きな人が作ったシャツだとよく分かるのだ。そんなふうに、そのもののところどころに、作り手の愛情と気づかいをいちいち感じるから、毎日のように着たくなるのだろう。きっと。

白いシャツも好きだが、僕の定番は、ブルーのストライプのボタンダウンシャツだ。ストライプの幅は太くもなく、細くもない、このくらいが上品でいい。

ボタンダウンシャツの上に、ネイビーのメリノウールセーターを着る。ブルーのストライプとネイビーという組み合わせが、ひとつも飽きることなく僕は本当に好きなのだ。

メリノウールセーターはクルーネックを選ぶ。メリノウールのうんちくは、語らずしもわかるので、あえて書かないが、着はじめて一カ月くらい経った頃の、なんとも言えない馴染み具合に驚いた。今まで質の良さに満足して着ていたメリノウールよりも上を行っている。

ボトムにはデニムを選ぶ。レギュラーフィットで、色の濃いリジットデニムをロールアップして履く。

僕は昔、いわゆるヴィンテージデニムに深く傾倒したことがある。今でも好きであることは変わらない。だから断言する。このユニクロのデニムはいい。このまま履いていたら、どこがどんなふうに色落ちしていくのだろう。それが楽しみだ、と。

こんなふうに、好きで選んだボタンダウンシャツもメリノウールセーターもデニムも、毎日のように着続けると、必ず「あっ」と何かがわかる瞬間がある。

それは、服が自分の身体の一部のように馴染む心地よさであったり、先に書いた、作り手の愛情と気づかいを感じることであったりと、これまで体験したことのない、服と自分の新しい関係性（ストーリー）の発見だ。

そう考えるのは、もしかしたら僕一人かもしれないが、それこそがＬｉｆｅＷｅａｒのエッセンシャルであり、「Ｌｉｆｅ Ｗｅａｒ Ｓｔｏｒｙ ＩＯＯ」で僕が表現したいと思っていることだ。

今日も僕は、ブルーのストライプのボタンダウンシャツと、ネイビーのメリノウールセーターとデニムを着て、仕事を楽しみ、心地よく暮らしている。

明日着る服が決まっているのは、ほんとうに嬉しい。そして元気が出る。

大好きな組み合わせ

ネイビーにブルーストライプという組み合わせが大好きで、ニットの襟元や袖口から、ちらりと見えるストライプのシャツ生地に惚れぼれする。一年中この組み合わせのコーディネートをしていたい。

同じものを揃える

毎日着たいから、お気に入りのボタンダウンシャツは五枚揃えている。毎週日曜日の午後に、一週間分のアイロンをかけるのが楽しみ。きれいに畳んで、重ねた佇まいにしあわせを感じる。

デニムのマイルール

デニムはいつもワンサイズ上を選び、サイズの合ったベルトをつける。腰の位置は決して下げない。だからこそ裾を短めにロールアップして、カジュアルだけど、きちんとした身だしなみを心がける。

動きやすいから

エクストラファインコットンシャツの肌ざわりが好きだから、インナーは着ず、あえて素肌に着る。その上にメリノウールセーターを着ると、ぴたっと身体にフィットし、きちんと見えるにもかかわらず、動きやすいのが嬉しい。

デニムには白ソックス

ロールアップのバリエーションが楽しめるから、デニムの裾丈は、履いた時に2ロールできる長さで調整する。ボリュームのあるウイングチップには、白のスポーツソックスを合わせるのが好き。

バランスは大切

デニムのゆったりした腰回りには、合わせるメリノウールセーターは、あえてジャストサイズを選ぶ。ジャストなトップスとゆったりボトムスのバランス感が心地良いから。

袖にはこだわる

シャツもニットも袖の長さを、いつも気を使っている。いちばんのおしゃれは、サイズの合った服を着ることだと思っているからだ。特に、ちょうど良い袖の長さは、手を使う仕事を邪魔しない良さがある。

どうして、
いつも同じ服ばかり
着ているの？って聞いてほしい。

松浦弥太郎

上から時計回りに

エクストラファインコットンブロードストライプシャツ（長袖）**¥1,990** ＋消費税

エクストラファインメリノクルーネックセーター（長袖）**¥2,990** ＋消費税

ストレッチセルビッジスリムフィットジーンズ **¥3,990** ＋消費税

イタリアンサドルレザーベルト **¥2,990** ＋消費税

パイルラインソックス **¥390** ＋消費税

2017.12.19

021

MEN
スリムフィット
ジーンズ

店主は「二十ドルでいいよ」と言った。

本はどこに？

僕とジャックは、タクシーに乗って、ブロードウェイを北上し、七十四丁目へと向かった。

「ウォーホルの『A GOLD BOOK』は、希少本の中でも特別な一冊。僕は人生で二度しか手にしていないんだ。そんな本が、ストランドの子ども絵本の棚の隅に、目立たぬように棚差しされていたんだ。おそらく何も知らない店員が、年代だけを見て、適当に値段をつけて、薄い本だから絵本と思って置いたんだろう。古書の世界にはこういうことがよくある。それと出くわすのは運しかない。一分後には、もう誰かに買われてしまっているかもしれないからね。もちろん、その本の存在を知っていることが大事だけど、毎日、本屋の見回りをしていても、出会わない人もいるし、出会う人もいる。持っている運の違いさ」

タクシーの中でジャックはこう話して、「君は運が良さそうだな」と言った。

僕らは、ブロードウェイ沿いにあった、小さな古書店の前でタクシーを降りた。

「ここか！昔、毎日のように通った本屋だよ」とジャックは言った。

この古書店は、アパートから数分の場所にあり、ニューヨークに来て、僕が最初に入った古書店でも

あった。二階が希少本のコーナーになっていて、挿絵付きの初版本などが充実していた。

つい先日、訪れた時、「A GOLD BOOK」は、その二階の棚の上に、価値のなさそうな本と一緒に重ねて置いてあった。

ジャックは店に入ると、店主とスタッフに挨拶をした。「久しぶりだな、ジャック」、「ああ、近くを通りかかったんだ」

「上か？下か？」とジャックは小さな声で僕に聞いた。「上。奥の棚の上」と僕は答えた。

ジャックと僕は階段を上り、二階へ向かった。「どこだ？」とジャックが聞くので、僕が見つけた場所を指差すと、そこにあったはずの、雑多に積み重なっていた本がきれいに無くなっていた。

「遅かったか……」とジャックはつぶやいた。「確かにここにあったはずなんだ……」と、僕は言い、あたりを見回すと、棚の上に置かれていた本が、あたかも捨てられたかのように床の上に置かれ、さらに雑多な本が重ねて置かれていた。

「ここだ！」と僕は声を上げ、土を掘るようにして、床に積まれた本をどかして、この目で確かに見た、金色の表紙の薄い本を探した。

すると、積み上げられた本の一番下に「A GOLD BOOK」はあった。「ジャック、あったよ！」僕はジャックにその本を手渡した。

ジャックは一言も言わずに、びっくりした顔をし、僕から本を受け取り、その金色の本の表紙や中身をしげしげと見て、「こんなことってあるのか……」とつぶやいた。

「たしかに『A GOLD BOOK』だ。すごいな……。程度が抜群にいい。しかも、ウォーホルの筆記による献名が書かれているけれど……」

「信じられない……」そう言って、息を呑んだジャックの手が震えていた。

友だちのような

「ここ」を見てごらん」と、ジャックは本のページを開いて僕に見せた。

そこにはウォーホル自身の署名があり、その上に「親愛なる」と書かれていて、「Alexey Brodovitch」と献名があった。

一九五七年に自費出版された「A GOLD BOOK」は、ウォーホルのイラストレーター時代のもの。ウォーホルは、当時「ハーパースバザー」からイラストの注文を定期的に受けていた。

五十年代の「ハーパースバザー」は、そのアーティスティックなファッション表現と、グラフィカルなエディトリアルデザインで、抜群のクリエーティブを発揮したファッションマガジンとして名を高めていたが、その立役者が、敏腕アートディレクターのアレクセイ・ブロドヴィッチだった。

当時の若かりしウォーホルからすると、ブロドヴィッチは雲の上の存在。この献名からすると、ウォーホルは、自分の作品を知ってもらいたい一心でブロドヴィッチに献本したことが見受けられる。

この二冊には、そんな貴重な事実がしっかりと残されていた。それだけで、この「A GOLD BOOK」の価値は何倍にもなる。ジャックの手が震えるのは当然だった。

「すごい本を見つけたな……」とジャックは言った。そして「さて、どうやってこの本を手にいれようか…」と唇を噛んだ。

「確かにこの店はアートブックには詳しくない。だから、見落としもあるだろう。どこにも値段が書いていないのは、まだ整理してない証拠。だから、きっと店主は気づいていないんだ」とジャックは言った。

「二階の未整理の本は最近買い取ったものかい?」ジャックは本を手に持って、店主に話しかけた。

「ああ、近所のダコタハウスに住む老婦人から引取りに来てくれって言われたので、先日、引き取ったものだ。何か欲しいものでもあったかい?」と店主は答えた。

「これが混ざってたよ」と言って、ジャックは店主に「A GOLD BOOK」を手渡した。

すると店主は「二十ドルでいいよ」と言った。僕とジャックは目を見合わせた。

「それより、君の履いているデニムはいいな。ビンテージかい? いい色落ちをしてるな」と言って、店主は僕に話しかけてきた。

「いいえ、ビンテージではありません。でも、ずっと履き続けているから、友だちのようなものです」と僕は答えた。

「デニムは、君のいうように友だちみたいなものだね。私もデニムが好きだから、人の履いているデニムをどうしても見てしまうんだ。友だちを大事にするように、そのデニムも大事にしてやってくれ」と店主は言った。

ジャックは店主の肩を抱いてこう言った。「この本はべらぼうに価値がある。そんな値段で買うわけにはいかないよ」

「私には、知っている本もあれば、知らない本もある。それは君も一緒だろう。その本は知らない。ただそれだけのことさ。その本がどんなに価値があろうと、私は二十ドルで売ると言ったんだ。損はしない」と店主は言った。

「ヤタロー。君が見つけた本だ。この本は君が買うといい…」ジャックはこう言った。

「君がこの店に何度も来たことは知っているよ。これも何かの縁だ。本屋と客というのは親しくなるための機会が必ずあるものなんだ。今日はきっとそういう日じゃないかな」と、店主はそう言って僕にウインクした。

僕はデニムの前ポケットに手を入れた。そこには丁度二十ドル札一枚と、小銭が入っていた。

FUNCTION 1

ロサンゼルス産デニム

2016年秋、ユニクロは最先端の設備で最高のジーンズを研究開発する拠点として「ジーンズイノベーションセンター」を、カリフォルニア州ロサンゼルスに設立しました。あらゆるジーンズ文化と最新のトレンドが集まる“ジーンズの聖地”と呼ばれる場所です。

世界中からジーンズのスペシャリストが集い、生地の開発から染め、さらにはフィットやデザイン、そして加工までを一貫して行い、理想のジーンズへの挑戦を続けています。

FUNCTION 2

革新とヴィンテージのハイブリッド

世界屈指のデニム生地製造メーカー「カイハラ社」とともに糸の段階から開発。**頑丈なデニムらしい表情を持ちながら柔らかな風合いとストレッチ機能をあわせ持つオリジナル生地を採用しています。さらに本物のヴィンテージデニムから着想を得たユーズド加工は、何度も洗いの研究を重ねて完成した自信作。**

ボタン形状やリベットの刻印、ステッチワーク、ヒップポケットの位置調整で脚長効果を出すなど現代的なフィットやデザインを融合。**クローゼットに欠かせない存在だからこそ徹底的に追求した1本です。**

たくさんある服の中で、
ただひとつ、
友だちみたいになれるのが、
デニムなんだ。

松浦弥太郎

MEN
スリムフィットジーンズ
¥3,990 ＋消費税

2017.12.26

022

MEN
オックスフォード
シャツ

とにかく熟知。熟知に勝るものはないんだ。

友情の証

僕は二十ドルで、アンディ・ウォーホルの希少な「A GOLD BOOK」を手にいれた。

後から聞いたのだが、この本を手離した、ダコタハウスに暮らす老婦人は、アートディレクターだったブロドヴィッチの恋人だった人で、その当時、ブロドヴィッチ本人から本をもらったらしい。

「この前、引き取った本の中に、ウォーホルの珍しい本がありましたよ」と、古書店の店主が伝えると、その記憶を思い出したそうだが、「好きな方の手に渡ればいいですね」と答えたという。

「君はこの本を売ってもいいし、持っていてもいい。自由にすればいいよ。売りたくなったら声をかけてくれ。僕の顧客を紹介する。そして、よかったら、これから僕の仕事を手伝ってくれないかい。君は本に詳しいし、本を見つける目と、本を引き寄せる運が良さそうだから」とジャックは言った。

僕は喜んでジャックの申し出を受け入れた。

今回のような出来事は、宝探しのようで、とってもスリリングだったし、何よりジャックと仕事ができるのが嬉しかった。

その日の夜、ジャックは僕が借りている部屋の、

自分が残していった服と、大量の本をクローゼットから出して、整理をしてもいいかと言った。もちろん、いいよ、と僕は答えた。

「懐かしいなあ。この部屋で彼女と暮らしていたんだ」とジャックは言った。そして、クローゼットから自分の服を取り出し、「今の僕には、いるものが少ないから、よかったらもらってくれないかい?」と言い、自分が着る服だけを除けていった。

「あとはすべて君にあげるよ。いらなかったら捨ててもいいし、どうにでもしてくれ」とジャックは言った。

見ると、ジャックは、オックスフォードのボタンダウンシャツだけを選んでいた。

「ボタンダウンシャツが好きなの?」と聞くと、「ああ、そうなんだ。僕はトラッドな服が好きなんだけど、学生時代のお金の無いときに、がんばって最初に揃えたのが、オックスフォードのボタンダウンシャツなんだ。洗いたてのオックスフォードは、ごわっとしていて、素肌に着ると気持ちがいいんだ。これをさ、チノパンやデニムの上に合わせて、ボタンを二つくらい外して、ラフに着るのが好きで、一年中、そんな着こなしをしていたな」

白、ブルー、ピンクやイエロー、ストライプなど、七、八枚のオックスフォードのボタンダウンシャツをジャックは懐かしそうに畳んで自分のバッグにしまっていった。

「もしよかったら、これ、もらってくれないかい?」と言って、ジャックは、真っ白なオックスフォードのボタンダウンシャツを僕に手渡した。

「このシャツは、かなり前に、友情の証として、歳上の友人からもらったシャツなんだ。だから次に君にあげたいんだ」とジャックは照れくさそうに言った。

僕は飛び上がるくらいに嬉しかった。「ありがとう。大切に着るよ」と言って、僕はシャツを受け取った。

「ボロボロだけどね。まあ、いいシャツだよ」と、ジャックは笑いながら言い、照れを隠した。

熟知する

僕はジャックに、本を探す仕事には、何が必要なのかと聞いた。

すると、ジャックは「かんたんだよ!」と言い、「あ、でも、かんたんだけど、なかなかむつかしい」と答えた。

ジャックは部屋の隅にあった椅子を持ってきて、そこに座り、僕にも椅子に座るのをすすめて話しはじめた。

「そうだね。とにかく熟知することかな。まず、マンハッタン中の古書店を熟知すること。これが基本。それぞれの古書店が、何を専門にしているか、そこにはどんな客がいるのか。店にある一番希少な本は何か。儲かっているのか、儲かっていないのかなど。そして、君自身が専門とするジャンルの、本の歴史に熟知し、希少本の数々、それらの市場価格、それぞれの本を手にとって、なぜ価値が高いのかを知り尽くして熟知すること。大切なのはこれだけ。今、僕が言ったようなことを徹底的に学んで、誰よりも詳しくなることだね。そうすれば、君もすぐにプロのブックハンターになれる」とジャックは言った。

「とにかく熟知。熟知に勝るものはないんだ」とジャックは話し続けた。

そこで熟知した様々なことを、常にアップデートしていくことも大切で、とにかく必要な新しい情報を

どれだけたくさん集められるのか、どうやって自然と自分に新しい情報が集まるような人間関係と仕組みを作っていくのか。そのためには、毎日のようにマンハッタン中の古書店を歩きまわって、人とふれあい、たくさんの本棚を見尽くすことだと、ジャックは言った。

「とにかく一番詳しい人になればいい。そうすれば、みんな君を頼りにする。顧客もすぐに君の噂を聞きつけて、自分のリストを渡してくるし、古書店も情報を流すようになる」と。

自分がこれと決めたジャンルなり対象について、とにかく熟知し、一番詳しくなれば、自分の顧客を喜ばせるために、何をどうしたらいいのかがよくわかる、とジャックは話してくれた。

「あとは、一番詳しくなったら、矛盾しているようだけど、自分よりも、さらに詳しい人を探すのさ。不思議なもので、一番詳しくなると、必ず自分よりも詳しい人がいるってことに気づくんだ。上には上がいるってことだね。そして、その自分よりも詳しい人に会って、自分に足りないこと、次に学ぶべきことは何かを教えてもらうんだ。もしくは、それを感じ取るんだ」

「週に三回ほど、僕と一緒に古書店をまわろう。何をどんなふうに見て、何を集めていくのか、少しずつ教えていくよ」とジャックは言った。

「ジャック、ありがとう。ところで、『AGOLD BOOK』だけど、僕よりも欲しい人に売ろうと思うんだ」と僕は言った。

すると、「やっぱり君は素質があるな。いくらで売るのかは君の自由さ。ブックハンターである僕らがしてはいけないことは、本を所有すること。僕らの目的は、自分を喜ばせるためではなく、あくまでも顧客を喜ばせることだからね」

ジャックは「これからよろしく」と言って、笑みを浮かべて僕の手を握った。僕もジャックの手を握り返した。

FUNCTION 1

ユニクロの大定番

デニムやチノはもちろん、きれい目パンツとの合わせでビジネスやトラッドな着こなしにも対応できる。ユニクロのオックスフォードシャツはLifeWearを体現する存在と言っても過言ではない万能アイテムです。その秘密は糸にあります。

高級綿糸として知られるコーマ糸を用いてオックスフォード生地に仕上げることで、オックスフォード特有のしっかりとした素材感に、コーマ糸が持つ柔らかな肌触りと美しい光沢が同居。カジュアルな中に上品さが宿りました。

FUNCTION 2

細部へのこだわり

アームホールは動きやすさを考慮し身頃はすっきりと、生地のドレープがきれいに見えるシルエットを探しました。時代のトレンドを見据えながら微調整を繰り返し、パターン設計を行なっています。

襟は伝統的なボタンダウンカラーに、袖裏の剣ボロは太め、背中のボックスプリーツにはハンガーループを付属。随所にクラシックシャツの仕様を取り入れました。洗いざらしを自然体で、少しプレスをかけて品良く、どちらのスタイルにも違和感なくフィットするデザインに仕上げています。

僕のおしゃれは、
オックスフォードの
ボタンダウンシャツから、
はじまった。

松浦弥太郎

MEN
オックスフォードシャツ（長袖）
¥1,990 ＋消費税

2018.1.2

023
MEN
ウォッシャブル
Vネックセーター

ニューヨークには、古書店がいくつあるか知っているかい？

誰に、いくらで売るか

十ドルで手に入れた、アンディ・ウォーホルの「A GOLD BOOK」を売却することにした理由はふたつあった。

ひとつは、この本を心から欲しいと思っている人がいるなら、その人の元に置かれることが、本にとって一番いいと思ったこと。

もうひとつは、誰も信じないような値段で買うことができたのは、これから学ぼうとしている本探しの仕事をはじめるチャンスだと思ったこと。

「誰に、いくらで売るんだい？」と、ジャックは僕に聞いた。

売りたいものを持っていても、それを誰に売ったらよいのか、僕にはわからなかった。そこで思い出したのは、ジャックが教えてくれた「熟知」という言葉だった。

「まずは、ニューヨークでアートブックを収集しているコレクターを徹底的に調べて、その中で『A GOLD BOOK』を、最も探している人を見つけようと思う」と僕は答えた。

「そうだ。客のことを熟知すること。それが最初の一歩だね」とジャックは言った。

僕は、週三日のジャックの本探し以外の日で、アート

ブックコレクターについての徹底したリサーチを始めることにした。

とはいっても、アートブックは、ジャックの仕事の範疇でもあったので、そこで知り得ることも多かった。

ジャックは、コレクターの顔をした、ブローカーにだけは売ってはいけない、と言った。彼らは自分で本を探すことなく、苦労せずに右から左に本を売りさばくだけで、その利ざやだけを目的にしているからだ。

もちろん、それでビジネスが成り立つなら良いとするブックハンターもいるけれど、大事なのは、真のコレクターとの取引だと、ジャックは教えてくれた。

「いいかい、ブローカーの後ろには誰一人いない。しかし、真のコレクターの後ろには最低でも十人のコレクターがいる。いや、もっといるだろう。だから、真のコレクターと良い取引をすることで、自分の実力が自然とコレクターの輪に広まっていくんだ」

「僕は本の話をしたいからね。ブローカーはお金の話しかしないんだ。だから、いくら儲かるといっても、僕はブローカーから距離感を持って仕事をしている」とジャックは言った。

それには僕も同感した。

そんなある日、僕は「ストランド書店」のビルの階上にある、希少本専門とする売り場を訪れた。そこは、古本ではなく、十九世紀の美しい挿絵本といった、いわゆる価値の高い古書が整然と並び、部屋の雰囲気も、本というよりも、ギャラリーのようだった。

すると、どこかで聞いたことのある声が聞こえてきた。そちらの方を振り向くと、そこには「A GOLD BOOK」のいざこざの際、その場にいたジャックの顧客の老紳士の姿があった。

赤色のセーター

「こんにちは。お元気ですか?」と僕は老紳士に声をかけた。

老紳士は僕のことを忘れていたようで、「どこでお会いしましたか?」とていねいに答えてくれた。

あの時の経緯を話すと「ああ、あの時の日本の方でしたか。失礼しました」と老紳士は握手を求めて、あいさつをしてくれた。

「ひとつ教えていただいてもいいでしょうか? 僕はこれからジャックからブックハンターの仕事を教えてもらおうと思っているのですが、アートブックのコレクターの方々はどの古書店に一番いるんですか? コレクターのことを学びたいんです」と僕は聞いた。

「ニューヨークには古書店がいくつあるか知っているかい? おそらく二百以上はあるだろう。しかし、その中で路面店は半分くらい。残りの古書店は、路面店ではなく、ビルの一室で予約制の古書店として存在しているんだ。多くのコレクターは、こういった予約制の古書店に出入りしているもんだよ」と老紳士は言った。

親切な老紳士の顔を見ていたら、あの後、「A GOLD BOOK」を手に入れた話を思わずしたくなったが、僕は我慢をした。老紳士はジャックの顧客であるからだ。

ニューヨークにはたくさんの古書店がある。しかし、ビルの一室で、ひっそりとコレクター相手に商売をしている古書店もたくさんあることを僕ははじめて知った。

「アートブックならここに行けばいい」と老紳士は、バッグの中からメモ帳を出し、店の名前と電話番号を書いて僕に渡してくれた。

「私の紹介だと言えば、きっといろいろと教えてくれるだろう」と老紳士は言った。

その日の老紳士の出で立ちは、真っ白のボタンダウンシャツの上に、赤色のVネックセーターを着こなしていた。

「赤いセーターがお似合いですね」と僕が言うと、「これは娘にプレゼントされたんです。この歳で赤はちょっとどうだろうと思い、自分ではなかなか選ばない色ですが、着ていると必ず人に褒められるので、男でも赤のセーターはいいものだと思っているんです」と老紳士は照れくさそうに言った。

老紳士は自分の名刺を僕に渡して、「何かあったらいつでも連絡をください。私が何者かはジャックから聞くといい」と言った。

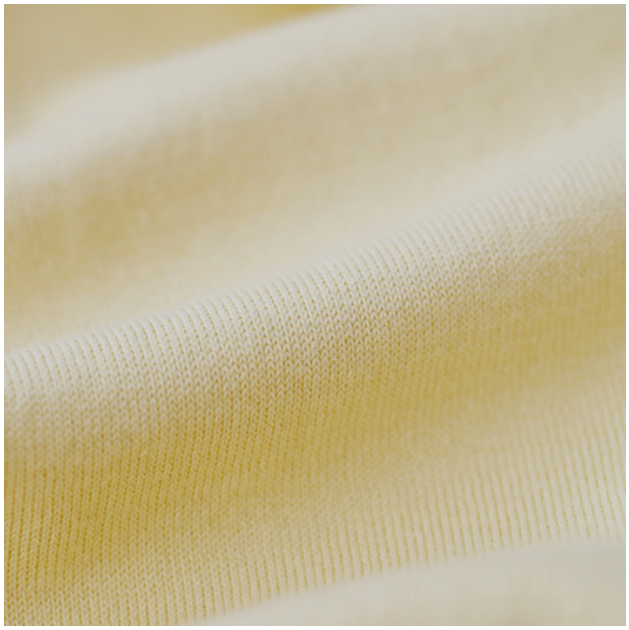
僕はふと、来月に控えた父の誕生日に、赤いセーターをプレゼントしようと思い立った。

別れ際に、「今日は何か、本を買ったのですか?」と聞くと、老紳士はバッグの中から一冊の本を僕に見せてくれた。タイトルには「PleasePlantThisBook」とあった。

「かわいらしい本でしょう。リチャード・ブローティガンを知ってますか? この本は、彼の詩集なんです」と老紳士は言った。

表紙には、小さな女の子の写真が印刷されていた。

「私の娘の小さな頃に似ているんです」と老紳士は言った。



FUNCTION 1

お客様の声を聞くこと

春の新作より、素材をスーピマコットンに変更しました。これまで採用していたコットンカシミヤは、風合いは良いものの「毛抜け」の問題がある。これはシャツを着る機会の多い男性のお客様からいただいた声でした。

何度も試行錯誤を繰り返し、**表地糸に希少なスーピマコットンを、裏地にナイロン糸を使用した新たな生地を開発。毛抜けは大幅に軽減され、滑らかな風合いを持ちながら毛玉ができにくく、かつ洗濯機でも洗えるセーターが完成しました。**

FUNCTION 2

こだわりのフォルム

繊維が長いスーピマコットンはしっとりとしたドレープとやさしい肌触りが特徴。裏地にナイロンを這わせることで型くずれしにくく、永くご愛用いただけます。ベストなバランスを探したVネックの深みは、Tシャツでもシャツでも楽しめる日々の味方。

袖付けと肩周りの構造は腕の可動域に沿った設計、ボディラインに馴染むデザインに。袖と裾のリブはボディの付け根から段階的に編みのテンションを変え、ストレスにならない自然なフィットに仕上げています。

普段、自分では、
選ばない色を選んでみる。
すると、みんなからほめられる

松浦弥太郎

MEN
ウォッシャブル
Vネックセーター（長袖）
¥1,990 ＋消費税

2018.1.9

024

MEN
ウルトラ
ライトダウン
コンパクト
ジャケット

優先順位とは、何かを捨てるということ。

優先順位をつける

何か自分が一歩踏み出そうとする時、僕はいつも、サンフランシスコからニューヨークへ向かう飛行機の機内で出会った、日本人の紳士との会話を思い出す。

「成功するにはどうしたらいいのでしょうか？」

とてもすてきな大人の男性として見えたその人に、その時、これからどうしたらよいかわからない気持ちでいっぱいだった僕は、失礼を承知で、思いつくままにあれこれと訊いたのだった。

「成功の定義は人それぞれでしょう。私が思うに、成功というよりも、何かをやり遂げるという言葉のほうがしっくりくるのではないかな。とはいえ、やり遂げるというのは容易ではなく、実際はやり遂げることはないんだ。やり遂げようという気持ちで、やり続けるというのが本当の価値ではないかな。やり続ける途中で、何かしらの成果が出るだろう。では、その成果が成功を意味するのかというと、そうではないと私は思う。まあ、終わらずに、やり続けていく、やり続けられる状態を保ちながら、スケールさせていくというのが成功に代わる言葉ではないかな」

僕はその人の話す言葉をひとつひとつメモをとって、できるだけ正確に理解しようと努めた。

「けれども、君の質問はとてもおもしろいね。その質問をいろいろな人にしてみるといいよ。そして、自分も仕事なり生活をしながら経験を積み、どの人の言葉が最も共感できるか。そうやって、自分もこのことについて考えてみて、君なりの答えを見つけるといい」

その人はこんなふうに僕にていねいに説明してくれた。

「これも何かの縁だろうから、僕が今、とても大切なことだと思って、自分自身が学ぶように考えていることがあるから、それを君に話そう」

その人はそう言って、自分のバッグからノートを取り出し、ノートの余白にペンで「優先順位」と書いた。

「何をするにも、何か起きたときでも、どんな時でも、いつも考えるべきことは優先順位なんだ。いつも正しい優先順位をつけられるのかどうか。今、何をするべきなのか、もしくは、今、何を学ぶべきなのか、今、何を知るべきなのか、今、誰と会うべきなのか。今、どこにいくべきなのか、などなど。やりたいこと、やるべきことというのは、たくさんあるけれど、そのリストアップをして、正しい優先順位をつけられるのかどうか。これはすべての基本ではないかなと私は思う」

「リストアップと優先順位ですか……」

「ああ、そうだ。今、この瞬間も、君は何をするべきなのか。その優先順位は無意識にしているはずなんだ。機内で眠って、身体を休めるのか。本を読んで何かを学ぶのか。明日の予定を考えるのか、などね」

その人は、紙コップに入ったコーヒーを一口飲んで、「その優先順位によって、人の人生は左右するんじゃないかな……」と言った。

軽快なダウン

「優先順位をつけるって簡単そうでむつかしいんだ。とにかくまずは、自分がするべきこと、大切にしたいこと、学びたいことなど、どんなことでも書き出すことだよね。そのリストアップをして、その順番をよく考える。しかしだ、大事なのは、その順番は常に変わるってことなんだ。いや、その順番を常に疑わなくてはいけないってこと。当然ながら、状況は変化するからね」

「そして、肝に命じるべきことは、優先順位とは、何かを捨てるということでもある。それができるかどうか。なかなかむつかしいよね」とも言った。

「何をやって、何をやらないのか。それをしっかり考えることですね」と僕は言った。

「そうだ。だから、優先順位は、いつも変化するべきものなんだ。固定するべきじゃないってことさ。常に疑い、常に更新するべきこと。すなわち、今、その瞬間に、何を最優先にするべきなのかを、リストの順位の中から、瞬時に選び取って的確に判断するということだね」

「そう、やるべきことは、瞬間瞬間で変わるんだ……」

その人はそう言いながら、自分で納得するように、うんうんと頷いて目をつむった。

「君と話ができてよかったよ。私もいろいろと考えの

整理ができて、それこそ優先順位の手入れが出来たよ」とその人は言って、話しながらメモをとっていたノートを閉じた。

そんな出来事を思い出しながら、これから自分がブックハンターとして、学ぶべきこと、するべきこと、知るべきことなどを思いつくままに、白い紙を埋めるように書き綴った。

「一日に一人、一年で三百六十五人。希少本コレクターと知り合うこと」

僕は優先順位のトップにこう書いた。希少本コレクターが三百六十五人もいるかどうかわからないが、とにかく一日に一人と出会うことを自分の課題にした。

ブックハンターとして必要な学びは「コレクターがすべてを教えてくれるよ。とにかく、客を知れ」と、あの老紳士が教えてくれたからだ。

僕は老紳士が教えてくれたアップタウンイーストにある古書店に電話をしてアポイントをとった。そこは店を持たずにビルの一室にあった。

書いてくれた住所を頼りにその古書店に行き、入り口の呼び鈴を押すと僕を待っていたかのようにドアが開いた。二十畳ほどの部屋には、本がいくつもの山になって積み上げられていて、その隙間に置かれた椅子には、客らしき人たちが座って本を広げたり、談話をしていた。

「いらっしゃいませ」という声がした。声の主を探すと、目の前に子どものように背の低い女性が立っていて、僕はぎょっとした。

「この部屋は本のために暖房をつけていないので寒いですよ。よかったらこれを着てください」そう言って女性は、僕にふわっとしたダウンの羽織ものを手渡した。

「探しているものがあれば声をかけてください。どうぞごゆっくり」女性はそう言って、本の山に消えていった。

たしかに店の中は妙に冷えていて寒かった。とはいえ、息が白くなるほどでもなく、女性が貸してくれた薄いダウンがちょうど良かった。あとから知ったのだが、それはジャケットの下に着るインナーダウンというものだった。試しに袖を通すと、見た目のわりに暖かくて、動きやすくて、「これいいな」と僕を驚かせた。

FUNCTION 1

究極のインナーダウン

お客様から強いご支持をいただいて、2017年秋冬からユニクロ全店舗での展開が決まりました。腰回りのつくりを見直し細身でスッキリとしたシルエットに、かつ動きやすさを考慮しパターンを再設計。フロントやポケットは、ステッチが表からは見えない縫製仕様「裏コバ」を用いることでより洗練されたデザインへ。

左脇内側にはループを取り付け、収納袋を吊り下げられる仕様に。**昼夜の寒暖差があるとき、アウトドアに、旅先に。いつでも着られて小さく収納。インナーダウンとしての性能を追求しました。**

FUNCTION 2

もっと軽く、もっとあたたかく

極細のナイロン糸で生地を編み、独自の技術でダウンを包む構造を開発。さらに薄くて軽いプレミアムダウンを使用することで驚異的な軽さと暖かさと薄さを実現しました。重さに関してはオレンジ1個分を下回るほど。

水に濡れることで保温力の低下や乾きづらさが弱点だったダウンの特性も、表地に耐久撥水加工を施すことで解消。多少の雨風も平気です。**厳冬期はジャケットやコートの下に、春や秋の立ち上がりはカーディガンのように。目指したのは心強い相棒のような存在。**

024

MEN
ウルトラ
ライトダウン
コンパクト
ジャケット

あの日あの時から、
ずっと欲しいと思っていた、
軽快で薄くて
あったかいダウン。

松浦弥太郎

MEN
ウルトラライトダウン
コンパクトジャケット
¥4,990 ＋消費税

2018.1.16

025

MEN
スリムフィット
ノータックチノ

どんなことでも、まずは自分で考える。

はじめての客

僕は、アップタウンイーストのビルの一室にある、希少本専門の古書店を訪れた。そこは冬だというのに、本を傷めるからという理由で暖房をつけず、客は、ブランケットやダウンジャケットを店から借りて暖をとり、お目当ての本を手にし、思い思いに至福の時を味わっていた。

オーナー兼店主である、小柄な女性は、何かを聞かれない限り、客に話しかけることはなく、デスクの上に山のように積まれた本の品定めを黙々としていた。

客のほとんどは四十歳から六十歳くらい。皆、身なりがきちんとしている。職業は、医者、弁護士、経営者といった感じだろうか。その中に一人だけ、べっ甲の丸メガネをかけた、いかにもクリエイティブな仕事をしていそうな男性がいた。彼はソファに座って、一冊の写真集をじっくりと見ていた。

彼はどんな写真集を見ているのだろう。僕は本を探すふりをしながら、彼に近づき、彼が手にしている写真集をさりげなく見ると、タイトルは「Ｄａｙ ｏｆ Ｐａｒｉｓ」写真家の名はアンドレ・ケルテスと書いてあった。

僕の視線に気づいた彼は、僕を見て、にこっと笑って「やあ」という表情を浮かべた。僕も右手を少しだけ上げて、「やあ」という返事をした。隣の椅子が空いて

いたので、「隣に座ってもいいですか?」と言うと、「もちろん、どうぞ」と彼は言った。

「今日、初めて来たんです。勝手がわからなくて……」と話しかけると、「この店にルールはないですよ。帰る時に一言『また来るよ』と彼女に言えばいいだけさ。黙って帰ると、二度と入れてくれない」と、彼は笑って言った。

「教えてくれてありがとう。今、あなたが見ているその写真集は珍しいのですか?」と僕は聞いた。

「希少本として有名な一冊です。これはアンドレ・ケルテスが、一九四五年に出版した最初の写真集です。彼がフランスからアメリカに移住する時、長年、撮りためてきたパリのスナップの中から、ほんの一部だけを、宝もののようにしてアメリカに持ってきた。それを友人だった、ハーパース・バザーのアートディレクターのアレクセイ・ブロドヴィッチに見せると、ブロドヴィッチは、彼が撮ったパリの描写に感動し、写真集のディレクションを名乗り出た。そうやって生まれた一冊なんです。値段は……二千五百ドル」

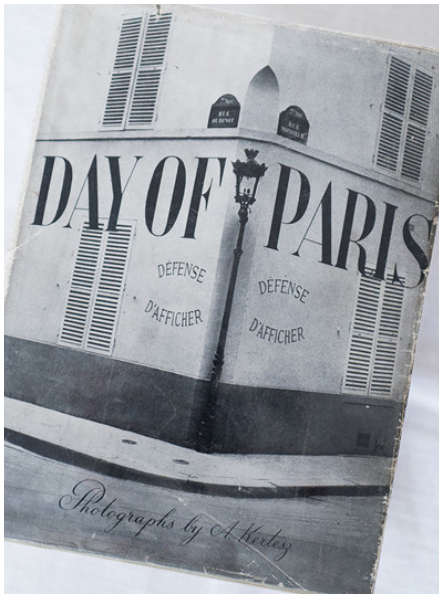
古き良きパリの魅力をこんなにつぶさに見つめて、まさに街を愛するように切り撮った写真は他にはない、と彼は言った。

僕は再びアレクセイ・ブロドヴィッチという名を耳にして内心驚いた。

「あなたは写真集を集めているんですか?」と聞くと、「私はファッションの仕事をしていて、写真が大好きなんです。長年、希少な写真集とアートブックのコレクションをしています」と彼は答え、「そんなあなたは何を集めているんですか?」と僕に聞いた。

「誰かのために、本を探す仕事をしています。いわば、フリーのブックハンターです。けれども、始めたばかりでまだ何も知りません。今はこうしていろいろな古書店を見て回って学んでいるところなんです」と僕は答えた。

「なるほど。こんなふうに古書店で話しかけてくるのは、大概、ブックハンターか、ディーラーだったりするけど、皆、素性を隠すんです。けれども、君は正直に自分が何者であるかを話してくれた。ありがとう。僕の名はケンだ。よろしく。それなら君は私のためにも本を探してくれるのかな?」と彼は言った。



仕事の第一とは

「もちろんです!あなたが今、探している本を教えていただければ」と僕は答えた。

「私が探しているのは、ブロドヴィッチの写真集『Ｂａｌｌｅｔ』です。一九四五年に刊行されたもので、撮影当時一九三〇年代のバレエ芸術は、世界中のアーティストの才能が花開く世界だった。そんなバレエの舞台をブロドヴィッチが撮影し、自分でブックデザインした希少本です。ぜひ探していただきたい」とケンは言った。

「わかりました。見つけたら幾らで買っていただけますか?」と聞くと、「カバーケース付きで七千ドルで買いましょう。現金で支払います。ぜひ探してください。何かあればいつでもここに電話してくださいね」とケンは僕に名刺を渡して、握手を求めた。

当然ながら、ケンは「Ｂａｌｌｅｔ」を、他のブックハンターにも注文しているだろう。「誰よりも早く、安く、コンディションよく、この本を探そう」この瞬間に、僕はニューヨーク中のブックハンターとのレースに参加したような気持ちになった。

「ちなみにこの店に在庫はありません。ウォンツリストがおそらく十人以上連なっているので、入荷してもすぐに

売られるので店には並ばないでしょう。私もそのうちの一人ですが」とケンは笑った。

ということは、「Ｂｅｉｒｅｔ」は、ニューヨーク中の古書店を探し回っても、よほどの奇跡が起きない限り見つからないということだ。そんな希少本を、百戦錬磨のブックハンターを出し抜いて、どうやって見つけたらいいのだろう。「必ず見つけます！」と豪語しておきながら、僕は頭を抱えてしまった。

そうか、売っている場所がないのであれば、持っている人を探せばいい。僕はそう思った。

僕はジャックに電話し、「Ｂａｉｒｅｔ」探索を始める経緯を話し、相談をした。

「大事なことは、まずは君が『Ｂａｉｒｅｔ』がどんな本なのかを、その目で見て、熟知しなければならない。いいかい、本を探すヒントは、いつだって、その本の中にあるんだ。まずは実物を手にすることからスタートだね」とジャックは言った。

「そんな希少本はどこに行けば手にできるのだろうか？」と言うと、「それは自分で考えるべきだ。人を頼ってはいけない。どんなことでも、まずは自分で考える。まずは自分で研究する。そして行動に移す。それの繰り返しだよ。がんばれ」と、ジャックは言って僕を励ました。

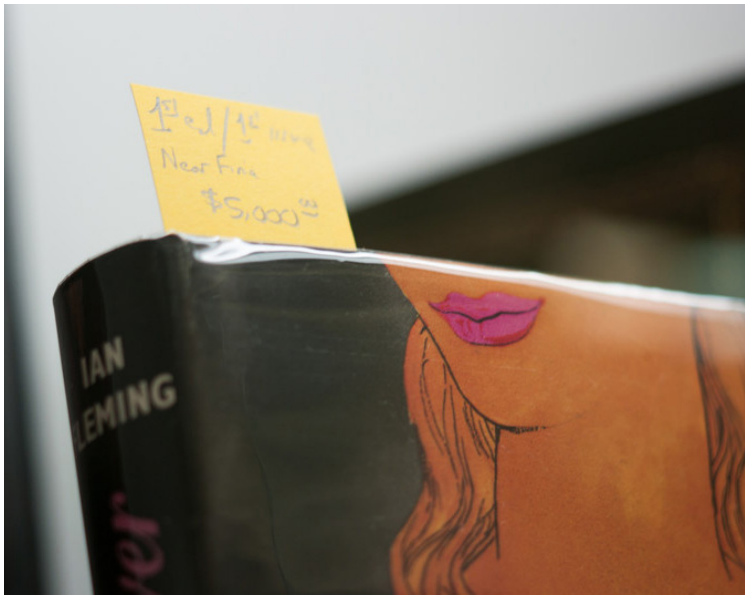
まずは自分で考える。本を探すヒントは、いつだって本の中にある。僕はまたひとつジャックから大切なことを教えてもらった。ありがとう、ジャック。

「あ、そうだ、アドバイスをもうひとつ。いいかい、七千ドルの本を扱うならば、高級品でなくてもいいので、それなりの身なりをしないと誰にも信用されない。プレスされた清潔なシャツと、きちんとしたパンツを身に着けないと、見た目という身なりで損をすることになるから気をつけたほうがいい」とジャックは僕に言った。

次の日の朝、僕は、洗いたてのシャツにアイロンをていねいにかけた。細身のチノパンツに足を入れると、よし、と気合が入った。

仕事の第一は身だしなみを整えること。これを肝に命じよう。

さあ、今日から僕の仕事がはじまる。



FUNCTION 1

上質と上品さを宿す

カジュアルの代表として知られるチノ素材ですが、ユニクロのスリムフィットチノは生地を高密度できめ細やかに織り、表面に起毛を加えることで上質な質感に仕上げています。**また伸長率を20%加えることで抜群の穿きやすさも実現。**

フロント脇ポケットには、スーツなどに用いられるAMFステッチ（手縫い風の縫い）を用い、さらにポケットに手を入れた後もポケット口が開かないように内側に補強布を当てるなど細部にも上品さを宿しています。

FUNCTION 2

シルエットの追求

英国に起源をもつトラウザーパンツのパターンを用いることで、ひざ下から裾にかけて、もたつきのない、**すっきりきれいなスリムフィットのシルエットが完成しました。**

ウォッシュ加工にもこだわることで生地にしなやかさが生まれ、パンツを穿いた時の落ち感がより全体のフォルムを引き立たせてくれます。ビジネスシーンの新たなスタンダードとして、清潔感のあるカジュアルスタイルのベースとして、オンにもオフにも活躍してくれる万能パンツです。

万能なのは、
スリムフィットだから。
どんな着こなしにも
合わせやすい。

松浦弥太郎

MEN
スリムフィット
ノータックチノ
¥2,990 ＋消費税

2018.1.23

026

MEN
U クルーネックT
（半袖）

Tシャツが似合う男になれってことかもな。

手がかりの発見

「九四五年に刊行された、アレクセイ・ブロドヴィッチの写真集『Ｂａｌｌｅｔ』のカバーケース付きを探してほしい」

僕は生まれて初めて、ケンという名のコレクターから、本探しの依頼を受けた。しかし、僕はその写真集をこれまで見たことがなかった。七千ドルもする希少な一冊をはたして見つけることができるのだろうか。

「まずは、その写真集を、隅々までじっくりと見ること。そうすれば、探し出すためのヒントが必ずある」

ジャックはこんなふうにアドバイスをしてくれた。そして、古い写真集は、ＩＣＰライブラリー（国際写真センター）に行けば見ることができると教えてくれた。

ＩＣＰライブラリーは、四十二丁目のブライアントパークの目の前にあった。ニューヨーク公立図書館のすぐそこの場所だ。

ＩＣＰライブラリーは、新旧問わず、写真に関する書籍を膨大にコレクションしていて、誰でも閲覧できるので、それからの僕にとっては、いつでも写真と写真集が学べる、ありがたい場所となった。

「Ｂａｌｌｅｔ」は一体どんな写真集なんだろう。

ライブラリーの司書に、探している本を告げると、しばらく待たされた後、写真集を書庫から持ってきて、「とても貴重な本ですので、くれぐれも扱いをていねいにお願いします」と言われた。「こちらでご覧になってください」と、このような貴重な本を見るためのデスクに座らせられた。

「Ｂａｌｌｅｔ」は、小さくて薄い写真集だった。レイアウトは余白が多用され、収録された百四枚の写真は、いわゆる華麗なバレエ芸術を捉えたものというより、ページをめくるたびに、リアリティが溢れた、バレエの舞台現場のドキュメンタリームービーを見ているような、躍動感に満ちた素晴らしいものだった。

内容は、当時、舞台画家として活躍したセルゲイ・ディアギレフが創設した「Ｂａｌｌｅｔ Ｒｕｓｓｅｓ」が、ボストンとフィラデルフィアで行った公演をブロドヴィッチが撮影したものだ。

僕はノートを横に置き、「Ｂａｌｌｅｔ」をくまなく見て、そのクオリティ、デザイン手法、描写表現、手がかりになりそうな記述など、感じたり、気になったものすべてをメモに残した。気がつくと二時間あまりが過ぎていた。

ひとつ気づいたのは、著者名にＥｄｗｉｎ Ｄｅｎｂｙというブロドヴィッチ以外の名前があったことだ。どうやら写真集内の文章を書いた人のようだ。

僕は近くにいた司書の男性に「この人をご存知ですか？」と聞くと「うーん、ちょっとわからないなあ。調べますので、ちょっと待ってて」と言われ、そのエドウィン・デンビーという人物が、詩人であり、高名なダンス評論家であることを知った。そして、「八十歳で、まだ生きていますね」と言われた。

「見つけた」僕は直感的に思った。

優秀よりも勇敢になれ

「ブロドヴィッチの『Ｂａｌｌｅｔ』の共著者であるエドウィン・デンビーに会いに行こう。そして、ブロドヴィッチとの思い出や、『Ｂａｌｌｅｔ』にまつわる当時の話を聞かせてもらおう」。僕はすぐにジャックに電話をして、こう話した。

「わかった。どこに住んでいるか調べてみよう。八十歳ならまだ元気なはず。しかし、よくそんなことを思いついたな」と、ジャックは笑いながら、僕の思いつきを感心してくれた。

もしかしたら「Ｂａｌｌｅｔ」を余分に持っているかもしれない。著者の一人なら、きっと当時の状態で保管しているから、きっとコンディションはいいはずだ。僕はそんな下心を抱いていた。

ニューヨーク中のコレクターやブックハンターが必死になって探して見つからない本だ。同じように探しても見つかるはずがない。それなら、違う方法で、違う思考で探す。その手がかりは、ジャックが言ったように、本の中に確かにあった。僕はエドウィン・デンビーという人物に会えば、必ず何か突破口が開けると確信を持った。

「今、彼はメイン州のシアーズモントという田舎に暮らしているらしい。自宅の電話番号を、ニューヨーク・

タイムズの知り合いの記者に調べてもらっているから、きっとすぐにわかるだろう。ちょっとした小旅行になりそうだ。季節が変わって、少し暖かくなってから行こう」それから数日後、いろいろと調べてくれたジャックは僕にこう話した。

それからというもの、ジャックと一緒に古書店巡りをしていると、それまで名前すら知らなかったエドウィン・デンビーのダンス評論集や詩集といった著作を、ちょくちょく見つけるようになり、僕は本人に会う時のために買い集めるようになった。

ある古書店でのことだ。「The Complete book of poem」という詩集を買った時、そこの店主に「この詩人の娘が近所に住んでいて、ここによく来てくれるんだ」と、突然言われ、僕とジャックは驚いた。ジャックは「もし今度、その方が店に来たら、ここに電話してほしいと伝えてください」と。店主に自分の電話番号を書いたメモを渡した。

「こんなことってあるんだなあ……」ジャックは目を丸くして僕の顔を見た。

冬の終わりのニューヨークは、ぽかぽかと暖かい陽射しが気持ちよく、日によってはTシャツ一枚でも平気だった。

「Tシャツって、アメリカが生んだ偉大な発明のひとつ。船に乗る海兵のために作られた白い肌着だったが、いつしか彼らが、勇敢さとたくましさを誇示するための普段着として愛用するようになり、男にとっての憧れの服として人気となったんだ」と、ジャックは言った。

「Tシャツが似合う男になりたいって、世界共通の男の憧れだよね」と僕が言うと、「優秀よりも勇敢であれ、と、父親によく言われたけど、それってTシャツが似合う男になれってことかもな」と、ジャックは笑って言った。

FUNCTION 1

極上のスタンダード

コンセプトは「クラシックでありながら、あたらしいTシャツ」**時代に左右されることなく、どんなスタイルにもフィットする、生地が長持ちして日々の暮らしにいつでも付き合えるTシャツです。**

極めてシンプルだからこそ、徹底的にこだわったのは素材。様々な糸を10g単位で用い、編み地の密度、生地の重さを組み合わせトライアンドエラーを繰り返しました。さらに染色した色の濃度によって風合いや厚みの変化が均一になるように見極め、理想のオリジナル生地にたどりつきました。

FUNCTION 2

世界一のTシャツ

生地は240gというヘビーウェイトの天竺。風合いはドライタッチ。目が詰まった天竺生地は縮みにくく、洗濯を繰り返してもくたびれにくくて丈夫です。ゆとりあるリラックスシルエットはどんな体型にもフィットします。

肩とアームホールには伝統的で丈夫な縫製「二本針のまたぎステッチ」を採用。首元はヴィンテージミリタリーのアンダーウェアを参考に、伸びにくい「バインダー」仕様に。**洗いざらしを1枚で着ても十分な存在感、豊富なカラーバリエーションをサイズ違いで楽しむ。**ずっと着られていつでも近くに置いておきたいLifeWearです。

優秀よりも勇敢であれ。
それはいわば、
Tシャツが似合う男になれ、
ということかもな。

松浦弥太郎

MEN
U クルーネックT（半袖）
¥1,000 ＋消費税

2018.1.30

027

MEN
スウェットパンツ

泣きたいときはたくさん泣くといい。

父の言葉

父から手紙が届いた。手紙の書き出しには、「特に急いで伝えたいことがあるわけではないので、びっくりしないでほしい」とあった。

きっと自分なりに何かをしているのだろう。何をしているのかを聞いたとしても、わからないので聞かないが、父親として、ひとつだけアドバイスしたいことがある。

お金が無いだろう。明日の一食のために、もしくは今日の一食のためにお金を稼ぐ日々かもしれない。生きていくつらさと苦しさを、噛み締めている様子が目に浮かんでくる。君くらいの歳のとき、父もそうだった。ましてや外国だ。寂しさが募るだろう。

君がそこで生きていくために今していることが、どんなにつまらないことであっても、自分のビジョンが何かを考え続けてもらいたい。ビジョンとは夢であり、描く未来であり、展望のことだ。そうすると、いくつも思いつくことがあるだろう。けれども、そこに落とし穴がある。

そのビジョンを紙に書いて、じっと見つめてほしい。小さいんだ、きっと。そのビジョンが。

夢は大きく、という言葉は陳腐かもしれないが、下手するとビジョンは、自分一人のためになりがちなんだ。そんな自分一人のためだけのビジョンは何の役にも立たないので捨てたほうがいい。

もっと大きなビジョンを考えるんだ。自分を点にして、その半径を広げて広げて、もっと広げて、どこまでも広げてみて、そういう大きくて広い世界に向けて、こうしたいという夢、望む未来、こうありたい展望を考え抜いて、見つけ出してほしい。

悩んだ時のヒントは、もし絶対に叶えられることができる魔法を、一度だけ使えるならば、どんなことを叶えるのか。そう考えてみればいい。

それは人に言うと、そんなの無理だ、とか、ばかじゃないかと言われるようなことかもしれないが、気にせずに本気で、そのビジョンを実現しようと思い続ける。

つまらないことをしながら歯を食いしばっているかもしれない。けれども、毎日、それは自分のビジョンに向かっている一歩であるかを確かめてほしい。要するに、何をしてもいいが、自分のビジョンを抱きしめて日々を歩んでほしいということだ。

お前は何をしているんだ?と聞かれた時、悩まず胸を張って、自分のビジョンを答えられる人であってほしい。これが父の願いであり、人生の先輩としてのアドバイスだ。

そして最後にもう一言。ビジョンは、毎日、ほんとうにそれでいいのかと問い続けるのが大事。一度考えたからそれでいいと思ったらダメ。毎日毎日、それがほんとうに自分のビジョンでいいのかと問い続け、今日はそのための一日であるかと考えること。

ビジョンと生きる

手紙の最後に「お母さんから聞いた、アメリカで使える君の銀行口座に、お金を送金しました」と書いてあった……。

僕はなんだか、狭い部屋に一人ではいられない気持ちになって、父が書いた便箋をていねいに封筒にしまい、それを大切に上着のポケットに入れて外に出た。

今僕は、マンハッタンという大都会の中にぽつんと一人でいるけれど、ビジョンは大きく、と考えたら、この世界すべてを愛情いっぱいの気持ちで、大きく包み込むような、なんとも言えない一体感というか、一人だけど一人ではないというあったかい心地で胸がいっぱいになった。

どんどん歩いた僕は、セントラルパークのベセスダ・テラスに着き、ここに来るといつも座る場所に腰を下ろした。

そして、ポケットから父からの手紙を出し、便箋を広げ、もう一度、父の書いた一字一句に目を落とした。

手紙を読んでいる途中、僕は何度も空を見上げて、胸の奥から湧いてくる熱い感情を我慢した。読み終えた時、「フーッ」と小さく息を吐き、精一杯の気持ちで便箋を折りたたみ、ふたつの手の平ではさんで、拝むような姿勢で下を向いた。

目から涙がポタポタと落ちた。溢れた涙が頬をつたって首にまで流れた。僕はもう我慢できなくなって、便箋を持った手を震わせてワンワンと泣き続けた。

一体僕は何をやっているのだろう。好き勝手にアメリカにやってきて、自分なりに一所懸命なつもりであるけれど、父や母のことをおざなりにして、こんな外国で何をやっているのだろう。なんて親不孝ものなんだろう。目先のことや、自分のことばかりを考えて、一体何をやっているんだろう。そんな大馬鹿ものの僕は、自分が情けなくなって、地面を拳で何度も叩いた。

「大丈夫ですか?」

そんなふうに泣きじゃくる僕を見て、一人の女性が声をかけてきた。僕は大きく深呼吸してから、「大丈夫です。ありがとう」と答えた。

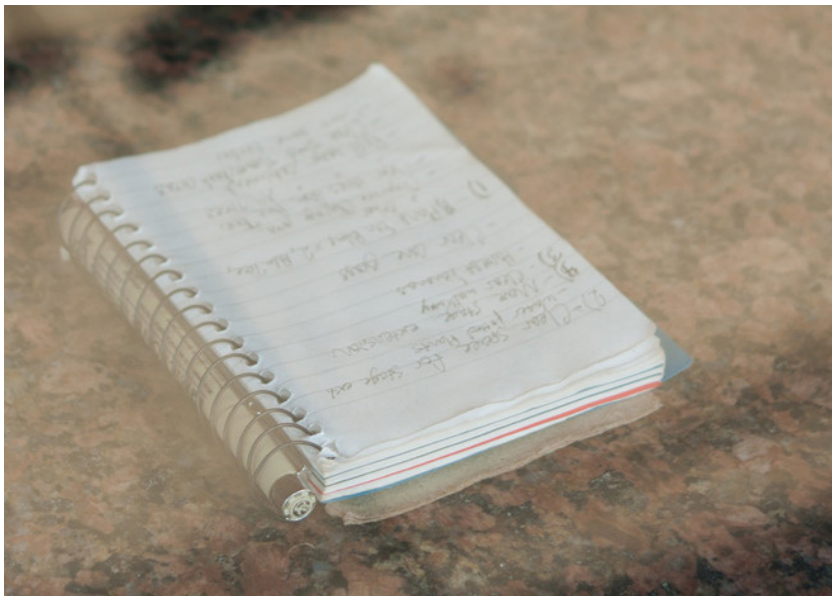
女性は少しの間、僕の側に立っていたかと思うと、すっと近寄り、僕の肩に手を置いて、「泣きたいときはたくさん泣くといいわ。けれども、自分の身体を傷つけてはダメ。ほら、拳を開いて」と言って、傷ついた僕の手を握って、「手は人とつなぐためにあるのよ。地面を叩くものではないの」と言った。そして、「明日になれば、すべてが新しくなるわ」と言って立ち去っていった。

明日になればすべてが新しくなる。僕はその言葉に救われたような気持ちになった。そうだ、新しく生きよう。

僕は立ち上がって、穿いていたお気に入りのスウェットパンツのお尻をパンパンと払って、ついていた砂を落とした。

もう一度、ビジョンをしっかり考えよう。僕だけのビジョンを見つけよう。そして、ビジョンと生きよう。

お父さん、お父さん、と僕はつぶやいた。



FUNCTION 1

ルームウェアを超える

ルームウェアはもちろん、ファッションとして街でも着られるスウェットパンツをつくりました。素材にはしっかり目の詰まった薄手の天竺生地と、メリハリある起毛が魅力の裏毛生地を使用。

コットンにポリエステル糸を混ぜて強度をあげることで、ヒザ部分の抜けを防止。ウエストのヒモ穴には金属のハトメを、ゴム部分に二本針ステッチを施すことでヴィンテージのような表情に。仕上げに洗いをかけることで、柔らかくてハリのある風合いを実現しました。

FUNCTION 2

アクティブウェアとして

リラックスした着心地と動きやすさはそのままに、シルエットはヒザ下から細身になるテーパード仕様。股ぐりのもたつきや、サイドポケットの内側のふくらみをなくすことで、よりすっきりと着こなしていただける設計にしました。

また、展開する色ごとに加工法を研究し、ベストな発色にこだわりました。**スポーティなスタイルはもちろん、シャツやニットとミックスしたり、飛行機など旅するときの移動着にもおすすめ**したい自信作です。

くつろげるし、
おしゃれもできる、
そうそう、旅にもいい、
新しいスウェットパンツ。

松浦弥太郎

MEN
スウェットパンツ
¥1,990 ＋消費税

2018.2.6

028

MEN
スーパー
ノンアイロン
シャツ

真っ白なシャツに、黄色いカーディガンを肩からかけていた。

いいシャツを着て

ニューヨークで暮らす人々を見ていて、すてきだなと感じるファッションのひとつに、シャツの着こなしがある。

カリフォルニアでは、洗いざらしの少し大きめのシャツを、ジャケットのようにはおって、裾はパンツの外に出し、靴はスニーカーというスタイルの人が多かった。

ニューヨークでは、きれいにアイロンをかけた、自分の身体に合ったサイズのシャツを、パンツにタックインしている人が多い。上半身はきちんとしながらも、下半身はデニムといったカジュアルで、しかも、靴はスニーカーではなく革靴というのが、いかにもニューヨーカーらしく洗練されていた。

全身をあえて上品ずくめにしないセンスとでも言おうか、パンツだけをカジュアルに着崩すことで、都会的な豊かさを醸し出している。さらに言うならば、小物使いとして、バックルが小ぶりで上質なベルトをしているのもすてきだった。

それまでは、カリフォルニア的な着こなしと、ニューヨーク的な着こなしが、ちぐはぐだった僕であったが、ニューヨークで過ごすことで、少しずつだが、そんなニューヨークスタイルがわかって身についてきた。

七千ドルの希少本をリクエストしてくれた、アート

ブックコレクターのケンから、ランチを一緒にどうかと誘われた時のことだ。僕はいかにもニューヨーカーらしくあるように、アイロンをかけたワイドスプレッドカラーの白いシャツを着て、色の落ちたデニムにUチップの革靴を履いて出かけた。もちろん、ベルトと靴の色を揃えることも忘れなかった。（時計のベルトまで色を揃えられたら完璧だったが、今回は叶わず）

僕らは、グリニッジビレッジの「CORNER BISTORO」という老舗のバーで待ち合わせをした。ここはバーでありながら、昔ながらのおいしいハンバーガーが有名で、ケンの馴染みの店だという。

店に着くと、すでにケンは席に着いて僕を待っていた。（せっかちなのもニューヨーカーなのかもしれない）

この日のケンは、全身、真っ白な服を着て、黄色いカーディガンを肩からかけていた。昔ながらのアメリカの食堂的な店内に、窓からきれいな陽射しが差し込み、そこに佇むケンとその風景は、画家エドワード・ホッパーの絵のようだった。

「とってもエドワード・ホッパーの絵のようですね」と、挨拶代わりに言うと、ケンは肩を浮かせて、「やあ、調子はどうだい?」と言った。

僕らは揃ってハンバーガーを注文し、お互いの近況を話し合った。ファッションの仕事をしているケンは仕事が忙しくて、最近は、古書店巡りができていないと愚痴をこぼした。

「そういえば、ブロドヴィッチの『Bar-et』は見つかりそうかい?」とケンは言った。

「なかなか、むつかしいですね……。来月ある人に会いに行きますが、そこに良いニュースがあればと願ってます」

「そうか…なるほど……。最近、他に何かいい本を見つけたかい?」

僕は言うか言わぬか迷ったが、「少し前に、ウォーホルの『A GOLD BOOK』を見つけましたよ」と話した。

ケンはハンバーガーを持った手を止めて、「なんだって?『A GOLD BOOK』持っているのかい?」と聞いた。

「はい。持ってます。コンディションはとてもいいです」と僕は答えた。

本の査定を

「それは売り物かい?それとも君のコレクションかい?」

ケンはハンバーガーを皿に置き、コカコーラを一口飲んで、紙ナプキンで口を拭いてからこう言った。

「はい。売り物です」

「コンディションを見てみたいな」

「いつでもお見せしますよ。よかったら今日にでも」と僕は答えた。

「オーケー。その『A GOLD BOOK』がコンディションの良いものであるとしよう。君はいくらで売ろうと考えているんだい?」

「あ、ひとつ言い忘れてました。僕の『A GOLD BOOK』には、ある人の献呈署名が入っているんです」

「まさか、ウォーホル本人ではないだろうな。それだったら大変なことだ」とケンは言った。

「違います。実はブロドヴィッチが、当時付き合っていた女性に向けた献呈署名なんです」

「『A GOLD BOOK』は、ウォーホルによる

手製本だ。それを若かりし頃のウォーホル本人が、ブロドヴィッチに手渡し、それをブロドヴィッチが当時付き合っていた女性にプレゼントしたってことかい？その本を君が持っているってことか……。ブロドヴィッチの家は、火事に何度も見舞われて、所蔵していた希少な本のほとんどが焼けて残っていないんだ。なんてこった…」

ケンは、両手で髪の毛をかきむしって、何度もためいきをついた。そして、冷静さを取り戻しながら、こう言った。

「その本のことを、誰か他の人に話したかい？」

「ジャックは知ってますよ。見つけた時に一緒にいましたから。他は誰も知らないはずです」と僕は答えた。

「オーケー。オーケー。で、それを君は幾らで売ろうとしているんだい」とケンは小さな声で言った。

ケンが、取引交渉に入ってきたのがわかったので、「適正に評価された金額で売ろうと思っています」と答えた。

ケンはしばらく黙って、うなずきながら考えに耽ってからこう言った。

「それなら、まずは信用のおけるオークション会社に査定をしてもらうのがいいだろう。私が懇意にしている人物がいるから、彼にお願いしよう。通常なら、査定にお金がかかるけれど、私が頼めば、証明書は発行されないが、無料で行ってくれる。そうしよう。それが一番いい」

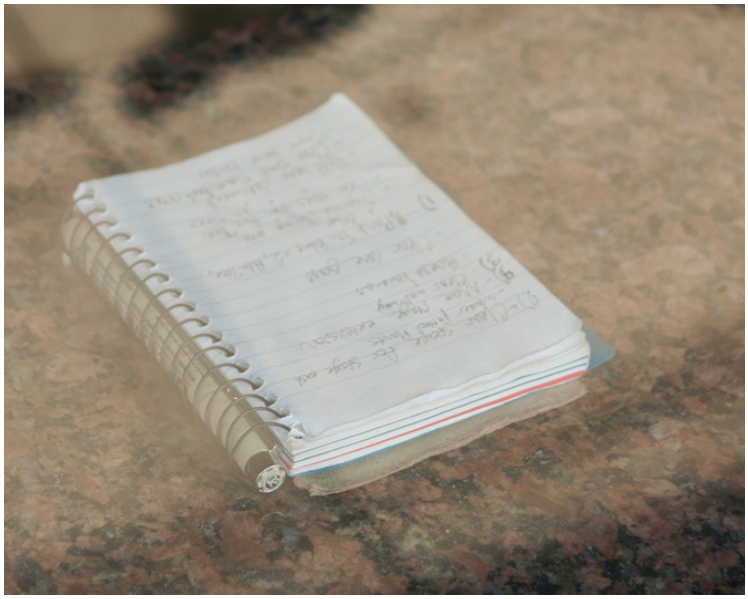
僕は、自分の「A GOLD BOOK」が果たしてどんな評価額になるのか知りたかったし、本の査定という経験も勉強になると思ったので、ケンの提案を受け入れた。

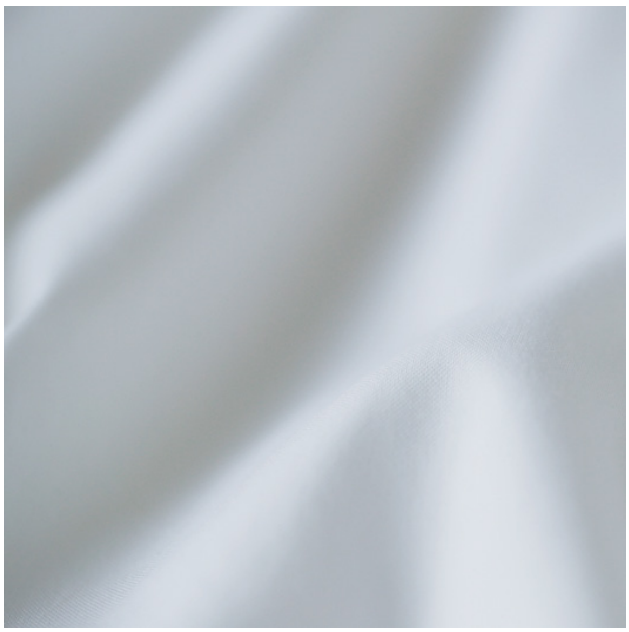
ケンは、午後の仕事をすべてキャンセルして、僕のアパートまで行き、そこで本を受け取り、そのまま査定に出したいと言った。

僕らはグリニッジビレッジからアップタウンウエストのアパートまでタクシーで移動した。ケンにはアパートのロビーで待ってもらった。

ウォーホルの「A GOLD BOOK」を手渡すと、ケンは「なんてきれいなんだ…こんな状態のものは見たことがない…」と声を詰まらせ、献呈署名のページを見て「ブロドヴィッチのサインに違いない…」と言った。

「夜には査定が終わるだろうから、わかったらすぐに電話する」と言い、ケンは「A GOLD BOOK」を大事そうにバッグに入れて、タクシーに乗って去っていった。





FUNCTION 1

「ノンアイロン」の追求

洗濯してもシワになりにくい、極限まで手入れの手間をなくした最高のビジネスシャツが完成しました。**最大のテーマは、綿100%の自然な風合いをそこなわずに形態安定効果をシャツに与えること。**

素材は高級シャツに採用される「80番双糸」を、より細やかに織り上げたピンオックス生地。その生地に対して「ディッピング加工」という特殊なコーティング技術を施し、さらに、襟や袖など各パーツごとにアイロン加工を。更に、洗い、ベイキング、低温処理という度重なる工程を重ね、通常のシャツよりも厳密な管理と膨大な時間と手間がかかっています。この工程に「ノンアイロン」の秘密があります。

FUNCTION 2

究極のビジネスシャツ

ネクタイに一番合うデザインを追求し、台襟の高さと襟先の形を、よりよく整えました。襟はボタンダウンとセミワイドの二種類。腕の動きやすさを考慮し、カーブの角度を計算したアームホールと、シワになりやすい脇部分をテープで補強。着用時のバランスと実用性を兼ねたポケットは、IDカードやパスポートが入る大きさに。

身頃をすっきりさせ、ピンオックス生地が持つ光沢としなやかなドレープが現れるシルエットに設計しました。日々のビジネスシーンはもちろん、きちんとしたシャツを着用するシーンにも活躍することを約束します。

このシャツを着ると、
人に会いに行きたくなる。
自信が湧いて、
自分を見てもらいたくなる。

松浦弥太郎

MEN
ファインクロス
スーパーノンアイロンシャツ（長袖）
¥2,990 ＋消費税

2018.2.13

029

MEN
ブロックテック
パーカ

受話器を取ると、ケンの声が聞こえた。

夜中の電話

評価額の査定をするために、ウォーホルの「ＡＧＯＬＤ ＢＯＯＫ」をケンに預けたことをジャックに話した。

「一言、僕に相談してくれたらいいのに……。預り証も何も交わしてないんだろ？」とジャックはため息をついた。

「うん。僕は、僕自身でケンと出会い、いろいろと話しをする中で、本の注文も受け、彼とのこれからの関係を築いていくためにも、リスクを承知で、あえて彼を信用し、あの本を預けたんだ」と僕は話した。

「君は一万ドル以上のキャッシュを数えてもらうがために、見ず知らずの他人に預けて、何も問題なく戻ってくると思っているのかい。いいか、ここはニューヨークだ。証書なしの口約束なんて、何が起きても、意味を成さないんだ。泣き寝入りするぞ」とジャックは言った。

ケンは夜には査定が終わるだろうから、結果がわかったらすぐに電話をすると言っていた。時計を見ると、二十時を過ぎていた。僕は部屋の電話が鳴るのをじっと待っていた。

すると、すぐに電話のベルが鳴った。

「連絡が遅くなって申し訳ない。実はまだ査定が終わってないんだ。というのは、知人の仕事が終わらず、それを待っている状況で、もう少し遅くなるかも。なので、今日はもう遅いので、明日の午前中には必ず連絡をするよ。それでいいかい?」とケンは言った。

「わかった。電話をしてくれてありがとう、ケン。明日の午前中の返事を待っています」と答えて電話を切った。

ブロドヴィッチの献呈署名が入った、ウォーホルの「A GOLD BOOK」の市場価値は一万五千ドルを下ることはないとジャックは言った。

万が一、本が戻ってこなかったらどうしよう……。「この本を好きな人に持ってもらいたい」と言った年老いた女性の気持ちと、価値があることを知りながら、なぜか破格の安値で僕に売ってくれた古書店の店主の気持ちを思うと、胸がはちきれそうになった。

その晩、僕は寝ることができず、窓の近くに置いた椅子に座って、毛布を被りながら、そこから見える夜のブロードウェイをぼんやりと眺めて過ごした。

そうしながらも、うとうとしていると、電話のベルが鳴った。びっくりして受話器を取ると、ケンの声が聞こえた。

「大変なことが起きた……。今すぐ会うことはできるかい? 君のアパートの近くに二十四時間営業のドーナツ屋があるだろう。三十分後にそこで待ち合わせしよう」

真夜中のブロードウェイ

何が起きたのだろう? この事態をジャックに連絡をしたほうがいいのだろうか? いや、これは僕自身の問題だ。今更ジャックを巻き込むわけにはいかない。僕は着の身着のままで外に出た。

夜中の二時のブロードウェイはしんと静まり返っていた。冷たい風に身体がブルッと震えた。上着を着るのを忘れた僕は、あわてて部屋に戻り、買ったばかりのフードのついたポリエステルのパーカーを羽織った。セントラルパークをランニングするために選んだものだった。

待ち合わせをしたドーナツ屋まで走っていると、まるで夜中にランニングしているニューヨーカーのようだと思った。

ドーナツ屋に着くと、ケンはすでに着いていて、神妙な顔をしてカウンターのスツールに座っていた。

「夜中に呼び出してごめん。まずは本を君に返すよ」

ケンは、僕が預けた「A GOLD BOOK」を返してくれた。しかも、本が痛まないようにきれいにラッピングされていた。

「知人にこの本の査定をしてもらうと、たまたまその場にいた上司に見つかり、一緒に査定して

もらったんだが、この本を見た途端、大騒ぎになった。この本はどう低く見積もっても、二万ドルはすると言うんだ。しかも、こんなにきれいなコンディションの『ＡＧＯＬＤ ＢＯＯＫ』は、おそらくウォーホル財団でさえ持っていないだろうと。よって、しかるべきタイミングで、オークションに出品するのが適切という結果なんだ」とケンは言った。

ケンはにっこりと笑って、「よかったね、それを君に早く伝えたくて駆けつけたんだ」と手を出して僕に握手を求めた。

「ケン、ありがとう」そう言うと、ケンはまるで自分のことのように喜んだ。

「とりあえず、まずは本を持ち主に戻して、一通りの報告をすると言って帰ってきたんだ」ケンの顔は、自分の役目をしっかり果たしたという達成感に満ちていた。

僕とケンはコーヒーで乾杯をして、軽くハグをし合った。

「あとは君の判断だ。こんな希少な本が発見されたというストーリーは、『ニューヨーク・タイムズ』も飛びつくだろうし、僕ごときのコレクターからすると、手にとって見れただけでしあわせなんだ。ほんとにありがとう」とケンは言った。

僕は迷うことなく決めた。

「この本はケンに売るよ。いや、ケンに持っていてもらいたい。僕の最初のクライアントとして、どうかこの本を受け取ってもらえないかい?」と僕はケンに言った。

「いやいや、無理だ。僕は、こんな高い本を買えるほどのお金は持っていないよ」と、ケンは手をブルブルと横に振りながら言った。

「金額はどうでもいいんだ。じゃあ、こうしよう。僕はこの本を、この店に忘れて置いて帰るよ。君は拾えばいい。じゃあ、また！　あ、コーヒー代よろしく！」と言って、僕は本をカウンターの上に置いた。

「おいおい、ちょっと待てよ！」とケンは僕を追うようにスツールから降りたが、僕はすでにドーナツ屋を出て、真夜中のブロードウェイを走っていた。

僕は、なんだか嬉しくて嬉しくて、うさぎのように飛び跳ねるようにして走って帰った。

FUNCTION 1

ファンクションの更新

ユニクロ自慢のブロックテックパーカは、お客様からの声をもとに、さらなるアップデートを行いました。**防水・防風・耐久撥水・ストレッチ機能に加えて生地の裏面をサラサラした感触の素材へ変更し、透湿機能をプラス。**汗によるムレやベタつきの心配がなくなりました。

その秘密は表地（1層）＋特殊フィルム（1層）＋特殊プリント（0.5層）の2.5層構造にあります。このフィルムとプリントが湿気を逃す機能を持っているのです。

FUNCTION 2

もっと着やすく、もっと快適へ

縫い合わせによる余分な生地を極限まで減らすことで、より美しいフードの開きが実現しました。ポケットはダーツを入れることで収納力を確保し、モノを入れた時の膨らみを軽減。**首裏にはループを取り付け、フックに引っ掛けて干せるようにしました。**

袖口はステッチを廃止してソリッドな圧着仕様に、フードや裾のストッパーはシンプルに変更。ミニマルに仕上げました。**スポーツからタウンユースまで幅広く愛用いただける自信作です。**

なるほど、ありがとう。
なるほど、たすかる。
と、着るたびに言葉が出る。

松浦弥太郎

MEN
ブロックテックパーカ
¥5,990 ＋消費税

2018.2.20

030

MEN
エクストラ
ファイン
コットンシャツ

シャツを着て、花束を持っていく。

ペギーとの出会い

高額で取引される希少本「Ｂａｉｌｅｔ」は、卓越したレイアウトデザインで、黄金期と呼ばれた五〇年代の「ハーパースバザー」を率いたアートディレクター、アレクセイ・ブロドヴィッチの写真集だが、実は共著者がいることはあまり知られていない。演劇評論家のエドウィン・デンビーである。

その当時、「Ｂａｉｌｅｔ」という写真集がどんなふうに作られたのか。そこにはどんなエピソードがあるのか。それを知りたいがために、僕はエドウィン・デンビーの消息を調べた。すると、メイン州のシアーズモントという田舎に暮らしていることがわかった。

そしてまた、僕とジャックがよく行く十八丁目の古書店の店主が言うには、エドウィン・デンビーの元アシスタントの女性が店によく来ると言う。シアーズモントを訪ねる準備をしつつ、僕らはその女性に会うチャンスも待っていた。

すると、ある日、件の古書店の店主から、その女性を紹介してくれると連絡があった。

「ここニューヨークでは、古書店同士、またはブックハンター同士というのは、こんなふうに常に助け合いで生きている。口約束でも結構頼りになるんだ」とジャックは言った。

店主がお膳立てしてくれた日、僕とジャックは古書店へと向かった。その前に、ジャックは花屋で小さな花束を買った。

「はじめて会う人には、上等なシャツを着て、花を持っていく。そうすると、たいていのことはうまくいく。きちんとしたシャツを着た人から花をもらったら誰だって嬉しいからね。ま、ジンクスみたいなもんだ」とジャックは言った。

「きれいなシャツと花束」僕もこのすてきなジンクスをそれからずっと守るようになった。

約束の時間ぴったりに古書店に着くと、女性はすでに到着していて僕らを待っていた。ジャックが自己紹介しながら、「僕ら二人からです。今日は時間を作ってくれてありがとう」と言いながら、花束を渡すと、彼女は頬に手を当てて、満面の笑顔で喜んだ。

彼女は、自分の名前をマーガレットと言い、ペギーと呼んでと言った。年齢は六十代後半。そばかすがキュートな気さくな女性だった。

僕らは「Ｂａｌｌｅｔ」という古い写真集について調べていて、エドウィン・デンビー氏の存在を知り、当時の話を聞くために、ぜひシアーズモントを訪ねたいと思っていると彼女に話した。

「事情はわかったわ。できるだけ協力したいけれど、彼は今、体調を崩していると聞いたから、人と会うのはむつかしいようね……」

そして、「その『Ｂａｌｌｅｔ』って小さくて正方形に近いかたちの薄い本？　もしかしたら、私の家にあるかも……」とペギーは言った。

どうやら以前、ニューヨークに仕事場を持っていた本人から預かっている荷物の中に、「Ｂａｌｌｅｔ」が何冊かあったようだと言うのだ。

ジャックは僕のお尻を何度も手で叩き、隠しきれない喜びを表した。

「もしよかったら、私の家に来て、その荷物を開けてみない？　そんな写真集なら私も見てみたい」とペギーは言った。

きれいなシャツと花束

ペギーの家は、イーストヴィレッジの格式高いアパートの三階だった。築年数を聞くと百年だと言う。ペギーの仕事は、インテリアデザイナーで、主にニューヨークのレストランやカフェの内装を手がけているらしい。

窓が大きく、天井が高く、広々とした部屋には、古い北欧デザインの椅子やソファ、家具で統一されていて、とても洗練されていた。

「彼の荷物はここにあるの。ちょっと手伝ってもらっていいかしら」と言って、ペギーは納戸のような小さな部屋の扉を開けた。

そこにはダンボールに入った荷物が整然と積み重なって置かれていた。「『ＢＯＯＫＳ』とペンで書かれた箱をここから出してみましょう」とペギーは言った。

「ＢＯＯＫＳ」と書かれた箱は、十数個あった。僕らはそのひとつひとつをていねいにリビングに運び出し、「Ｂａｌｌｅｔ」を手分けして探す作業に入った。

箱を開けると、その中は、ほとんどがバレエやダンス、演劇のパンフレットばかりだった。

「これらすべて、彼が観てきた舞台芸術の軌跡なのね……」とペギーは言った。

「ここにあるのは四十年代から六十年代の様々な舞台芸術のパンフレットだけど、この時代のパンフレットは、ただのパンフレットではなく、当時のアーティストの手による、アートブックの域に達するものばかりなんだ。見てごらん、これはコクトーのイラストがリトグラフで刷られている。これはファッションイラストの巨匠クリスチャン・ベラールだし、これも画家のヴェルテスだし、これはマチスの絵だ。もしこれらを売ったら、大変な額になりそうだ……」ジャックは興奮しながら僕らに話した。

確かに、これらはパンフレットとは言え、紙質から印刷、デザインまでが、単なる印刷物ではなく、アーティストによる作品ポートフォリオのようだった。

ジャックいわく、コレクターが見たら、引っくり返って驚くお宝ばかりらしい。

「ねえ、これじゃないかしら……」とペギーは、ある箱を開けて言った。

僕とジャックは手を止めて、ペギーが手にした箱のところに転がるようにして移った。

箱の中を見ると、固い紙のブックケースに収まった、小さくて薄い写真集が、びっしりと詰まっていた。その冊数は、おそらく三十冊くらいだろう。

ジャックが、中からそっと一冊を取り出すと、ブックケースには大きく「Ｂａｌｌｅｔ」とタイトルが印刷されていた。

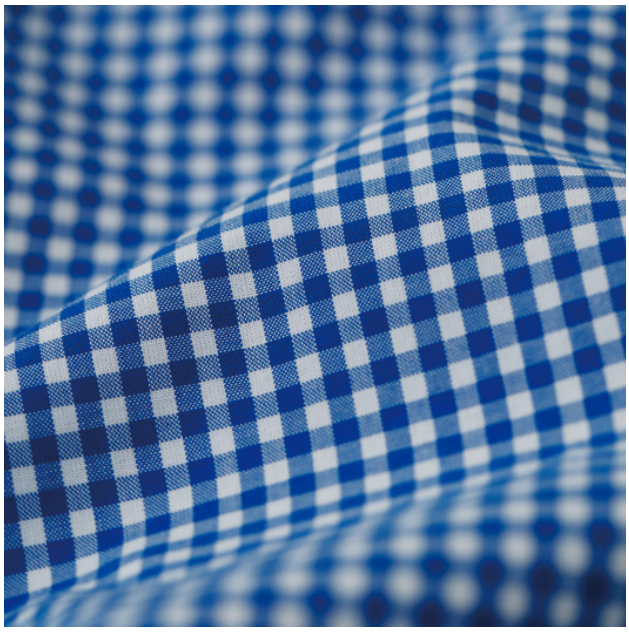
「すごい……。これ全部『Ｂａｌｌｅｔ』だ。しかも新刊の状態のまま保管されている…」呆然としたジャックは、声にならないような声で言った。

ペギーがその箱の中にあった一通の封筒から便箋を出して開いた。

「これ、そのブロドヴィッチという人から彼にあてた手紙だわ。この写真集の刊行に協力してくれてありがとう、という内容ね…。あ、白黒のピンぼけ写真が何枚か入ってるわ」とペギーは言った。その写真は、写真集の原稿になったブロドヴィッチによるオリジナルプリントであることに違いなかった。

「シャツと花束」のジンクスは確かだった。

「だめだ……。こんなことってあるのか。見なかったことにしたい……」と、ジャックは言って立ち上がり、その場を離れ、窓辺へと歩いた。



FUNCTION 1

進化する定番

着まわしやすいシンプルなデザインを最高な素材で。ユニクロが考える究極のベーシックシャツです。エクストラファインコットンは、しなやかなハリと柔らかな風合いをあわせ持つオリジナル生地。**繊維が長く、上質素材として知られる超長綿を高密度に織り上げ、さらに微起毛加工することで完成しました。**

アームホールは腕の動かしやすさを考慮した立体的なつくりに変更、生地のドレープや体のラインがスマートに見えるように身頃をすっきりとデザインしました。

FUNCTION 2

オン・オフを支える

シャツの顔である襟は、ビジネスにもカジュアルにも対応できるボタンダウン仕様。襟を少し小さめにすることで、ネクタイなしでもきれいな首元の表情を演出します。さらに壊れにくい本貝調のプラスティック素材のボタンや、パスポートやIDも入る大きさのポケットなど実用性と機能性も兼備。

今季もストライプやチェック、無地の定番を豊富に揃え、またパターンをトレンドの小柄にするなどアップデートを加えました。さまざまな装いやシーンに合わせて選べるワードローブの強い味方です。

シャツに鼻を近づけて、
朝のいい香りがする、と言って、
彼女は微笑んだ。

松浦弥太郎

MEN
エクストラファイン
コットンブロード
チェックシャツ（長袖）
¥1,990 ＋消費税

2018.2.27

031
BABY
メッシュ
インナーボディ

いつかの自分も こんなふうに家族に愛されていた。

ペギーの家族

ペギーは僕らにコーヒーを淹れてくれた。ジャックはコーヒーの入ったマグカップを手にし、窓からの景色をぼんやりと見ながら、何かを考えていた。

ニューヨークのブックハンターが血眼になって探している希少本が、新品状態で三十冊。しかも、かの有名なアートディレクター、アレクセイ・ブロドヴィッチから、共著者であるエドウィン・デンビーあての自筆の手紙と、本の中に使われたオリジナルプリントが一緒にあるという奇跡のような出来事に、僕らはこれをどうするかによって、自分自身を試されているような気持ちになって呆然としていた。

「こういう奇跡的な掘り出し物を、僕らは毎日のように夢見ているんだけど、いざ目の前にしてしまうと、商売のことなんて、もう、どうでもよくなってしまうな……。この本はデンビーさんとブロドヴィッチの宝ものなんだ。いくらなんでも、それに手をつけるわけにはいかない……」とジャックは言った。

「私からデンビーさんに、この本を欲しい人がいるけど、どうしましょう?と聞きましょうか。彼は憶えているかしら。いずれにせよ、これらの荷物は、いつか処分しなければならないから、価値がわかるあなたたちに託せれば、わたしは助かるわ」とペギーは言った。

「とりあえず、彼と話せるか電話してみるわ……」

ペギーは電話の置いてある部屋に行き、デンビーさんに電話をかけた。僕らはリビングのソファーに移動し、座って一息をついた。

「このソファーいいな。ポール・ケアホルムの三シーターのビンテージだ。レザーの質が最高だ。このリビングに置いてあるものすべてセンスがいい。そこにあるフィン・ユールの椅子はＮＯ．４５のオリジナルだし。見ろ、あそこに置いてある真鍮のスタンドライトは、パーヴォ・ティネリだ」と、ジャックは言った。

ペギーが電話をしている間に、アパートの来訪者を告げる呼び出しのブザーが鳴った。

ペギーは受話器を耳に当てながら、「きっと娘だから、ロックを解除してあげて…すぐに上がってくるから、ドアも開けてあげて」と言った。ジャックは言われたとおりに解除ボタンを押した。

すぐに部屋のインターホンが鳴ったので、玄関のドアを開けると、赤ん坊を抱いた若い女性が立っていた。

「あら、こんにちは。母はいる？」と女性は言った。

「こんにちは。お母さんは今電話中で…」と、ジャックが言うと、「そうなのね。お母さん、入るわよー」と女性は部屋に入った。

僕とジャックが自己紹介すると、「はじめまして。リサです。この子はアヴァよ」と女性は言った。

「こんにちは。かわいいですねー」と僕が言うと、「まだ三ヶ月なの。やっと最近、外に連れていけるようになったのよ」とリサは笑って言った。

「ハーイ、リサ！　元気にしてた？　よく来たわね。アヴァは？　あら、かわいいわたしの赤ちゃん！」と電話が終わったペギーがリサに駆け寄ってハグをした。

ふたつの贈り物

ペギーは孫のアヴァを抱いて嬉しそうだった。アヴァはにこにこと笑いながら、小さい手でペギーの頬を叩いて喜んでいた。

「残念ながら、デンビーさんとは話ができなかったわ。体調が良くないみたい。身近にいる人に事情を伝えたら、きっと彼は荷物を預けているあなたにすべてまかせると思う、と言われたの。どうしましょうか？」と、アヴァをあやしながらペギーは言った。

「僕らは『Ｂａｒｎｅｔ』を見つけたことだけでも満足しています。しばらくこのまま保管されていたほうが良いと思います。この先、この本を処分せざるを得ない時になったら、ぜひ僕らに声をかけてください。その時は喜んで引き受けます」と、僕が言うと、横にいたジャックも頷いた。

「わかったわ。では、そうしましょう」と、ペギーは言って、箱から二冊の「Ｂａｒｎｅｔ」を取り出し「これは私からあなたたちへのプレゼントよ。二冊くらい減っても、彼は気がつかないし怒らないわよ。何年もこのままなんだから」と笑った。

ペギーからいただいた「Ｂａｒｎｅｔ」には、ブロドヴィッチの署名が入っていた。僕とジャックは思わず目を合わせて言葉を失った。

「今日は孫が来てくれて私は嬉しいのよ。あなたたちはラッキーね。さ、早く帰りなさい。何かあったら、必ず連絡しますから」とペギーは僕らを追いやった。

帰り際にアヴァを抱かせてもらうと、赤ちゃん特有のいいにおいがした。着ている服のやわらかさに触ると、いつかの自分もこんなふうに家族に愛されていたことを思い出した。

僕とジャックは、いただいた「Ｂａｒｒｅｔ」を大事に抱えてアパートを出て、「じゃあまた」と別れた。ジャックは「Ｂａｒｒｅｔ」について何も話さなかった。

アパートに着くと、管理人に呼び止められた。僕あての荷物があるから取りに来いとのことだった。なんだろうと思いながら、管理人室に行くと、古ぼけたギターケースと一通の手紙があった。送り主を見ると、ケンからだった。

「Ａ ＧＯＬＤ ＢＯＯＫ」を大切にします。これは僕の宝ものです。宝ものの交換です。受け取ってください。ケンより。

ギターケースを部屋に運び、開けてみると入っていたのは小ぶりのギターだった。小さなメモがあった。「一九二六年製のマーティンの０-45です。ジョーン・バエズがウッドストックで弾いたギターと同モデルです」と書いてあった。

いつかケンと話していた時、彼が本だけでなく、ビンテージギターのコレクションもしていると聞いたので、戦前のマーティンを、いつか僕も手に入れたいと夢を語ったことを憶えていてくれたのだ。

彼は「Ａ ＧＯＬＤ ＢＯＯＫ」と同等の価値のある自分の宝ものを、僕に贈ってくれたのだった。

すぐに電話をしてお礼を告げると、ケンは「いいんだ。そのギターでいつか何か弾いて聴かせてくれたら嬉しい」と言った。

僕は「ケンの好きな曲を教えてください。その曲を練習するよ」と僕が言うと、「ジェームズ・テイラーの『Ｙｏｕ，ｖｅ ｇｏｔ ａ ｆｒｉｅｎｄ（君の友だち）』がいいな」とケンは言った。

仕事においては、決してお金を追ってはいけない。追うべきは自分のヴィジョンと夢。そして、精一杯に人の気持ちに応え、人を思い、人を助け、人と信頼という関係を築くこと。それがきほん。

そんな父の言葉を僕は噛み締めた。ギターの音色は艶やかでやさしかった。

FUNCTION 1

赤ちゃんにやさしく

通気性のよいメッシュ素材は、天然のコットンを100パーセント使用。汗かきの赤ちゃんのお肌をサラサラに保ちます。単糸ではなく、細い糸を2本撚り合せた双糸で織ることで、なめらかで毛羽立ちにくく、ヨレにくい生地に仕上げました。

特殊なミシン「フラットシーマ」を用い縫い目を平らにし、品質表示ラベルを外側に配置、金属アレルギーに配慮したプラスチックのボタンの使用など、赤ちゃんへの肌ストレス軽減を徹底的に考えました。

FUNCTION 2

お母さんにやさしく

無地の商品には襟ぐり、足ぐりの内側を配色ステッチにすることで、お洗濯後にも生地の裏表がわかるように工夫しました。オムツをしっかり包み込む股下にある3つのスナップボタンは真ん中の色を変えて、オムツ交換時のかけ違いのストレスがないように配慮しています。60サイズは寝かせても着せやすい前開きタイプ。首がすわった70から90サイズは、活発な赤ちゃんもお着替え簡単なプルオーバータイプをご用意。男の子、女の子問わず着ていただける色柄を揃えています。

2017年には「マザーズセレクション大賞」を受賞。**使ってよかったベビー肌着として、お母さんが他のお母さんにおすすめしたい商品の1位に選ばれています。**

※オンラインストアでは、70cmの前開きタイプも販売しています。

触るほどわかる、
これ以上ない愛情が
たっぷりと注がれた服。

松浦弥太郎

BABY
コットンメッシュインナーボディ
（ノースリーブ・前開き・2枚組）
60-70サイズ
¥990 ＋消費税

2018.3.6

032

MEN
ポケッタブル
パーカ

勝ち過ぎるといつか大負けする。

忘れてはいけないこと

ケンの元に渡ったアンディ・ウォーホルの希少本「A GOLD BOOK」は、その後の僕に、ブックハンターとしてのステップアップと、独立のチャンスをもたらしてくれた。

マンハッタンにおいて有名なアートブックコレクターであるケンが、沢山の顧客を紹介してくれたのだ。そしてまた、僕の師匠であるジャックの教えも相まって、今、どんな本に隠れた価値があり、その本をどんな人が求めていて、その本を探すにはどうしたらよいのか、しかも合理的に。そういう、これまでちんぷんかんぷんだったことが、知らず知らずの間に人一倍詳しく身についていた。

ここ数ヶ月の間にあった本にまつわるいろいろな出来事を、久しぶりに会ったセスに話した。

「とってもすてきな話なので、君のことをコラムに書いてもいいかい?」とセスは言った。もちろん僕は承諾した。

すると、それから数日後、「君のことを書いたコラムが、あるタウン誌に掲載されることになった」とセスから連絡があった。

そのコラムは、サンフランシスコからニューヨークにやってきた日本人の少年がブックハンターとして

本探しをスタートさせ、ひょんなことから「ＡＧＯＬＤ ＢＯＯＫ」に出会い、それがきっかけになってコレクターのコミュニティと親交を深め、さらにアレクセイ・ブロドヴィッチの「Ｂａｒｎｅｔ」にまでたどり着いたという、日々、マンハッタンを駆け巡りながら奮闘するショートストーリーだった。

僕は気恥ずかしさもあったけれど、このニューヨークというエネルギッシュな街で、本を通じて知り合った、人と人のつながりがもたらしてくれた奇跡のような出来事をたくさんの人に知ってもらうのがとても嬉しかった。

出来上がったコラムを見せてもらうと、そこには、僕らしき少年が、本探しをしている様子が描かれたイラストカットが散りばめられていて、そのコピーをもらった僕は、嬉しさと誇らしさで胸がいっぱいになった。

「これで君もいっぱしのブックハンターになったな。ニューヨークの有名ブックハンターだ。そう認められたってわけさ。これからも、君が変わらず一所懸命に仕事をし続けていけば、何も困ることはないだろう。よかったね」とジャックは僕に言った。

そして、「何かに一所懸命に頑張っている人をほっとかないのがニューヨークなんだ。この街は、そうやって人と人が助け合って、支え合って、認め合って生きていく街なんだ」と言った。

「でも、いいかい。ラッキーなことは、どこかからフワッとやってくるんじゃないし、どこかから落ちてくるものでもない。いつも人という誰かが持ってきてくれるものなんだ。そう、幸運は人が運んできてくれるものなんだ。だからこそ、何よりも、人との関係を大切にし、いつも感謝の気持ちを失ってはならないんだよ」

ジャックは僕の肩に手を置いてこう話してくれた。

確かにその通りだ。コラムだけを読めば、すてきでかっこいい自分がそこにいて活躍しているのだが、それは決して実力なんかではなく、いつもそこには僕を助けてくれた誰かがいた。得意気になって、それを忘れてはいけないと思った。

プロフェッショナルとは

そして、ジャックはこうも言った。「目立ってはいけないよ。有名になろうとしてもいけない。鼻を高くしてえばってもいけない。今回のコラムは、君がブックハンターとしてスタートするためのきっかけとして良しとするけれど、調子に乗って、さらに自分を、あたかもひとつの商品のように宣伝するようであってはならないよ。一時はそれで仕事が広がり、人脈も出来て、ビジネスも増えるだろうが、今回のように目立ってしまった時ほど、できるだけ控えめになって、ひたすら地味に、目立たぬように仕事をするのがいい」

「ここニューヨークは、人と人が支えあい、助け合い、認め合う街だけど、同時に競い合い、戦い合う街でもあるんだ。君の活躍を賞賛する人の何倍もの人が、君をよく思わないってことも知っておくべき。足を引っ張りたいと思う人がたくさんいるんだ。だからこそ、謙虚になって、控えめになって、至って静かに仕事をすることが賢い方法なんだよ」

僕はジャックの言うことがよくわかった。

「本当にそうだね。右も左もわからなかった僕を、君を含めてたくさんの人がサポートしてくれて、そのおかげで奇跡が起きて、たくさんのストーリーが生まれたことを忘れないよ。おっしゃる通り、僕は得たものが多かった。だからこそ、これからは、もっと

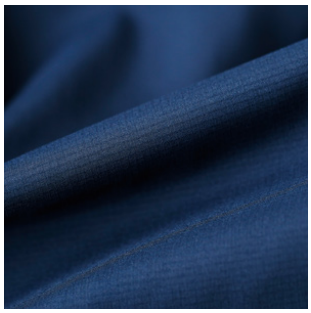
さらに得ようと考えずに、得たもの以上の何かを、今度は、自分以外の別の誰かに与えることに一所懸命になろうと思う」と僕は答えた。

「そうだね。それが正しい。何事もバランスだしね。勝ち過ぎるといつか大負けする。大負けは再起不能になる可能性もある。勝ったら負ける。負けたら勝つ。いつもひとつくらい余分に勝つ感じ。これでいいんだ。そうしていれば、勝ちたい時に、必ず勝てる自分になれるよ。普段は地味で目立たず、おとなしくコツコツと仕事をする。けれども、勝ちたい時には必ず勝つ。こんなに強いことはないんだから。それがプロフェッショナルってもんさ」と言って僕の肩を抱いて笑った。

「ま、あとは、仕事においては何が起きるかわからない。だからこそ、何が起きても慌てないようにいろんな準備をしておくことだね。じゃあまたな」とジャックが言ったその時、急に小雨がパラパラと降り出した。

慌てて目の前のスーパーマーケットの軒先に雨宿りをすると、ジャックは、バッグからさっと丸めたパーカーを取り出し、ふわっと羽織って雨の中を颯爽と歩いていった。

その後ろ姿を見て、いつか自分はブックハンターではなく、ジャックのようになりたい。そう思ったのだった。



FUNCTION 1

持ち歩ける高機能

付属の収納袋にくるりと丸めてコンパクトに持ち運べるポケッタブルパーカ。素材はポリエステル100パーセント。薄手で軽量ながらスポーツ色が強くなりすぎないように、カジュアルで丈夫なリップストップ生地の採用や、さらに合繊特有の光沢をおさえたマットな質感など、細かい工夫も行っています。

表面には撥水剤をしっかり固着させることで、より効果が長持ちする耐久撥水仕様に。突然の小雨にも安心な機能を備えています。

FUNCTION 2

暮らしのあらゆるシーンに

スポーツだけでなくタウンウェアとしても着られるように、裾、袖口まわりのゆとりを少なくし、すっきりとしたシルエットに変更。フードもかぶった時にもたつかないフォルムに改良しています。フード口のアジャスト機能は、広げたり絞ったりすることで使い方や着こなしに幅が生まれます。

旅のお供に、仕事帰りのランニングウェアや山登りの便利アウターとして、オフィスでの冷房よけに。バッグやトランクに入れていつでも持ち歩きたいLifeWearの定番です。

何が起きても大丈夫。
雨にも風にも負けない服が、
僕のバッグの中にある。

松浦弥太郎

MEN
ポケッタブルパーカ
¥2,990 ＋消費税

2018.3.13

033

MEN
ウルトラ
ストレッチ
スウェットセット

同じランクで揃えること。

本のコーディネート

ペギーさんからいただいたブロドヴィッチの写真集「Ｂａｌｌｅｔ」は、この本の注文をしてくれたケンには売らず、自分のコレクションにした。

「プレゼントでもらった本は、それがどんなに希少価値があっても、決して売り飛ばしてはならない」

ニューヨークで本を扱う仕事をしている者にはこんな暗黙のルールがあったからだ。

だからか、ブックハンターや書籍商の書棚には、持っているけれど売ることができない本がたくさんある。それは仕事を通じて、作家本人やその家族、本作りに関わった人などから、本をいただく機会が多いからだ。

「持っているのに、なぜ売ってくれないんだ？」とクライアントにしつこく言われて、困ったあげく「売れないものは売れない。どうしても欲しいなら盗んでいってくれ」と言って、店や部屋から出て、顧客に本を盗ませたという笑い話がある。そのくらいにブックハンターや書籍商は義理堅い。

そんなある日、ペギーさんから電話があった。デンビーさんのことで何か進展があったかと期待をしたがそうではなく、別件で相談をしたいことがある、ということだった。

あらためてペギーさんのアパートを訪ねた。

ペギーさんは会うなり、「あら、今日はお花を持ってきてくれていないの？」と冗談を言った。

「次回は忘れずに持ってきます！」と言うと「いいのよ。お花は、たまにもらうから嬉しいのよ」とペギーさんは笑って答えた。

「あるセレブの方が引っ越しをすることになり、新しい家のインテリアを頼まれたのよ。リビングの壁一面に、本棚を備え付けるリクエストがあるんだけど、その本棚にセンスのいい本を揃えてほしいと言われたの。だから、あなたにそのセレクトをしてほしいと思って……どうかしら？」とペギーさんは言った。

ニューヨークのセレブは、自宅のインテリアをプロのコーディネーターに依頼し、本棚の中身まで揃えさせるのか、と僕はびっくりした。いかにセンスのよい本を所有しているかを、家を訪れた人に見せつけるための本棚ということだ。アートブックから読み物まで、最低でも千冊は必要とのこと。

「予算はどのくらいですか？」と聞くと、「予算なんてないわよ。いくらでもいいのよ」と、ペギーさんは言った。

「セレクトした本が気に入られたら、この仕事はどんどん拡がるわよ。クライアントとしては、本棚を見せることで、いかに自分が知的で教養があり、センスがよいかを知らしめることができるんだから。本を揃えるって時間もかかるし大変だもの。インテリアではなく、本のコーディネーターという仕事ね」

面白そうな仕事だ。洋服やインテリアのコーディネートのように、インテリアの一部としての本のコーディネートもありうると思ったらワクワクしてきた。

「僕一人では手が足りないので、ジャックにも声をかけて、ぜひセンスのよい本を揃えさせていただきます」と即答をした。

コーディネートの秘伝

「ちょっと教えていただいてよろしいでしょうか？」

ペギーさんに僕はこう話しかけた。

「インテリアコーディネートで心がけていることは、どんなことでしょうか？　たとえば、この部屋は、北欧デザインの家具がありながら、中国のアンティークや、現代アートの作品なども飾られていますが、とてもバランスがよく感じるんです。どうしたらこんなふうに居心地よく、すてきなインテリアを作れるのでしょうか？」

「そうね……。大切なのはバランス。かんたんなようで難しいことのひとつだけど、たとえば、食器、家具、調度品、置物、アートなど、そういったものすべてを同じランクのもので揃えることね。テイストが違っていても、ランクが揃っていると不思議とバランスが整うのよ。中ランクの上であれば、中ランクの上のもので揃える。特上ランクのものをひとつ置いたり、逆に下ランクのものを使ったりするから、バランスが崩れてしまうのよね。とにかく、同じランクで揃えること。それがコーディネートのコツよ」

ペギーさんはコーヒーを淹れてくれながら、こんなふうに教えてくれた。

「このコーヒーポットも、あなたが座っているソファも、このマグカップも、同じランクのもの。だから、とても自然に馴染んでいるのよ」とペギーさんは言った。

「そうすると、先程話してくれた本のコーディネートも、クライアントが、新しい家をどんなランクのインテリアで揃えるのかをわかっていないと出来ない仕事ですね」

「その通り。よく気がついてくれたわね。クライアントは、私のこの家がとても気に入ってくれて、インテリアコーディネートを依頼してくれたのよ。だから、このインテリアのランクと世界観に合わせて欲しいの。この家は、手仕事が優れた北欧モダンの家具を中心に揃えているけれど、先日あなたたちが話題にしていた五〇年代のフィン・ユールの椅子がランクの基準。そう思ってくれたら間違いないわ」とペギーさんは言った。

ペギーさんは、フィン・ユールのＮＯ．４５という、世界一肘掛けが美しいと言われる椅子一脚を、家の真ん中にぽつんと置き、この椅子に合うテーブル、この椅子に合うラグ、この椅子に合う食器……というように合うものを少しずつ揃えていったという。そして、今でも何か新しい家具や調度品を買う時は、この椅子に合うかどうかで判断しているともいう。

たった一脚の椅子からインテリアを考える。なんてすてきな方法だろうと思った。

「今、私が着ているルームウェアにしても同じように選んだものなのよ。いいでしょ、これも」とペギーさんは言ってクスクスと笑った。

なるほど。それならば、まずはフィン・ユールのＮＯ．４５という椅子に合う本とは何か。その一冊から本のコーディネートを始めてみよう。

バランスが大切。それはたったひとつの基準から生まれるもの。

こんなふうに、ペギーさんは、コーディネートだけでなく、これからの人生においても役に立つ、とても大事なことを僕に教えてくれた。

FUNCTION 1

極上のリラックスウェア

どんな動きにも360°伸縮自在、さらに軽くてやわらかな肌触りが特徴のウルトラストレッチ素材を使ったルームセットです。リラックス感を大切にしながらも、伸縮性を活かして袖下の余分なゆとりをカットする事で、だらしなく見えずすっきりとしたシルエットに仕上げています。

首周りは脱ぎ着しても伸びにくいリブ素材に変更、肌に直接触れる裏地は縫製・糸の種類を見直し不快感がないように。ボトムは脇の接ぎ目を極力無くし、縫い代のストレスを軽減。**毎日着るものだからこそ、ストレスフリーな着心地を目指しました。**

FUNCTION 2

ワンマイルウェアとしても

今季は洗いがかかったような差し色や、かすれたプリントなど、無地以外にもカジュアルなデザインを追加してカラバリ豊富。またスウェットだけでなくワッフル生地もご用意。上下色違いのセットも魅力です。

襟元のガゼットでヴィンテージの雰囲気をプラスしながら、ボトムのヒモ仕様のウエストや絞った裾など、生活シーンでの実用性が高いデザインに。**買い物や散歩などのちょっとしたお出かけや旅のお供にも役に立つLifeWearです。**

家に早く帰りたい。
そんな気持ちにさせる、
究極のルームウェア。

松浦弥太郎

MEN
ウルトラストレッチ
スウェットセット
（ライン・長袖）
¥2,990 ＋消費税

2018.3.20

034

MEN
イージー
アンクルパンツ

料理とは、親切とまごころと工夫。

一時間のチャレンジ

朝はだいたい六時に起きる。同じ場所、同じ時間に、トラックがキキーとブレーキを鳴らして停まる。ブロードウェイを行き来するトラックの音が僕の目覚まし時計だ。

寝床で横になったまま窓に目をやると、ちょうど空の高いところがよく見える。青か、白か、灰色か。空の色で今日の天気がだいたい分かる。

今日は雲ひとつない青空だ。お気に入りのくるぶし丈パンツを履いて出かけよう。

そして今日は何をチャレンジしようかな。

暮らしも仕事も、意外にも単純なことの繰り返しでなかろうか。掃除、洗濯、食事、仕事、移動、学びなど、いわばルーティンなことばかり。そんな必要不可欠なルーティンで一日を終えてしまうのはなんだかつまらない。

十%のチャレンジ。

ある時、僕はこんなルールを自分に課してみた。寝ている時間や、食事の時間を抜いて、一日を十時間とした場合、まあ、だいたい十%くらいの余力というか、空いた時間が誰にでもあるはず。その時間を、今までやったことがない何か新しいことに使ってみる。一日のうちのたった一時間だ。ぼんやりしているとあっと

いう間に過ぎてしまう。いや、過ごしてしまいがちな一時間をどう使うのかを考えてみる。

毎日一時間のチャレンジ。こう決めた時に僕はとてもわくわくした。ある意味、誰にも干渉されない自由な時間だ。

その一時間でやることは、新しいチャレンジであれば、毎日変わってもいい。やってみたいこと、知りたいこと、見てみたいこと、なんでもいいんだ。何かひとつ同じことを繰り返してもいい。失敗なんて気にせず、思いついたことは何でもやってみる。なんたって、チャレンジなんだから。

ある日、僕はこんなチャレンジをしてみた。それまでしたことがなかった料理をやってみたのだ。自分で食べるものを自分で作ってみる。ニューヨークでの一人暮らしだ。食事は外食もしくは作られたものを買って食べるか、そのどちらかでしかなかった。

まずは食材を買いに、馴染みのスーパーマーケットに行った。そして、いつもおしゃべりをするデリカテッセン売り場の女性にこう聞いた。

「今日は自分で何か作ろうと思っているんだけど何がいいかな？　簡単でおいしい料理を教えてください」と。

「そうね……。それならサラダがいいんじゃない？　たとえば、ハーブと野菜があれば誰にでもおいしく作れるわよ。ドレッシングも自分で作ればいいわ」と女性は言った。

「えーと。何を買ったらいいかもわからないんです。よかったら書いてくれませんか？」と言ってメモを渡すと、女性は買い物リストを喜んで書いてくれた。

料理とは

買い物リストには、レタス、ベビーリーフ、ルッコラ、クレソン、ディル、イタリアンパセリ、ラディッシュ、トマト、レモン、バルサミコ、オリーブオイルと書いてあった。

「作り方はかんたんよ。まず葉野菜をよく洗って、一枚一枚ていねいに水気を拭いて、食べやすい大きさに手でちぎる。ハーブは葉の部分だけを使う。ラディッシュは切らずに、庖丁の腹でつぶして割る。そして、自分が食べたい量だけをお皿に盛りつけるの。そうしたら、それを大きめのボウルに移して、オリーブオイルとバルサミコを二：一の割合でかけて、レモンをぎゅっと絞る。塩と黒コショーをお好みで加えて、手でよく和えるの。手を使うことが大事。そうしたら、さっきのお皿に盛りつけたら出来上がり。簡単でしょ。ゆで玉子やベーコンをトッピングしてもおいしいわよ。そこに並んでいるサラダはそうやって作ってるのよ」と言って女性は笑った。

女性はデリカテッセン売り場のショーケースに入った皿から、サラダを少しつまんで僕の手の平に載せた。「この味を目安にして、あとはあなたが好きなように作ったらいいわ」と言った。

「ありがとう。早速作ってみます！」僕はリスト通りに買い物をして帰った。

今日のチャレンジは料理。たった一時間のチャレンジだけど、とってもシンプルでおいしいサラダが出来上がった。

ニューヨークに来て、はじめて自分で料理をした僕は、料理ってこんなに楽しくて、自分で作ってみるとおいしさが格別であることを、あらためて知ることができた。

次の日、スーパーマーケットに行き、料理が楽しくて、おいしかったことを売り場にいた女性に伝えると、「何が楽しかった?」と聞いた。「手で野菜をドレッシングで和えるときが楽しかったです」と答えると、「その通りね! 料理で大切なのは、手を使って、まごころをこめて作ることなのよ。あ、そうそう、言い忘れたけど、料理は塩よ。おいしい塩を使えば、どんな食材もおいしくなるの。塩だけは贅沢しても損はないわ」と女性は言った。

それからの僕はサラダ作りに夢中になった。野菜やハーブをいろいろと試してみたり、ドレッシングに工夫をしてみたり、もちろん塩をしっかり選んでみたりと。

料理とは、親切とまごころと工夫。これだと思った。

作れば作るほどにサラダはおいしくなった。そうすると、次にこんなチャレンジをしたくなった。自分で作ったおいしい料理を誰かに食べさせたいと思ったのだ。今の僕にはサラダしか作れないけれど、あとはパンとワインがあれば充分にもてなしができるだろう。

僕はニューヨークで、日頃から僕を助けてくれているセス、ジャック、ケン、トーコさんの四人を、狭いわが家に招待して、サラダパーティを開くことにした。

一時間という、ほんの小さなチャレンジが、大好きな人たちとおいしさや楽しさを分かち合えるような、大きな喜びとなった。

しあわせとは、いつだってチャレンジの先にある。そう実感した。

FUNCTION 1

くるぶし丈の魅力

ユニクロ自慢の、足元すっきりパンツの代表作です。フルレングスのテーパードパンツとは違い、**アンクル丈だからこそ実現できた絶妙なシルエットと裾幅。スニーカー、革靴、サンダルなどあらゆるシューズと相性抜群です。**

今季は素材バリエーションも幅広く用意し、さらにセンタープリーツを入れて、より立体的に仕上げました。ディテールにもこだわり、便利なコインポケットをプラス。特にウールライクタイプはクリーンな印象の表地に合わせて、ポケットは通常の斜めポケットではなく目立たないシームポケットを採用しました。

FUNCTION 2

ラクなのにオールマイティ

ウエストにヒモを通したイージーパンツの仕様ながら、腰部分にはよく伸びるオリジナルのゴムベルトを採用。腰回りのすっきりと、ストレスない穿き心地が実現しました。

ベルトループが付属しているので、ベルトを使ってシャツをタックインして少しドレッシーに、ポロシャツやTシャツでカジュアルに、スタイリングの幅を選びません。ストレッチが利いて動きやすく、ポケット裏地には抗菌防臭機能も追加したオールマイティなパンツです。

このパンツを履くと、
背が伸びた？って、
よく言われるんだけど、
そんなはずないよね。

松浦弥太郎

MEN
イージーアンクルパンツ
（ウールライク・丈標準65～71cm）
¥2,990 ＋消費税

2018.3.27

035

MEN
トランクス

頑張りすぎない。無理をしない。

頑張りすぎた

ある日、朝、目を覚まして起き上がろうとした時、身体にちからがはいらないことがわかった。おかしいと思って、腕や足を動かそうとしたけれど、ままならず、ベッドの上でゆっくりと寝返りを打つのが精一杯だった。

ゆっくりと深呼吸して、自分に何が起きたのか冷静になって考えた。

ここ最近、夜、寝ようとすると、疲れているせいかすぐに眠りにつくのだが、一時間くらいで目が覚めてしまい、再び寝ても、また一時間くらいで起きてしまうことを繰り返すのが習慣になっていた。

そのせいか、日中もぼうっとしてしまうことが多く、やらなくてはいけない仕事があっても、なかなか手がつけられなくて、自分自身の暮らしと仕事から、気持ちが遠のいて離れている感覚といおうか、自分のことなのに、自分のことと思えない心境に陥っていた。

たとえるならば、自転車のチェーンがギアから外れてしまって、空回りというか、それまで噛み合っていたものが、するっと外れてしまって、自分の気持ちや行動がどこにも引っかからないという状態で、しかも、どこかに手を伸ばそうとしても、どこにも手が届かないとてつもない不安に日々が包まれていた。

次第に人と会うのも苦痛になり、外出も減り、部屋でぼんやりすることが多くなり、何もしないのに、ずっしりした重みを感じる毎日が過ぎていた。

そういえば、いつ食事をしたのかな?と考えた。おそらく、何か食べているはずなのに、それすら覚えていない自分がいた。

僕の中の時間が止まってしまった。そう思った。何かひとつの部品が外れたせいで、それまでチクタクと動き続けていた時計が止まってしまった、そんな感じだ。

ニューヨークにやってきて、英語を話せないながらも一所懸命にやってきた。仕事らしきものも手にできた。友だちや知り合いもできた。ささやかながら暮らしも立てることができた。とにかく必死だった。頑張った。

それはそれで喜ばしいことであるのだが、今、身体と思考が動かなくなった自分の口から出たのは「あれ?」という言葉だった。

「なんかおかしい……」ベッドに横になったまま、天井を見つめて僕はつぶやいた。そしてこうも思った。「そうか、僕は頑張りすぎたんだ。だからすべてが止まってしまったのだ……」と。

そう思った途端に目から涙が溢れ出た。手を動かせないので、指で涙を拭くことすらできない。鼻から空気を「スー」と吸って「フー」と息を吐く。今、僕にできることはこれだけだった。だからそれだけを繰り返した。

そうしていたら、「なるほどなあ…。人間というのは強いようで弱いんだなあ…」

こんなふうに、僕はなんだかとても客観的に考えることが出来た。

そしてこうも思った。「そっか、これは僕という人間が頑張りすぎたんだ。はじめての経験だから、びっくりしたけど、これは当たりまえで自然なことなんだ」

ニューヨークでの暮らしに慣れて、これまでの緊張が緩んで、何か小さな部品がポンと外れたのだろう。きっとそうだ。

パンツ一丁で

時間、いや、二時間くらいが経っただろうか。僕はどうしてもトイレに行きたくなった。

この状態で、立ち上がって行けるだろうか。まずは、ゆっくりと寝返りを打って、うつぶせになり、手で身体を浮かせながら、膝を曲げるようにして、なんとか正座をしたような姿勢にもっていき、少し休憩しつつ、壁に手を伸ばし、ベッドから起き上がった。そして、手で掴めるところを探しながら、一歩一歩と足を動かし、トイレへとたどり着き、用を足すことが出来た。

「わあ、嬉しいなあ。ありがたいなあ。トイレには行けたよ」と感動する自分がいた。あたりまえのことをあたりまえに出来ることが、こんなに嬉しいことなのかと思った。

そのまま僕はグラスにミネラルウォーターを注いで飲んだ。「水ってこんなにおいしかったっけ。水のおいしさはわかるよ」

ゆっくりと僕は部屋を歩き、窓辺に置いた椅子に腰を下ろして、窓の外を見た。

太陽の光がさんさんと照りつけていた。ブロードウェイには車が走り、たくさんの人が歩いていた。その景色は平和だった。けれども、「ちょっと頑張りすぎた」自分という一人の人間が、誰も知る由もなく、窓から外を眺めている。

元気で、強くなければならない。それが正しくて、それが当たり前。それまでずっと僕はそういう概念を持っていた。病気は別として、人はいくらでも頑張れるんだと思っていた。少なくとも、身体のちからが入らなくなるなんて、自分にはありえないことだと思っていた。そして、この一見平和そうな世の中だけど、どれほど多くの人が、調子を崩して、僕と同じように、こんなふうにして部屋の窓から外を眺めているのだろうと思った。

人の営みとは、そのほとんどが目に見えるものではない。だからこそ、他人を思いやり、人の気持ちを、もっと深く理解をしようと心を働かさなくてはならない。

よく言われる、「森を見て木を見ず。葉を見て木を見ず」という言葉の意味がやっとわかった気がした。

「頑張りすぎないこと。無理をしない」これは父の言葉だ。

「こんな経験が出来てよかった……」おかげでいろいろと学ぶことができそうだ。少なくとも大事なことが何かがわかった。そして人間は意外ともろくて弱い。スーパーマンではないともわかった。

僕は頑張ってシャワーを浴びた。そして、買ってあった新しいトランクスを履いて、鏡の前に立った。ピカピカのトランクスだ。

「頑張りすぎない。無理をしない」という父の言葉を僕はもう一度つぶやいた。

ミネラルウォーターをもう一杯飲んだ。おいしかった。

元気が出た。もう、大丈夫と思った。パンツ一丁で背伸びをした。

※ボタンの色は半透明色の為、
写真と異なって見えることがあります。

FUNCTION 1

穿きやすさの追求

一番のこだわりは「動きやすさ」国内外のブランド、またユニクロがこれまでにリリースしたトランクスのサンプルを試着し、階段の上り下りなどを実際に行って動きやすさを徹底的に検証。ゆとりと身幅を充分に確保したパターンを採用し、さらに両端にスリットを入れることで動きやすさに大きな違いが生まれました。

ユニクロのトランクスは、絶えずフォルムを微妙に変えています。これはお客様の声をもとに改善と進化を繰り返している証拠です。

FUNCTION 2

最高の上質を目指す

生地に採用しているのは、シャツに使われるオックスフォード地を軽くしたライトオックス素材。サラリとした肌触りと柔らかな風合いが特徴のコットン100%です。ウエストのゴムは、肌当たりやずり落ちにくさを感じなくなるまで何種類も試作を繰り返して選びました。

定番に加えてご用意した春夏らしい色柄展開にもご注目ください。**下着であっても洋服づくりと同じクオリティを貫くこと。**トランクスにはLifeWearの精神が宿っています。

これほどの
上質さを追求した
トランクス。

松浦弥太郎

MEN
ストライプトランクス
¥590 ＋消費税

MEN
ライトオックストランクス
¥590 ＋消費税

2018.4.3

036
MEN
感動ジャケット

もっとシンプルに、もっと簡単に。

考えを言葉にする

インテリアコーディネーターのペギーさんから依頼された仕事は、ジャックと一緒に手がけることになった。

ある顧客が家を新調するにあたって、リビングに大きな本棚を誂えるので、そこに収めるセンスのよいビンテージブックをセレクトするという、これまでにない新しい取り組みだった。

セレクトの手がかりはデンマークの家具デザイナー、フィン・ユールの名作椅子NO.45だ。この椅子の、センスと価値のレベルに合った本を、どれだけ集められるのかが僕らの腕の見せ所だ。幸いにも予算の上限はナシ。

「ものすごくモダンでセンスの良い古書店を一軒作り出すのと同じ労力が必要だな。最低でも二千冊の本を揃えよう」とジャックは言った。

「二千冊!」と僕が驚くと、「ダンボール箱百箱くらいだ。やればできる。二ヶ月でなんとかしよう」とジャックは僕の肩を叩いた。

さておき、ニューヨーク滞在中、僕は何度か日本に一時帰国し、その都度、今、自分が取り掛かっている本を探すという仕事について、両親や友だちにぽつぽつと話し、自分のこれから先のビジョンを伝えていた。

手探りであっても、自分が信じているビジョン、または価値というものを、そうやって誰かにわかってもらうために、あれこれと考え抜いて、言語化する努力の繰り返しは僕には必要だった。

そうすることで、自分自身の理解も深まり、見えなかったものが見えてくることが多かったからだ。

なぜ、なにを、どうやって、それでどうなるのか、なにをしたいのか、その先になにがあるのか。誰がどんなふうに、しあわせになるのか。僕は一日中考えていた。

印刷技術や製本、紙、デザイン、その内容や表現など、すべてにおいて、その時代の才能とクリエーティブが、ぎゅっと凝縮された書籍という印刷物の美しさ。そして、情報ではなく感動を伝えるという本来あるべきメディアの姿から、今を生きる僕らが学ぶべき大切なことがある。

「時代を超えて、新しさと美しさを備えた美しい本の存在とその価値を伝えたい」これが僕の描いたビジョンだった。

「ジャック、ちょっと聞いてもらっていいかな?」と、僕はいつもジャックを相手に、自分のビジョンをあれこれと言葉の表現を変えて話した。

「うーん、僕にはわかるけれど、何も知らない人にはさっぱりわからないだろうな」と、ジャックは僕にダメ出しをし続けた。

「もっとシンプルに、もっと簡単に、誰もがわかるようにまとめるといい。君にとって本は大事だけど、本質はもっと大きなものだと思う。あえて本のことを言わなくてもいいじゃないか?」とジャックは言った。

この言葉に僕ははっとした。

ビジネスだから

本のコーディネートには、古書店仲間の協力が必要だった。僕とジャックは、日頃から付き合いの深い古書店の店主に相談して歩いた。

この頃から僕は、白いシャツにネイビーのジャケットを着るスタイルが自分の定番になっていた。シャツは、オックスフォードのボタンダウン。ジャケットは、ベーシックなデザインで、シャツ感覚で羽織れる、薄手で軽やかなものを選んでいた。ボトムスは、デニムもしくはチノパンツをその日の気分で選び、靴は黒のローファーを履いていた。場合によってはレジメンタルのタイを結んだ。

相手が誰であろうと、仕事の話をする際は、その相手への敬意を払った服装をしていくのがマナーである。そう心がけ、いつしかそれが毎日の身だしなみになった。

ベテランばかりの中で、駆け出しの自分が出来る精一杯は、身だしなみを整え、謙虚さを失わずに、すべてのことから学ぼうとする素直さを保つことだった。

ジャックにしても同様で、彼のようなベテランであっても、仕事の打ち合わせをする時には、身だしなみを整え、相手への敬意を払っていた。

「身だしなみで大事なのは何か?」と、僕らはよくこんな話をした。

というのは、僕にしてもジャックにしても、基本的に服が大好きで（特にトラッドなもの）、ファッションを楽しみたい気持ち（目立ちたいのではなく）は人一倍あったからだ。

「身だしなみとは、まず清潔であることだよ。髪型や肌、指の先、たとえば、匂いもそうだ。清潔であるということは、自分は人間関係を大切にしているという姿勢の現れだよね。何を着て、どんなものを身につけるってことではないんだ。僕らは一日に何度もハグをしたり、握手をしたりするけれど、だからこそ清潔さはマナーでもある」と、ジャックは言い、僕はうなずいた。

「本を集めるために、毎日たくさんの人に会って、いわば僕らの仕事のために、貴重な本を譲ってくれとお願いして、こうして実際に集められているのも、僕らが身だしなみに気をつけているからこそでもあるんだ。僕らが一所懸命であることが、身だしなみという見た目でわかるからこそ、みんなは力を貸してくれるんだ」

「僕は昔、そんなこと関係ない。不潔だろうと清潔であろうと、仕事は才能と実力がすべてだと思いこんでいた。けれども、それよりも、相手へのマナーと敬意と思いやりが大切だと気づいたんだ」とジャックは話した。

「なぜ気づいたの？」と僕は聞いた。

「それは、自分がやっていることが、趣味や単に好きなことではなく、ある日、ビジネスであると気づいたんだ。ビジネスだからこそ、マナーと敬意と思いやりが大切なんだ」とジャックは言った。

その言葉に、僕はまたはっとした。

FUNCTION 1

超「高機能」ジャケット

超軽量・超伸縮・超速乾。未体験の着心地に「感動」する高機能ジャケットです。東レと開発したポリエステル100%の素材は、軽やかでお手入れも簡単。同素材のパンツとセットアップでの着用が可能です。

汗をかきやすい裏地の脇下には抗菌防臭機能がついた通気性抜群のAirdotsを使用。夏場のビジネスシーンや旅行先のレストランなどで食事する時、カジュアルにTシャツやパーカなどと合わせた普段使いにもおすすめです。

FUNCTION 2

動きやすさとデザインの両立

素材の特性に合わせてミリ単位のバランス調整を行いました。**袖や肩にゆとりあるパターンを採用しながらも、すっきりとした袖のフォルムに仕上げ。さらにフロントポケットの下にある縫い目をなくしたことで、ストレッチによる動きやすさとクリーンな印象を両立しました。**

今季はウルトラライト、ウールライク、コードレーンの3パターンをご用意。素材ごとにそれぞれ異なる表情は、幅広いシチュエーションでお楽しみいただけます。

このジャケットは、
服というよりも道具に近い。
そのくらいに役立つ。
そのくらいに馴染む。

松浦弥太郎

MEN
感動ジャケット
（ウルトラライト・コットンライク）
¥5,990 ＋消費税

2018.4.10

037

MEN
ドライカラー
Tシャツ

ニューヨークが大好きとアシャは言った。

コーヒーショップ

僕は、週に二、三度、ユニオンスクエアパークの目の前にある「コーヒーショップ」というカフェに行き、本を読んだり、手紙を書いたり、ぼんやりしたりして過ごした。

僕は「コーヒーショップ」が大好きだった。このカフェにいると、ニューヨークでの寂しさや不安な気持ちが不思議と紛れたからだ。

この店には、世界中から夢を追ってニューヨークにやってきた人がたくさん集っていた。店で働くスタッフもそうだ。皆、モデル、俳優、アーティスト、デザイナーなど、何かを目指している人たちばかりだった。

とはいえ、サラリーマンや、近所に暮らすおばあちゃんも安心してくつろげる、庶民的な雰囲気もあった。

通っていてわかったことがある。それは毎週火曜と木曜が、この店の面接の日なのだ。気立て良く、真面目で、そしてスタッフの空きがあれば採用されるのだが、この二日間は、「コーヒーショップ」での仕事を求めてやってくる若者で店は賑わった。

僕はここで働くアシャという女性と仲良くなった。

僕がまだ「コーヒーショップ」に通い始めた頃、サンドイッチを選ぶのに迷っていると、たまたま

テーブルの横を通った彼女が「そうね、ツナサンドがおいしいわよ」と声をかけてくれたのだ。

帰り際、「サンドイッチおいしかった。ありがとう」と、カウンターの中でコーヒーを淹れていた彼女にお礼を言うと、「また明日ね！」と笑顔を見せてくれたのが嬉しかった。

それからというもの、僕は「コーヒーショップ」に行くとアシャの姿を探すようになった。アシャは、週に三日、店がオープンする朝の六時半から深夜まで働いていた。いつしか僕はアシャに会うのが楽しみになっていた。

ある日、アシャは休憩時間に、僕のテーブルにやってきて隣に座り「で、あなたはニューヨークで何をしているの？」と聞いてきた。僕は日本からサンフランシスコを訪れ、古書の魅力に触れ、ここニューヨークに行き着き、ビンテージブックを扱う仕事を、自分なりにやっていることを話した。「すてきね。私も本が好きよ」とアシャは言った。

そして、アシャは自分のストーリーを僕に話してくれた。

彼女は十五歳の時に、カトリック学校の交換留学生として、アフリカからニューヨークに一人でやってきた。それは彼女の意志ではなく、両親が決めたことだった。なんと出発の二週間前まで、留学のことを両親から聞かされてなかったという。

ロウェナのユニフォーム

ニューヨークにやってきた時、アシャは英語が一言も話せなかった。だから、他の子が一時間で出来る宿題が五時間もかかり、泣きながら徹夜をした日もあったと言う。

「あの頃は、言葉の不自由と、何より家族や友だちと別れたのがつらかった。でも今はここニューヨークが大好き」と、アシャはにこやかに話してくれた。

僕は、「コーヒーショップ」で働くスタッフが皆、アシャを一目置いている理由がわかった。彼女くらい苦労している人はいないからだ。

「アシャは今、何をしているの？」と聞くと、「高校を卒業して、好きだったファッションの道を目指して勉強中なの。絶対に成功してやるわ」とアシャは言って微笑んだ。

「じゃ、また明日ね」と言ってアシャは仕事に戻った。二十二歳のアシャが淹れるコーヒーは実においしかった。

その次に「コーヒーショップ」で友だちになったのはロウェナという女性だった。

二十六歳のロウェナはしっかりもので、みんなのお姉さん的存在。ウエイトレスとして働いていた。

アシャとロウェナは仲良しだったので、僕がアシャとおしゃべりしていると、「私の妹と何を話しているの?」と必ずロウェナがやってきた。

ロウェナは「コーヒーショップ」内で、男性客から一番人気のある女性だった。いつも白いリブ編みのタンクトップに、白いシャツを着て、デニム姿で、テーブルの間をきびきびと働く、ショートカットのロウェナにたくさんの男性客が見とれていた。

ロウェナはブロンクス生まれの生粋のニューヨーカーだった。スペインとプエルトリコとイギリス、フランス、ドイツとウエールズの血が流れていて、「私自身がまさに移民が集まるニューヨークみたいね」と笑った。

ロウェナの夢は作家になることだった。大学でクリエーティブ・ライティングを学びながら、週に四日「コーヒーショップ」で昼間働き、あとは文章を書く時間に費やしていた。

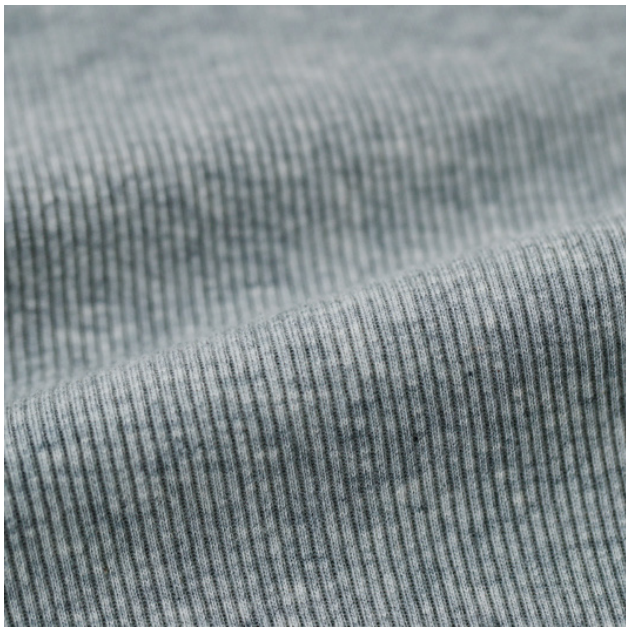
一度だけロウェナと、二十一丁目の古書店で会ったことがあった。手に持っていた本を見ると、ミヒャエル・エンデの「モモ」だった。

「『モモ』は僕も好きな本です」というと、「本当を言うと、いつか子どものための物語を書きたいの」とロウェナは言った。

ある日、僕が白いタンクトップに、白いシャツを着て「コーヒーショップ」を訪れると、「あら、その私のユニフォームを返してくれない?」と、ロウェナはふざけて僕の着ているシャツを脱がそうとした。

「ごめんごめん、君のクローゼットから勝手に借りてきたんだ」と冗談を言うと、店にいたロウェナ目当ての男性客が一斉に僕をにらんだ。

「しょうがないわね。今日だけよ」と、ロウェナは言って、僕に投げキッスをする真似をした。



FUNCTION 1

スタンダードを貫く

ほどよいフィット感とすっきりとした着用感が自慢のタンクトップです。**伸縮性のある着心地バツグンなリブ素材は、コットン100%のような風合いと「ドライ機能」がポイント。**コットンにポリエステルを加えて型崩れしにくく、汗をかいたり洗濯してもすぐに乾くのが特徴です。

肌に直接触れるものだから、襟やアームホールは縫い目が目立たない特殊縫製で肌触りもなめらか。ネックラインはゆるめに、インナーでも一枚でも着られる汎用性の高いデザインです。

FUNCTION 2

豊富なカラーパレット

今季は「色」にこだわりました。クルーネック、Vネック、タンクトップそれぞれに白や紺、杢調のベーシックカラーはもちろん、オレンジやピンクなどのトレンドカラーを色付け。
そしてパッケージも小さめのサイズに変更。よりたくさんのカラーバリエーションを店頭に並べられるようにして、色選び自体を楽しんでいただけるように考えました。

ジャケットやシャツの下の挿し色肌着に、ご自宅でのリラックスやTシャツのインナーとして幅広くお使いいただけるはずです。

告白しよう。
実は僕、かなりの、
タンクトップ好きです。
白が一番好き。

松浦弥太郎

MEN
ドライカラーリブタンクトップ

MEN
ドライカラークルーネックT（半袖）

MEN
ドライカラーVネックT（半袖）

¥590 ＋消費税

2018.4.17

038

MEN
プレミアム
リネンシャツ
（長袖）

これはジャックからもらったシャツだよ。

仕事の証を

ペギーさんの顧客のために、二千冊の本を収集し、新しく誂えた本棚に収める仕事は無事に終わった。

顧客は、たくさんのゲストを招待し、インテリアの主役になった本棚と本のお披露目パーティを開いた。

「ランボーの『地獄での一季節』と、エドワード・ウエストンが撮った希少な写真集『草の葉』の横に、鈴木大拙の禅の本があり、その隣にはケルアックの『路上』の初版がある。エズラ・パウンドとエリオットの貴重な詩集や、『ホビットの冒険』の初版揃い、O.ヘンリーのニューヨーク短編集もある。なんてすばらしいセレクトなんだ。出来ることなら本棚そのまま持ち帰りたくなるくらいだ」

ある著名な詩人は、本棚の本をくまなく見てこう言い放ったという。

「実を言うと、これらの本は僕が集めたのではなく、二人の若い書籍商が、僕のためにニューヨーク中から集めてくれたものなんです。僕ではなく、彼らの素晴らしいセンスなんです。僕はこれから一冊一冊読んで、この本が飾り物にならないようにしたいと思います」

顧客は、こんなふうにスピーチをして、その場にいない僕とジャックに敬意を表してくれたと、ペギーさんは

嬉しそうに話してくれた。　その謙虚さにゲストは感動し、とてもいいパーティだったと言った。

その数日後、顧客から僕とジャックに、特別ボーナスがメッセージとともに届けられた。

「すてきな本をありがとう。これからの人生における新しい友だちとして、大切に読ませていただきます。二人の仕事に、敬意と感謝を送ります。ありがとう」

僕とジャックはいただいたボーナスを使って、リトルイタリーの小さなレストランを貸し切り、本の収集にちからを貸してくれた古書店店主、コレクター、ブックハンターらを招待し、ワインと料理を振る舞った。

僕とジャックは、集めた二千冊すべての本に、ある仕掛けを施していることをみんなに話した。

本の扉ページの裏の片隅に、米粒ほどの大きさの「ＹＪ＆ＣＯ」というスタンプを押したことだった。それは僕とジャックと仲間たちという印で、今回の仕事の証を本のどこかに残したかったのだ。だから、万が一、その印のある本が市場に流れたら、ただちに引き取って自分の手元に置いてほしい、と。そして、コピーした二千冊のブックリストを全員に配った。

「そんな仕掛けをしてあるのか。そりゃ嬉しい。買ってもらった本でもあるけれど、集めたのは僕らだ。これだけセンスの良い二千冊の本を集めるのは、もう二度と出来ないし、僕らでなければできない仕事だった。その証がある本はさらに希少になるぞ！　そうだ、このブックリストも希少といえば希少だ」と、ブックハンターの一人は言った。

「確かにもう出来ないだろう。というか、これだけの本はもう揃わないだろう……」

ニューヨークで四十年、古書店を続けている店主はこう言った。

「さあ、みんな乾杯しよう」

僕らは夜通し飲み食いしながら、互いの仕事を称えあい、その喜びを分かち合った。

朝のドーナツ屋で

「さあ、これからどうする？」とジャックは言った。

「君はもう一人前のブックハンターだ。ここニューヨークで仲間もいる。コレクターのクライアントもいる。ペギーさんからの仕事もある。僕がいなくても本の仕事はいくらでもやっていけるだろう」

僕とジャックは、リトルイタリーからの帰り道、ブロードウェイを歩きながら話した。

「うん、僕はニューヨークに来て、ジャックと出会って、本の仕事を通じていろいろなことを学ばせてもらった。それは、本の仕事に限ったことではなく、どんな仕事にも通じる大切なことばかりだった。その多くは人と人とのつながりというか、すべてはコミュニケーションだということを知ったんだ。コミュニケーションとは何か。それは相手に愛情を伝えることだとわかったんだ。仕事とは、困っている人を助けること。そのために世の中の人の感情を深く理解すること。そういうことを僕はニューヨークという街で気づいたんだ」

僕は独り言のように話した。

「ああ、そうだね。君が気づいたことはほんとに大事なことだ。その気づきという種を、これからどんなふうに育てて、どんな花を咲かせたいのか、よく考えるといい。

それが君のこれからのビジョンだね、きっと」

ジャックは夜が明けようとして青くなった空を見上げて言った。

「それより今日、君が着ているリネンのシャツいいな。リネンのシャツは、着て二日目の身体になじんだシワがなんとも言えない良さがある。それ二日目だろ」

「これはジャックからもらったシャツだよ。元々、自分のものだったのに何言ってんの？」と僕は笑った。

「そっか。同じ服でも着る人によって、違って見えるな。君のほうが似合ってる」とジャックは言った。

「ビジョンの話だけど、明日、『コーヒーショップ』で出会ったアシャと会うんだ。彼女も自分のビジョンが何かを今探している。もしかしたら、僕と彼女のビジョンが重なるかもしれない。そんな予感がしているんだ」

「アシャはいい子だ。あんなピュアな子は珍しい。君らは同じ世界を生きているから、きっと何か新しい扉を開くことが出来ると思うよ」

ジャックは僕の言葉にこう答えた。

「でも、一度、僕は日本に帰る。今まで身勝手に旅を続けてきたから、親孝行をしたいんだ。自分の経験が日本で役に立つかもしれないし。そしてまた必ずニューヨークに来るよ」と僕は言った。

「君はもう僕のルーティンを知っているね。だから、いつニューヨークに来ても、僕を捕まえられるだろう」とジャックは笑って言った。

「さあ、あったかいコーヒーを飲んで帰ろう」

ジャックは僕らがはじめて一緒にコーヒーを飲んだドーナツ屋のドアを開けた。朝のドーナツ屋は、揚げたてのドーナツの甘い香りが充満していた。

僕とジャックはコーヒーを注文し、カウンターに座り、何も語らずにぼんやりと過ごした。

「僕らはここで別れよう……」

ジャックはカウンターに肘をつき、マグカップを両手で包みながら言った。

「うん、そうだね」と僕は答えた。

第一部・終

FUNCTION 1

最高級のリネンシャツ

ユニクロのこだわりと情熱を込めたリネン100%のシャツです。最高級のリネンを生み出すことで知られるフランス・ノルマンディ地方。その中でもナンバー1のメーカーに原料となるリネンづくりを依頼。その後の紡績、パターン、縫製といったシャツ作り全ての工程を信頼する中国の会社と一貫して製作しました。

たくさんのお客様に本物のリネンシャツをお届けしたい。フランスと中国、ユニクロのパートナーシップが最高品質とコストパフォーマンスを実現しました。

FUNCTION 2

極上の着心地と楽しみ

生産段階で空気を含ませてふんわりさせる「エアタンブラー加工」を行い、ゴワつきのないコットンのような柔らかさを実現。またリネン素材では避けられない生地表面のネップ（糸のかたまり）を全て手作業で取り除き、極上の風合いを生み出しています。

今季は色付けにもこだわりました。13色の無地、6色のストライプとチェックをご用意。先染め、後染め、デラヴェ加工（特殊な染めの一種）と、色ごとに最適な染め方を採用して表情豊かなバリエーションを展開しています。

夏だけでなく、
一年中着たくなる、
リネンの肌さわり。

松浦弥太郎

MEN
プレミアムリネンシャツ（長袖）
¥2,990 ＋消費税

2018.4.24

039
特別編

早起きして朝食を食べに行こう。

旅で着る服

ノートの白いページに「旅」と書く。そして、自分で書いた「旅」という文字をじっと見つめる。そうすると、「旅」という文字の中に、見えてくるもの、聞こえてくるもの、感じるものがある。

大きな空、広い景色、街の音、人の声、あの匂い、あの色、あのぬくもり、あの人のこと、いつかの記憶。

「旅」という文字を書くと、ゆっくりと扉が開くのがわかる。旅の扉だ。

いつだって、そうやって僕の旅ははじまる。さあ、今日はどちらに歩こうか。街のほうか、それとも海のほうか、この道をまっすぐ行こうか。山に登ろうか。そこには何があるんだろう。地図は持たない。そう、地図は自分で作るんだ。それが旅。

旅の支度くらい楽しいものはない。思い切りわがままになれるからだ。いわばとびきり自由ってこと。自分がいちばんリラックスできるように、どうすればいいのか。それを考えながら、あれやこれやと揃えていく。わくわくする。うれしくなっていく。旅の醍醐味だ。

旅の服について考えよう。

無くてはならないのは、肌さわりのよいコットンの

Tシャツ。たとえば、その上に、肉厚で、少したっぷりしたサイズの、カットソー的なTシャツを着る。要するにTシャツの重ね着だ。これが僕のいつもの旅の装いになっている。

Tシャツ一枚だと、カジュアル過ぎるけれど、その上にしっかりした素材のTシャツを重ねると、ほんの少しだけフォーマルになる。

場合によってはジャケットを羽織ってもいいだろう。とにかく、Tシャツを二枚着るというのは、僕なりの旅の身だしなみである。襟元が二重になっていると、不思議と安心するのは僕だけだろうか。

色の組み合わせも楽しい。ブラックのTシャツのインナーをグレーにしているけれど、この組み合わせはかなりの定番。旅でなくとも、こんなスタイルで過ごすことが多い。

ブラックの代わりにネイビーでもいい。ホワイトのTシャツのインナーに、グレーというのも気に入っている。そうそう、リラックスできるのが基本だから、上に着るTシャツはワンサイズ大きめがいい。

Tシャツの袖を無造作に折って、袖からインナーの色を見せる時もある。

ボトムスはチノパンが絶対いい。Tシャツに合わせて、ゆったりとしたサイズを選ぶ。裾はロールアップして足首を軽やかにすると、ビンテージチノの絶妙なフォルムが、さらに際立ってスタイリッシュに。

旅で着る服の組み合わせは、いつもの服よりもすてきに思えるのはなぜだろう。

さあ、早起きして朝食を食べに行こう。旅先のあの店で、熱いコーヒーと一緒に、とびきりおいしいエッグベネディクトを食べるんだ。

僕はこんな感じがすごく気に入っている。

はじめての旅

はじめて旅したのはいつだろうか。そう思ったら、いつかの光景が目に浮かんできた。

僕は小学二年生だった。当時、飼っていたジョンという名の柴犬と一緒に、僕は知らない街に立っていた。夕暮れだった。

ある日曜日の午後。僕は暮らしていた街のはずれにあった、一人で渡ったことのない広い大通りの向こう側の街を冒険してみようと思い立った。

いつも車や大きなトラックが走っているこの道の向こうには何があるんだろう。もしかしたら、とっても楽しい公園や遊び場があったり、すてきなおもちゃ屋があったり、おもしろいものを売っているお店があるのかもしれない。それを見つけて、友だちに教えてあげよう。あとは、一人で遠くに行けることを、お父さんお母さんにほめてもらおうと思ったのだ。

とはいえ、一人では心細かった。僕は大好きだったジョンを連れていこうと思った。

大通りを渡るために信号待ちした時、ドキドキした。向こう側に行ったら帰ってこれるのだろうか。そう思ったら怖くもなった。信号が青になった時、「行こう、ジョン」と声をかけて、僕とジョンは勇気を振り絞って、大通りの横断歩道を駆け抜けた。

僕とジョンは知らない街をどんどん歩いた。帰る時の目印を見つけながら、まっすぐに歩いた。すると見たことのない商店街があり、たくさんの人で賑わっていた。僕とジョンは、人混みをかきわけるようにして歩いた。どこまでも歩くと商店街の端っこに着き、人混みは無くなっていた。

ジョンがハアハアと口を開けて喉が乾いたようだったので、文房具屋の前にいたおばさんに「すみません、水をくれませんか」と言うと、「ぼうや、水飲みたいの?」と言って、店の中からコップ一杯の水を持ってきてくれた。僕がそれをジョンに飲ませると「犬にコップを使っちゃダメよ」とおばさんが怒鳴った。僕は「すみません、ありがとうございました」と言ってコップを返し、店を後にした。

知らない街には、知らないことばかりで、僕とジョンはキョロキョロしながら歩いた。とても楽しかった。

一時間くらい歩いただろうか、僕はさすがに疲れて、「ジョン、帰ろうか」と声をかけた。そして来た道を戻った。まっすぐ歩いてきたから、まっすぐ戻れば帰れる。そう思った。

しかし、歩けど歩けど、目印にしていた場所を見つけることが出来なかった。日は暮れて夕方になっていた。僕とジョンは道に迷ったのだ。もう家に帰れないかもしれないと思ったら僕は急に悲しくなった。座り込んでジョンを抱きしめた。

「あなたどこの子?」と声をかけてくれたおばあさんがいた。僕は自分の名前と学校名を言い、大通りの向こうから来たことを話した。家の電話番号を聞かれたのでそれを言うと、おばあさんは電話をかけてくれた。「すぐにおかあさんが迎えに来るから大丈夫よ」とおばあさんは言って、僕とジョンにお菓子をくれた。

待っていると、エプロン姿の母が走ってやってきた。母は「何をしにこんな遠くに来てるの?」と僕に聞いた。「こっちに何があるか知りたかっただけだよ」と言って僕は泣いた。ジョンは僕の手の甲をなめてくれた。

僕とジョンは、迎えにきてくれた母と一緒に家に帰った。

そこに何があるのか知りたかった。ただそれだけで僕は歩いた。怖かったけれど楽しかった。はじめての旅だった。

ポケットに文庫本を

チノパンのポケットに入るから、文庫本をいつも旅には持っていく。どこを読んでも、何度読んでも飽きない大好きなヘミングウェイやO.ヘンリーを。

朝はお茶を飲む

お湯さえあればおいしく淹れられるから、部屋ではハーブティや紅茶を飲むことが多い。お気に入りのマグカップも持っていくとどこでもわが家。

ネックをピシッと

Tシャツの二枚重ねが好きな理由は、ネックが二重になることで、少しピシッとすること。こうすると、Tシャツでもルーズに見えない。

だらしなくしない

ワンサイズ大きめのチノパンは、ベルトをしっかり締めて、ウエストの位置を下げないように気をつける。カジュアルでも、だらしなくならないように。

後ろはこんな感じ

重ね着をしたTシャツのインナーが、後ろ姿で、こんなふうにブラックのTシャツからグレーがさりげなくちらっと見えるのがいいのです。

足元はすっきりと

裾を短めにロールアップしたチノパンには、上質な革靴を合わせる。足首をすっきり見せたいから、裸足でも良いし、ショートソックスでも良し。

友だち作りに

旅先では時間がたっぷりある。トランプがあれば、一人遊びはいくらでもできるし、誰かと一緒に楽しむこともできる。知恵の輪ひとつで友だちも作れる。

忘れたくないから

カメラとノートはどこに行っても一緒です。写真を撮れない場所では、ノートにその時の様子を、絵を描くように書き記す。旅とは思い出作りでもあるから。

ずっと旅を続けてきて、
見つけた旅のスタイルは、
普段の定番にもなっている。

松浦弥太郎

上から時計回りに

クルーネックT（半袖）**¥1,000** ＋消費税

スーピマコットンクルーネックT（半袖）**¥1,000** ＋消費税

ヴィンテージレギュラーフィットチノ**¥2,990** ＋消費税

イタリアンサドルレザーベルト**¥2,990** ＋消費税

パイルベリーショートソックス**¥390** ＋消費税

2018.5.1